

第4章 まとめ

第1節 検出遺構について

1 沢検出遺構のまとめ

沢の自然流路内から検出された遺構は、第1号木組遺構、木道、樹皮範囲・杭跡1、板敷遺構、杭跡2、導水状遺構、クリ果皮片集中範囲である。以下にその概要を述べる。

(1) 遺構の形態・機能について

構築された場所やそこから想定される機能には以下のようなものがある。

- A類 第1号木組遺構 - 自然流路内に木材による枠を設け、水を貯めるもの。この上流側にも板材により段差を設けている。
- B類 導水状遺構 - 木材や杭を配置することにより水の流れを変化させるもの。
- C類 杭跡1・2 - 流路の壁に沿って打ち込まれたもの。
- D1類 木道 - 対岸をつなぐ通り道。
- D2類 板敷遺構 - 足場や作業場的なもの。対岸をつなぐ通り道の可能性あり。
- E類 樹皮範囲 - 平面的な広がりをもつもの。
- F類 クリ果皮片集中範囲 - 剥き終わったクリ果皮を廃棄した場所。

A類 水を堰き止めて流路側縁に木材を配して枠を作るということから考え合わせれば、水を貯めて使用する、あるいは一時期に一定量を確保するという意図がみられる。第1号木組遺構の導水部は、貯水部に入る水(水量・水流速度)の調整にあると考えられる。これは、丘陵から段丘崖までの距離が短いという地形のため、この流路の傾斜角度が大きく、砂や泥を巻き込みながら水が流れていると想定され、この水の流れる速度を調整するために板材による段差を設けた可能性が考えられる。このような主体的機能のほかに、水流の調整が行われることで一時的に水の流れが遮断され、水の溜まる場所として利用された可能性がある。現に、容器状の用途不明加工材(図16)や敲き具や作業台?の可能性のある板材が導水部付近で確認されている。

B類 本流と支流の合流部分の手前、支流側で検出されている。検出された大型丸木材が原位置を留めていない可能性もあるが、ここでは、検出位置に基づいて検討する。支流側の水の流れを大型丸木材で抑えることにより、支流側の水の流れをできるだけ一定にするような配慮がみられる。板材を2枚組み合わせ様状になった遺物の検出状況は、本流の水の流れにこの板材を配することにより水の流れを分岐させる働きがあると想定される。本流の流れに直交して打ち込まれた杭列は、やや間隔が開いた状態であることから、水の流れを止めるほどの施設ではなく、上流から流れてくる枝・葉などのようなごみ類を下流側に流さないための施設の可能性が考えられる。本来は杭に枝などを組み合わせたしがらみ状遺構であった可能性が想定される。

C類 自然流路内の南北斜面際に沿って打ち込まれている杭跡で、杭跡1・2とも、導水状遺構や樹皮範囲などの遺構に近接して検出されており、これらの遺構に補足的役割を持つ可能性がある。杭に使用される材は、割材や板材、転用杭などの断面規模が小さいものを使用され、D層まで打ち込まれていることが確認されている。杭跡は、土留としての機能が考えられるほか、検出されていないがD層が斜面際に沿った道であった可能性も考えられる。

D類 沢の流れに直交して検出された大型の板材や割材で、杭によって固定されている木道(D1類)と、固定されていない板敷遺構(D2類)に分かれる。木道に使用された木材には3つの特徴がある。

1 位置が固定される。2 南北の斜面对岸同士をつなぐ規模を有する。3 構成材は平坦面を持つ。これに対して板敷遺構に使用されている板材は、1 位置が固定されない。2 木道として対岸まで到達しない。3 足場として不安定な形状である。などの特徴がある。板敷遺構の設置された面はB層中であり、水の流れはA層〜B層の層理面までほとんど見られないことから、作業場・足場・木道等、様々な可能性が考えられる。

E類 河床面で、樹皮の広がり確認されたのはAN57の範囲のみである。第2章で第1号木組遺構の底板と同様の役割を、前段階で使用された木組遺構の作り替えの可能性について言及した。樹皮を敷いた木組遺構は他遺跡でも確認されており、本遺跡でもその可能性を考えることはできる。しかし、第1号木組遺構からの水の供給に関連性があることを考慮すれば、むしろ木組遺構と一体となって何かしらの場として利用された空間であった可能性の方が高いように思われる。

F類 B層中にはクリ果皮片がもともと多く含まれていたが、とくにクリ果皮片が集中する範囲は、継続的に(あるいは一時期に多量に)その場所が廃棄場になった可能性を示す。

(2) 検出層位別にみた遺構の新旧関係と時期

層位別にみた遺構の検出は以下のとおりである。

C層検出 第1号木組遺構、木道、樹皮範囲・杭跡1、杭跡2、導水状遺構

B層検出 板敷遺構、クリ果皮集中範囲

C層検出遺構の関連性

C層検出遺構は上流側から、導水状遺構・杭跡2、第1号木組遺構、木道、樹皮範囲・杭跡1の順である。これらは同じ層位の検出であるが、厳密に言えば、検出地点等や検出面のレベルが各々異なり、これらの同時期性についての検証も必要かと思われる。

水の流れ	上流	B	A	E	下流
		.		.	
足場?		C	D1	C	

遺構の機能・構造上の分類からみると、各々の遺構がそれぞれの地点で役割を果たし、自然流路内で一体となって機能していた可能性が考えられる。先に述べたように、導水状遺構で水の流れの方向を操作し、第1号木組遺構導水部で水量・水流調整が行われて貯水部内で水のプールが行われ、一定量以上溜まることにより排水部から排水される。排水された水は土留部や木道により土の流入を極力

遅れており、きれいな水のまま樹皮範囲へと注がれる。なお、樹皮範囲より下側には遺構は構築されず、土器の捨て場になっていた可能性が高い。構築時期は、木組遺構出土遺物、C層出土遺物、放射性炭素年代から、円筒下層b式期と思われる。

B層出土遺構の関連性

B層検出遺構は、板敷遺構、クリ果皮片集中範囲である。板敷遺構は調査区の上流域を中心に50cmから1.8mの間隔で南北斜面をつなぐように置かれている。板敷遺構やクリ果皮片集中範囲3・4はそれぞれ検出レベルが異なり、最終的な検出状況から確認されたものである。新旧関係は、

新 52-3 52-1・2・4 クリ果皮片集中範囲4 古
クリ果皮片集中範囲1～3

の可能性が考えられる。クリ果皮片集中範囲4は、板敷遺構の大型板材が置かれる以前にクリの果皮範囲を形成しており、これらが、絶えず形成されるような環境であったと推測される。

遺構からは、D2・F類の機能が得られ、作業足場+廃棄場という2つの機能が想定される。クリ=食料に関連する遺物として、容器としての用途も想定される舟形木製品や漆器類の出土など、板敷遺構周辺の遺物出土状況を見ると、食料の盛り付けや調理に使用されたと思われる遺物と何らかの関連性を持つ可能性もある。一方土器の出土は沢の下流側AN59・60付近に集中する傾向がみられ、これらの遺構付近では土器の廃棄はあまりみられない。土器捨て場と異なり、作業する場としての認識が多かれ少なかれあったと考えられる。

構築時期は、B層出土遺物・放射性炭素年代から円筒下層b・c式に相当すると思われる。

(3) 他遺跡との比較 (図166)

自然流路を利用した遺構は近年増加の傾向をみせており、佐々木氏によりこれらに関わる遺構の集積が行われている(佐々木2000)。第1号木組遺構導水部と同じような構造をもつものとして、福岡県長野小西田遺跡例の「上流側の床を保護するために上流側に柵を設け、直接水が床に当たるのを防ぐ施設を設けている。」(前田ほか2001)もの、栃木県明神前遺跡の貯水部に見られる「木組遺構の南西辺を斜めにし、排水のための溝状遺構と接する部分を狭めることにより、水位を上げ、水の流れをスムーズにする構造になっている。」(鹿沼市2002)など、構造上の共通点が見いだせる。長野県栗林遺跡では他遺跡の例を比較して、木枠遺構内に溜まった水が常時入れ替わって行く構造となるものが多いことが指摘されている((財)長野県1994)。

貯水部内に木材を敷く例は、東北地方でも秋田県柏子所遺跡例(村上ほか2003)などに見られ、これ以外にも全国各地で利用されている。栃木県寺野東遺跡ではこの敷材について「足場的なものと考えたより、きれいな水を保つための行為の所産」(江原1998)との見解が示されている。敷材は、水流に対して木材の長軸が直交して敷かれている例と平行して敷かれている例が見られ、本遺跡例は後者に属するが、これらの違いがどこに起因するかを検討していく必要がある。

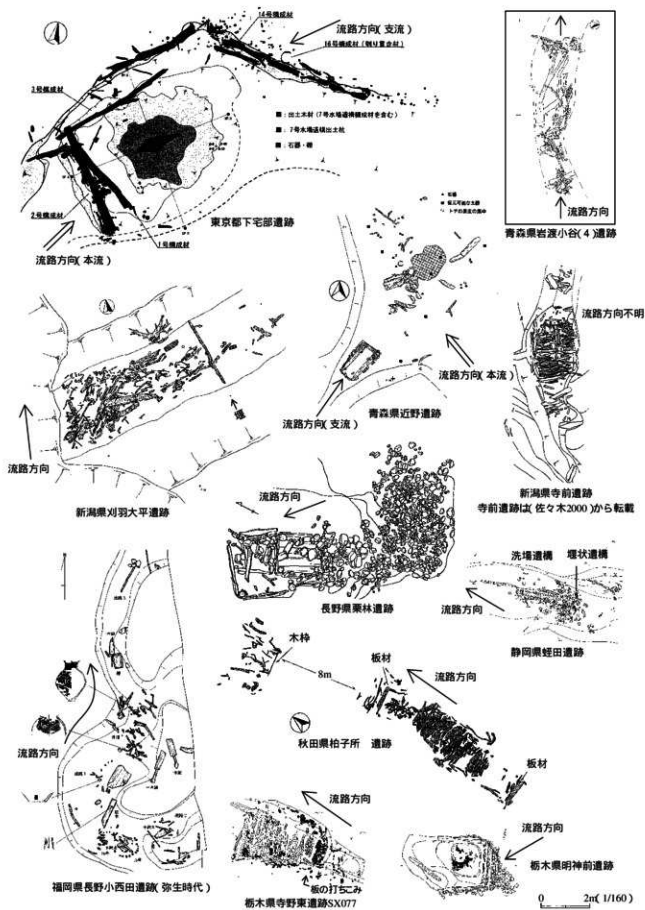


図166 他遺跡の関連遺構

堰部と同じような構造をもつものとして、新潟県刈谷大平遺跡（柏崎市1985）の堰状遺構、静岡県蛭田遺跡堰状遺構（静岡市1990）、東京都下宅部遺跡の第7号水場遺構（東村山市2000）、寺野東遺跡S X 077の主体部北側などが見られる。堰部によって水を上流側に貯める以外に、下流側で施設をもつものが、寺野東遺跡S X 077と蛭田遺跡堰状遺構の下流で見られる洗場遺構である。S X 077は最低3列の板材が打ち込まれており、主体部とこの北側を区切るものと位置づけられている。洗場遺構は「板材を敷き詰め、3方を木杭と直径20cm程の大きな礫により、固定している部分がある。」という状況である。これらは、本遺跡の堰部と堰部下流側の樹皮範囲を合わせた構造に類似している。

出土物の状況からは、先に挙げた長野小西田遺跡例の大型農具水溝場や明神前遺跡例の貯水部内から石斧柄末製品が出土した状況が類似している点が挙げられる。

立地で見ると、一条の小支谷を利用した本遺跡例のほかに、台地の斜面から湧出する水が集まった谷底の水流を利用した拍子所 遺跡例、自然流路内に検出された刈羽大平遺跡例、詳細は不明だが、自然流路内で検出された新潟県寺前遺跡例が見られる。このほか谷本流とその小支谷に遺構が作られる青森県近野遺跡例（村上ほか2003）や寺野東遺跡例、下宅部遺跡例などがある。

（4）民俗例からみた例

栗林遺跡で検討されたように民俗例から第1号木組遺構の機能を想定してみる。

ドングリの水さらし トチノキの水さらし例は多く紹介されているが、地方や時代によって少しずつ異なり、多種多様になる。ここでは、トチノキの水さらしには触れず、ドングリの水さらし例を検討する。東北地方ではシタミと呼ぶ（コナラ・ミズナラなど）もので、外皮をとり、水に入れて皮を流し、袋に入れて絞り、上澄みを替える。上澄みを何度も変えることにより、得られる食料である。ワラビ澱粉（ネバナ）の水さらし（三浦1983、柴田1999）根を取りだし、川端で洗い、板間の上で杵により砕き、キツ・キツ（根杵）にいれゴミや汚れを除く、すだれを置いて、置き汁を通し、底に沈むのをまち、何回もこれを行う。得られたものは、近世には糊としても使用されたという。ウルシの枝まわし（河南1993）第1号木組遺構では、炭化したウルシ属の種子が出土しており、ウルシの木が木材に加工されていることや漆器が出土していることから、遺跡周辺に自生していた可能性は高い。利用された可能性を考慮して紹介する。

枝まわしは、10・11月ころ、枝を落として適当な本数に束ねたものを10～20日間（『農業全書』では5～7日）切口を下にして水に漬ける（流水でも池水でもよい）。これを取り上げて切り込みをいれると、水分があがって汁がでるようになるとされている。これは、接着力が強く、修理用に使われたいらしい。

（5）遺構の機能と構築時期

本遺跡の沢内に形成された遺構は水を利用した施設である。沢を流れる水を「貯める・利用する」施設であり、これを補助する機能を持った様々な施設を設けている。導水状遺構によって流水の流れを保持し、木道等により、作業に必要な通路を設け、第1号木組遺構貯水部で水を貯め、下流側の樹

皮範囲に水を流している。

他遺跡の例と比較すると、第1に想定されるのが、堅果類のアク抜きを主体とする水さらし場遺構である。先述したようにきれいな水を得るための様々な工夫が行われている可能性が高く、きれいな水を常時・多量にということであれば、民俗例に紹介したようなコナラ節の水さらしが想定される。しかし、佐々木氏の指摘するように（佐々木 前掲）トチ塚などのように特定の種類の堅果類が多量に出土しない限り、人為的所作を論じるのは難しい。コナラ属はクリと違って集中範囲等は確認されていないが、細片となったコナラ属の破片が沢の堆積土各所から出土しており、わずかに利用された痕跡が認められるのみである（第3章第11節）。仮に第1号木組遺構の貯水部が単純に堅果類の水さらし場のみで使用されたとすれば、貯水部の規模や破片量からすれば非常に少ないと言わざるを得ない。

第2に想定されるのは、先に挙げたワラビ澱粉の水さらしである。これは、根菜類を掘り上げたと思われる掘り棒（第2節3木質遺物）が貯水部北側でまとまって出土したことや貯水部上面で槽が出土したことから（図18）可能性の一つとして挙げられる。

第3に想定される機能は、貯水部内底面から石斧柄未製品が置かれたような状態で出土していることと関連する。弥生時代の例であるが、長野小西田遺跡の大形農具水漬場にみられるように木器を水漬けする施設としての機能も考えられる。これは、広葉樹の場合とくに強度を保つのに見られる事例である（山田昌久氏の御教示による。）。このほか、伐採実験等の例であるが、石斧の装着部を樹皮で縛って補強しており、石斧を使用しない間は樹皮の強度を保つために水に浸すことを行っている（渡邊晶2000）。

このほか、貯水部での水を貯める機能ばかりでなく、4列目の構造を持つ埋部は完全に貯水部とその下流側を遮断する役割が求められたと考えられ、排水部から流れる水量は常に一定であることが求められたものと思われる。これは下流側に位置する樹皮範囲との間わりが想定され、樹皮そのものを使用するために一定量の水で湿らせた可能性も考えられる（山田昌久氏のご教示による。）。また、貯水部と埋部の上面からも桶状の用途不明加工材が出土しており（43・2・10）この木材を使って水を流していたことが想定される。

また、貯水部と埋部の上面からも桶状の用途不明加工材が出土しており（43・2・10）この木材を使って水を流していたことが想定される。

以上のように、第1号木組遺構は機能を限定されるものでなく、堅果類の水さらし、根菜類の水さらし、木材の水漬け場、洗い場、等水の利用に関わる様々なものに利用された複合施設と考えられる。

2 台地検出遺構のまとめ

2カ年の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡33軒、土坑23基、土器埋設遺構75基、焼土遺構15基、小ピット群2箇所、土器捨て場2箇所である。遺構に関しては、使用時期の可能性が高い時代の項目で述べることにする。

（1）竪穴住居跡（図167）

縄文時代前期の竪穴住居跡31軒について述べる。

平面形 円形・隅丸方形のように炉から壁面までの距離がほぼ等しいものが合わせて14軒、楕円形・隅丸長方形のように壁の長さが異なるものが合わせて16軒、台形のもの1軒である。県内で検出された前期の住居跡で最も多いのは楕円形であり、円形住居跡の占める割合が高い。また、津軽地方には円形が多く、南部地方には大木式土器文化の影響と思われる方形の住居跡が多い傾向がある。

平面形の分類(推定のものも含む。)

1類 円形のもの	1・4A・4B・5・7・14C・18・23・25・26・28・29	12軒
2類 隅丸方形のもの	10・11	2軒
3類 楕円形のもの	2A・2B・14A・14B・21・22・27	7軒
4類 隅丸長方形のもの	3・6・8・12・13・16・17・19・24	9軒
5類 台形のもの	20	1軒

規模 2 m以上 5 m未満の小型住居跡が全体の半数を占める。5 m以上 7 m未満の住居跡も全体の四分の一程度を占める。10mを超える大型住居跡が1軒検出されている。

縄文時代前期の遺跡を規模別に見ると、発掘調査の面積や立地、帰属時期などの違いがあるが、青森平野の他遺跡に比べて、2～5 mの小型住居跡の割合が高い。とくに、竪穴住居跡の検出数に

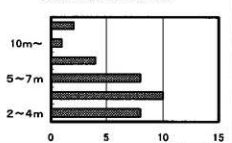
比べて10mを超える大型住居跡が少ないのが特徴である。

主柱穴配置 住居跡中央に位置する炉やピットを中心に1本柱、2本柱、3本柱、4本柱、5本柱、6本柱が見られた。中でも半数以上を占め最も多い

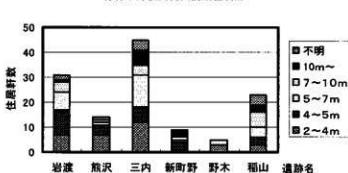
のが4本柱やその可能性が高いものである。ついては2本柱、1本柱と続く。4本柱の主柱穴配列を持った住居跡は縄文時代前期の各時期に見られるが、柱の本数は住居の規模によって決定する側面もあり、一概にいえないが、4本柱が住居の規模に関わらず、主体となるのは円筒下層d式期からとなる傾向がある。2本柱の主柱穴配置も円筒下層d式期にも見られるが、多く検出される傾向にあるのは円筒下層b式期である。

炉 住居跡中央に位置する地床炉である。浅い掘りこみを持つものやピット状に掘りこむもの、土坑状に大きく掘り込むもの等が見られる。焼土・炭化粒が検出されない掘り込みもあるが、位置関係から炉として捉えている。

前期竪穴住居跡規模別軒数



青森平野検出縄文前期住居跡



住居内出土遺物 竪穴住居跡内の出土遺物から、帰属時期を確定できるものを分類した。

A 床面、貼床出土、床面直上出土土器で型式の把握できるもの

円筒下層b式に相当するもの - 第5・6・8・22・29号住居跡

円筒下層c式に相当するもの - 第11・13・25号住居跡

円筒下層d式に相当するもの - 第4A・14A・16号住居跡

B 破片資料や堆積土出土遺物から把握できるもの

円筒下層d式かこれ以前(遺物包含層下) - 第21・23・26・27号住居跡

(拡張) - 第4B・14B・14C

(重複) - 第17・18・19・20・24号住居跡

下層b～d式土器が出土する住居跡 - 第1号住居跡

下層b～d式、中期の土器も出土する住居跡 - 第2A・2B・3・7号住居跡

C 出土遺物から判断できないもの - 第10・12・28号住居跡

住居跡中央のピットと接する溝跡 第13・14・29号住居跡で確認されている。いずれも沢原のやや上流側に立地しているのが共通している。14・29号住居跡の住居外へと連続する溝は斜面の等高線に対して直交しており、沢への排水施設として捉えることは可能である。とくに第29号住居跡は第1号木組遺構と同時期に存在した可能性が高く、この溝を排水としても、木組遺構に影響のない場所に立地している。類似した例は稲山遺跡第7号住居跡でも検出されている。遺跡内で最も低い斜面地に立地し、斜面の等高線に直交した溝が住居中央のピットに続いている。しかし本遺跡第13号住居跡と同様、住居外に延びる溝が確認されていないため、別の機能も想定される。

重複関係 住居跡の重複(拡張除く)第13 第14号住居跡、第24 第27号住居跡、第16 第17・20号住居跡、土器埋設遺構と重複 - 第12・26号住居跡 焼土遺構と重複 - 第28号住居跡

帰属時期 以上のような属性から竪穴住居跡の帰属時期を大きく 〰 に分けた。拡張前住居跡は拡張後住居跡と連続しているため、同列に扱った。

南側斜面

北側斜面

期 (円筒下層b式期相当・これに近い時期)

23・29・(24)

5・6・8

期 (円筒下層c式期相当・これに近い時期)

25・26・27

11・13 (12・17・20)

期 (円筒下層d式期相当・これに近い時期)

16・19・1814A・14B・14C、4A・4B、2A・2B

1、3、7、21・22、

期 小型住居跡が沢の両側に点在していた状態と考えられる。三内丸山遺跡でも、平面形は楕円形または隅丸長方形、支柱穴は炉を挟んで2または4基、炉は地床炉、浅い掘りこみで使用されたもの

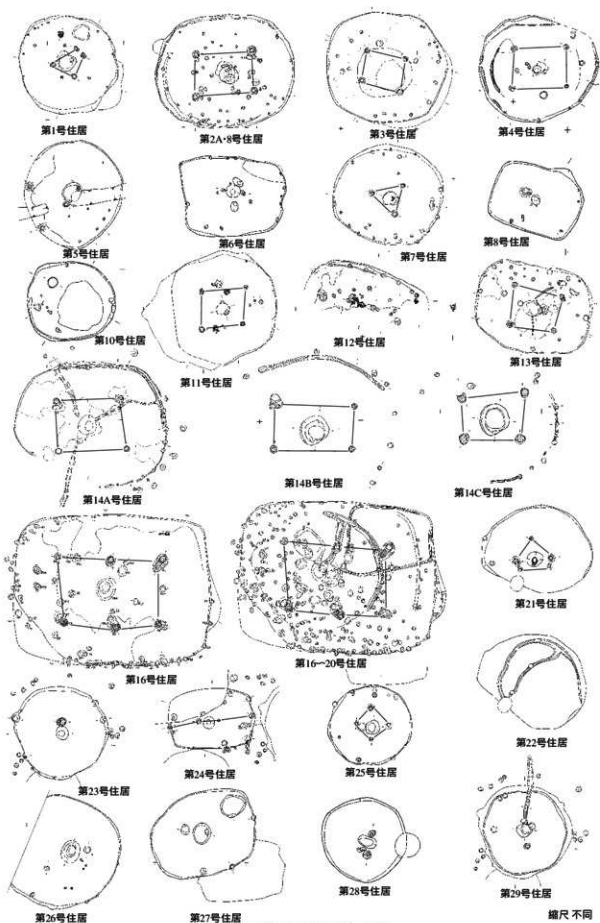


図167 前期の竪穴住居跡 集成

(青森県1996)などの特徴を有している。

期 平面形は隅丸長方形・円形で、期よりも規模が大きい。炉は地床炉(青森県 前掲)

期 楕円形または隅丸長方形、炉の周囲に支柱穴が4本配置され、地床炉が検出される。大型住居跡が構築されはじめる。大型住居跡は拡張しているものもあり、長い期間継続していた可能性がある。

(2) 土器埋設遺構(図168)

土器埋設遺構は75基検出され、北側斜面で8基、南側斜面で67基が検出されている。縄文時代前期の土器埋設遺構が遺跡で検出される量としては北東北・北海道の中では最も数が多い。ここでは、本遺跡の出土例を中心に集落内での位置づけを考えたい。

埋設形態の分類

単体埋設

- 1 正立 土器口縁部を上にして埋設されているもの(1・8・11・12・15~17・19・21・23・24・29~32・35・36・44~46・48・51~55・60・61・66・70・77・85~87埋)。
正斜 土器口縁部を上にし、斜めに埋設されているもの(14・37・65・67・68・72~74埋)。
正重 正立状態の土器が重なっているもの(78埋)。
- 2 倒立 土器底部を上にして埋設されているもの(9・10・13・38・39・57・59・63・71・79埋)。
倒斜 土器底部を上にして斜めに埋設されているもの(43埋)。
倒重 倒立状態の土器が重なっているもの(22埋)。
- 3 合口 土器の口縁と口縁を合わせて埋設しているもの(18・27・41・58・62・64・69・80・84埋)。
- 4 横転 土器が横にして置かれているもの(56埋)。

複数埋設

- 1 正立(81・82埋) 2 倒立(25・26埋)

その他の要素として、

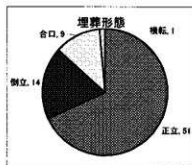
- A 埋設された土器の外側に石を置くもの B 埋設された土器内に遺物を混入するもの。

埋設形態

斜位の埋設を含めると、全体の7割が正立状態での検出である。倒立は全体の約2割で、この他に合口、横転状態のものが続く。斜位の埋設の場合、斜面地であることも考慮しなければならないが、ほぼ平坦の地形でも斜位のものが含まれることから(14埋)地形による要因なのか、本来の埋設形態であったかを探る必要があると思われる。

使用部位 調査時には原形を留めていた土器で、接合しな

かったものは略完形の土器に含めると、完形・略完形22基：口縁～胴部21基：胴部～底部24基で割合はほぼ同率である。底部としたものは7基で残存器高が5cm前後のものであり、上部の状態が不明なものがほとんどである。土器を埋設するために、意図的に土器を割り取った可能性があるものは、倒立



土器で底部を欠くもの（9埋）や重ねた状態で埋設され底部を欠くもの（22埋）である。このほか可能性のあるものは、合口の蓋である。また、内面に炭化物が付着している土器が12点みられ、日常の道具として使用されたものを埋設していると思われる。

他遺構との関係 北側斜面の2埋・5埋は竪穴住居跡のほぼ床面で検出されている。5埋は底部下半のみ検出されており、仮に土器上部から埋設されていたとすれば、高いレベルから掘りこまれると考えられ、住居跡よりも後に埋設された可能性がある。2埋は土器の

上部が約5～10cm欠けた状態で住居跡の床面から検出されているため、住居跡の使用時期がこれに極めて近い廃絶直後に埋設された可能性がある。しかし、住居跡の遺存状態が悪く、詳細は不明である。

南側斜面の84・85埋は26住の堆積土上位から検出されている。確認面の下10～20cm下で検出されており、とくに84埋の上部は埋設の状態から、壊れていないものと推察される。このことからすると、南側斜面の住居跡群の堆積土上面に広がっていた捨て場は、84・85埋よりも新しい時期に形成された可能性が高い。

下層d₁式の土器埋設遺構は捨て場1に隣接し、一部は捨て場内に埋設されている。

土器埋設遺構の内容物 今回、第18、21、25・26、39、60、62、64、69、81・82埋のリン酸分析を行い、この内18・62・21埋の土器内土壌、64埋の底部土器、21埋内部から出土した石器の脂質分析を行った。この結果、リン酸分析ではリン酸含有量が土器内土壌で周辺の土壌よりも若干高い傾向が窺えた。脂質分析では、全体的にパルミチン酸とオレイン酸が高く、経年変化の影響が大きい。他方、64埋の底部土器は経年変化の影響が他の試料に比べて少なく、動物由来のコレステロールが高いという結果がみられた。64埋は合口の埋設形態で、遺構内には、埋設後に流入したと思われる堆積土が底部付近に堆積しているのみで、ほぼ空洞の状態で検出されている。このことは、動物由来のものが土器内部に埋設されていた可能性も示唆するものであるが、同時に土器埋設遺構に使用された土器が日常的に使用された土器であったことも考慮しなければならない。検出事例の増加や、より精密な取り上げによる脂肪酸分析そして、その評価には慎重さが求められている（末木1999）。

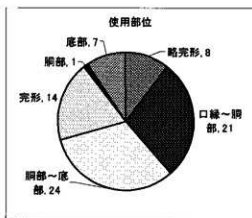
土器埋設遺構に関わる遺物とその出土状況をまとめた。

A類 埋設された土器の外側に石を置くもの

上部に石皿	62・64・84埋
下部に石皿	19埋

B類 埋設された土器内に遺物を混入するもの。

磨石	19埋
----	-----



磨石・石匙・スクレーパー	21埋
自然礫	78・80・84埋
石皿片	85埋
内部が空洞	64埋

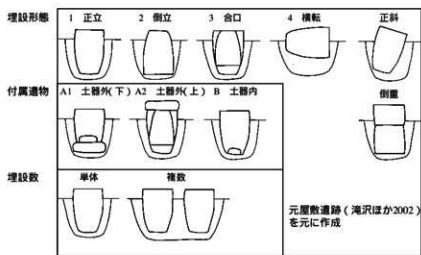
上部に石皿をもつものは3例みられる。いずれも埋設形態が合口であり、検出状況から明らかに蓋の上の土器を押える役割を果たしていると考えられる。これらはすべて石皿で、2例が土器の直径よりも大きいものである。比較的平らな石を使用するのが特徴である。土器の下部に石皿を置く1例もあり、これも平らな石皿を使用している。

一方、土器内からは自然礫・磨石・石皿片、石匙・スクレーパーが出土している。とくに、埋設形態が合口で明らかに土器内部に埋納された遺物とされるのが、80・84埋の自然礫である。形状が不整形で平坦な面などを有さない自然礫は、土器埋設遺構外部に使用される石皿類とは異なる要素をもつものと思われる。また、19埋で土器外部に使用された石皿と内部から出土した磨石も形状が異なる。これらのことから土器内出土遺物を再び見ると、磨石・石匙・スクレーパー・自然礫などは土器内に埋納された可能性が高い。しかし、石皿については85埋において土器内部から出土した例があり、埋納された可能性もあるが、土器外に置かれたものが土器内部に移動した可能性もある。後者の場合は、土器上部の蓋の役割を果たしたのは「編物・樹皮・獣の皮・葉等」であった可能性も示されており（末木 前掲）これらが腐食して土器内に流れこんだとも考えられる。この場合、土器内の堆積状況を検討する必要があると思われるが、これに関しても、土器内という非常に狭い範囲で検討するのは非常に困難である。このような意味においては、土器内部がほとんど空洞であった64埋は貴重な検出例である。しかし、すべての土器埋設遺構が空洞であったかという問題や、空洞であることの解釈の問題（末木 前掲）などがあり、さらに検討する必要があると思われる。

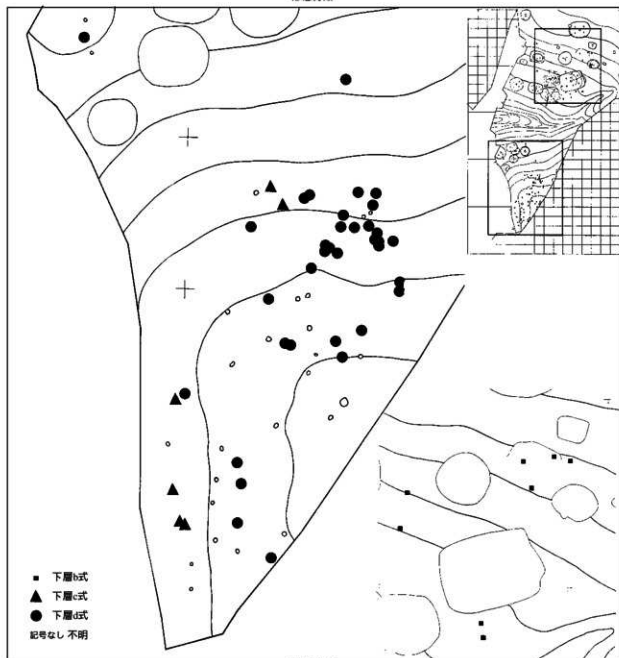
時期別変遷 75基の内、43基が型式を特定できる。概ね下層d₁式の割合が最も高く、次いで、下層b・c式が続く。南側斜面頂部では、胴部から底部にかけて出土する土器が多く、型式を特定できなかった。これらの土器の器形は、底部から直線的にならず、胴部上半で内湾気味に立ち上がる器形や土器内面の調整から、下層d₁式に相当するものが多数含まれると推測される。

前期中葉～後葉（円筒下層b式相当）標高35～39mの北側斜面地に土器埋設遺構が構築される。これは竅穴住居跡の周辺に位置するもので、住居跡と土器埋設遺構は近接した関係を持つ。埋設形態もすべて正立であり、土器の径よりも一回り大きく深く掘りこみ埋設している。底部付近および口縁部を欠く土器もある（1埋・8埋）

前期後葉（円筒下層c式相当）南側斜面の頂部西側が多いが、一部は標高37～38mの斜面地にも分布する。住居跡は南側斜面及び北側斜面で見られるが、土坑墓と考えられる土坑（23土・19土）が南側斜面でのみ検出されており、土器埋設遺構の分布と重複する可能性がある。土器などの捨て場は頂部捨て場・住居跡周辺（沢内）から出土が認められることからこの範囲であった可能性が高い。このことから、前段階よりも若干住居跡から離れて土器埋設遺構が構築されたと思われる。埋設形態には



形態分類



型式別分布
図168 土器埋設遺構

は合口の埋葬形態が認められ、上部に石皿を置く例や土器内部に石を納める例がみられる。

前期後葉～末（円筒下層d式相当）南側斜面の頂部から標高37～40mの斜面部に集中する。竪穴住居跡とは沢を隔てており、直線距離で約20mである。捨て場1が南側斜面全体に広がり、沢内からも土器が大量に出土する状況を考えて、土器埋設遺構の範囲は土器捨て場と一部範囲が重なるもののさらに住居跡から遠く、空間的にもっとも離れた場所であったと思われる。埋設形態は比率からみれば正立が多いが倒立・倒置、合口、複数埋設（正立・倒立）など多様である。

他遺跡との比較

捨て場内や廃絶後の住居の堆積土に埋設される例は多く、稲山遺跡で検出例が見られる。三内丸山遺跡では円筒下層a・b式期から住居跡・埋設土器の検出例があり、この傾向は円筒下層c・d式にも認められる。住居跡の周辺に埋設土器が分布しているようにみえるが、詳細は不明である（青森県1996）。畑内遺跡では、下層c～d式期に埋葬の場と遺物を捨てる場は分布範囲が重なる傾向がある。逆に、竪穴住居跡が構築される近辺に立地するものは下層a～b式に比定されるものであり、本遺跡と同じ傾向である。このように、集落内での土器埋設遺構は生活の中心として使用されない場、2次の場に構築されている。

（3）土坑

本遺跡から検出された土坑は22基である。分布は大きく2つに分かれ、北側頂部から斜面にかけてと南側斜面頂部付近である。

出土土器などから時期を類推できたのは19基で、縄文時代前期10基、中期1基、後期1基、前期～中期2基、中期かこれ以前1基、平安時代4基、時期不明3基である。

土坑の平面形状は、調査範囲の外側に立地し完全に調査出来なかったものも含まれるが、円形、楕円形、方形の3つに大きく分かれる。円形基調16基、楕円形基調2基、方形基調4基である。このうち、方形基調のものは火山灰の堆積状況からすべて平安時代のもので、とくに14土は炭層と推定される。この近辺から他の3基も検出されており、何らかの関連性があった可能性もある。以下に、楕円形基調2基、円形基調の比較的時期が想定できる縄文時代前期3基、後期1基の土坑について整理してみる。

楕円形基調の土坑 いずれの土坑も長軸方向がほぼ北方向である。縄文時代前期の19土は土坑の北側底面からリフレイク2点、この上部に挟入扁平磨製石斧1点、若干位置をずらした上部に完形土器1点が出土した。東側底面からは石筥1点が出土している。同様の遺構は、熊沢遺跡第12号遺構、秋田県池内遺跡（櫻田ほか1999）などでも確認されており、池内遺跡検出の遺構は「土坑墓」と報告されている。本遺跡例も形態・堆積状況・遺物の出土状況から土坑墓と考えられる。縄文時代中期の7土は土坑底面中央から横倒し状態の土器が出土し、壁際に近い部分からは磨石が1点出土している。リン酸分析では、周囲の土壌との差が認められず良好な結果が得られていないが、土坑の平面形や規模、遺物の出土状態から土坑墓の可能性が高い。

円形基調の土坑 出土遺物から、縄文時代前期の土坑4基、後期の土坑1基と考えられる。断面形

状はフラスコ状で、3・5・6・21号土坑は堆積土中位から底面にかけて埋め戻されている。17土は堆積状況から判断できなかった。フラスコ状土坑は一般的に貯蔵穴としての機能が想定されている。

しかし、21土の遺物出土状況は底面直上の壁際に土器を倒立させており、特異な出土状況を示している。フラスコ状土坑が別の機能をもつと想定される場合、土坑墓となる可能性が高い。フラスコ状土坑の場合、「壁際付近で、底面から20cm程度の間から遺物が出土している例」は墓の可能性を指摘している（南北海道1999）。また、神奈川を中心とした関東の事例であるが、倒置土器が土壌の端部に埋設され、胴下半部ないし底部を欠く事例を紹介している。そしてこれらの倒置土器が遺体の頭部を覆う役割を持つ可能性を指摘している。神奈川でのこのような例は縄文時代前期後葉から認められているとされている（山本2003）。

以上のような遺物の出土状況から、21土は最終的に墓として利用された可能性がある。このほかの3・5・6土はその断面形状や遺物出土状況から、貯蔵に使用されると考えられるフラスコ状土坑の可能性が高い。

（4）遺物出土状況（図169）

土器は、調査区全体で破片数約107,700点、重さ約1583kgの土器が出土している。遺構全体（住居跡・土坑・土器埋設遺構・焼土遺構・小ヒット群）から出土した土器は、破片数約26,700点、重さ約346kgで、これを除いた遺構以外の出土数量は破片数約81,000点、重さ約1237kgである。南側斜面の頂部捨て場から出土した土器は、破片数約3,674点、重さ約44kg（図169の数字は全層集計したもの）、斜面捨て場 層から出土した土器は破片数約33,385点、重さ約383kg、沢から出土した土器は破片数約33,166点、重さ約680kg、出土地は南側斜面と沢内にかけてのA D—A P・52—63で、大多数が縄文時代前期後半の土器片である。出土層位は第 層が全体の約8割を占める。沢の第 層は大きくA—Cの3層に分かれ、各層でも多くの土器が出土している。ここで、遺物の集中した出土地をまとめてみた。

頂部捨て場（第352集所収）南側斜面の頂部から南西側斜面地にかけて広がる。細片が多く、復元個体が少ないが、主として円筒下層c・d式が主体と考えられる。

捨て場1（第352集所収）北に面した南側斜面に位置する。頂部捨て場ほどではないが細片が多い。復元個体は円筒下層b・c式も見られるが、d式が最も多く、円筒下層d式主体と考えられる。

沢 調査時にはとくに遺物集中範囲を括らなかつたが、沢の下流側AN・O・59・60、沢の上流側AN54で多く出土している。各グリッド別の出土層位をみると A層出土の遺物が最も数量が多い。沢の下流側では、A層に次いでB層の出土数量も多い。

遺構内（竪穴住居跡を中心に。）南側斜面の住居跡内では、確認面から堆積土上位にかけて捨て場1の遺物が出土しており、堆積土内での遺物の混入はほとんどみられない。北側斜面では、遺構の立地しない場所での出土数量とも少なく、住居跡の埋没過程で混入したものも、捨て場から出土した数量と比べれば少ない量である。

捨て場1の形成 尾根状の斜面に形成されており土器埋設遺構の範囲と重複している。斜面上から

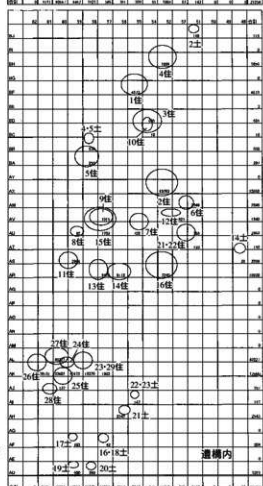
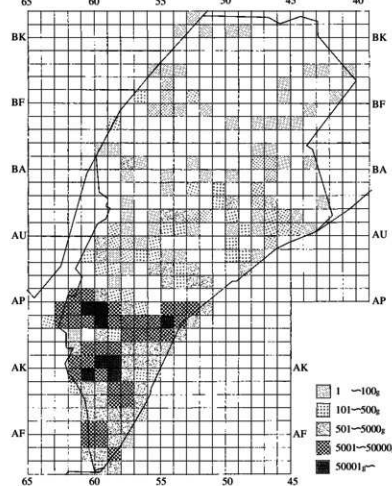
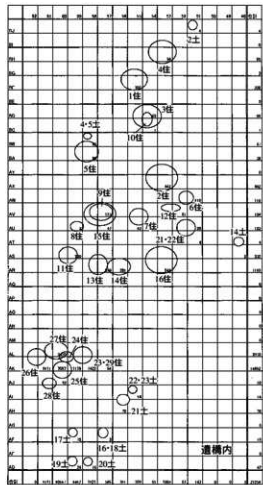
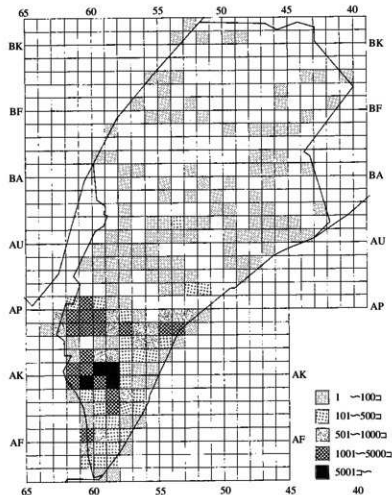


図169 出土土器の破片数と重量分布

沢の落ち際には住居跡が集中し、さらにこの住居跡の堆積土中には土器埋設遺構が構築されていることから、住居跡廃棄後に構築されたと思われる。捨て場1は、南側斜面から沢の落ち際まで広がるが、落ち際には住居跡が集中し、最大幅約10mの平坦地となっている。仮に上部から捨て場が形成されたとしてもこの平坦地で物理的に途切れてしまう可能性は十分にあり得る。このような地形的条件があったにせよ、B層の段階で沢の出土遺物が捨て場1の斜面下に位置するAN・O-59・60に集中することと考え合わせれば、縄文人は主に南側斜面に捨て場を形成し、これが沢内にも広がった可能性があると考えられる。

第2節 出土遺物のまとめ

1 土器

とくに補足を加えたい第・群土器について述べる。

(1) 第群土器

概ね縄文時代早期中葉の貝殻腹縁文を施文する土器群である。沢A～C層、第14・23・25号住居跡、捨て場1、遺構外から出土している。縄文前期の遺跡内の土地利用などで土器が移動した可能性が高い。106-1、捨て場出土土器(352集184-4)は文様構成や施文から物見台式に相当する。貝殻腹縁文を施文する一群(第14・25住、捨て場出土土器含む)は腹縁文同士が平行であること・胴部下半近くまで施文されているものがあることから、根井沼・寺の沢式系統の土器に近い属性を持つと考えられる。このほかに条痕文のみ施文している一群は、第23号出土土器片と胎土・焼成が類似することから、この土器片と同群と思われる。胴部に施文される文様構成から物見台式に相当する。

(2) 第群土器(図171～175)

縄文時代前期中葉～末の土器は出土遺物の大部分を占めており、沢・竪穴住居跡・土坑・土器埋設遺構・木組遺構などの遺構内、捨て場1、頂部捨て場と遺跡全体から出土している。

図171～173は沢・土器埋設遺構・竪穴住居跡出土遺物、捨て場1・頂部捨て場遺物の主な出土遺物をまとめたものである。左側に沢出土C層～A層の遺物でそれぞれの層において主体を占める土器を掲載した。右側には土器埋設遺構の遺物、竪穴住居跡は床直出土遺物、各住居の復元個体、堆積土上位から出土した復元個体、沢出土の遺物で出土層位の主体を占めない個体を掲載した。共伴する事例として土器埋設遺構の出土土器、共伴に準じるものとして、竪穴住居跡床直出土遺物、沢出土の層位と取り上げ番号が同一の出土遺物を挙げた。

とくに沢・捨て場出土の土器は、厳密に言えば、堆積土の主体を示すものではない可能性もあるが、破片を含めた出土遺物を概観した場合でも、復元個体における様相に大きな差はないと思われるため、報告書に掲載した復元個体を中心に論じることとする。また、第4類では稲山遺跡出土の共伴事例を掲載している。

第2類 円筒下層a式 沢C層から出土した復元個体と破片各1点、第23号住居跡から出土した1

点を掲載している。口縁が開き、胴部上半が膨らむ器形であり、無沢遺跡の捨て場、三内丸山遺跡第6鉄塔地区第a層（青森県1998）からの出土例がある。

第3a類 円筒下層b₁式 復元個体はC層、B層、A層、第3・5号土器埋設遺構から出土している。底部から直線的に立ち上がる器形で、文様帯の区画に隆帯を貼付ける。器高に占める口縁部文様帯幅は次のb₂式より狭い。口縁部の文様は結節回転文の割合が多い。隆帯は断面形状が方形で、二条貼付けるものが見られる。

第3b類 円筒下層b₂式 主に沢C層で主体を占める土器で、土器埋設遺構などからも出土している。器形はバケツ形で、底面から真っ直ぐに立ち上がり（器形B）、口縁部には単軸絡糸体を回転施文する。口唇上部は平坦に近く、端部にやや丸味を持つ。口縁直下や隆帯に沿わせて複節縄文を押し出すものもある。胴部は、単軸絡糸体との縄文を施文する割合がほぼ半々で、単軸絡糸体は第1類を施文する割合が高い。三内丸山遺跡第6鉄塔第b層出土土器（青森県1997）無沢遺跡第2号遺物集中ブロック出土土器（小野2000）に出土例がある。

第4類 円筒下層c式 主に沢B層の主体を占める土器で、土器埋設遺構、土坑、竈穴住居跡からも出土している。図104・105に示したとおり、主に沢の下流側でまとまって出土している。ここでは、これらについての特徴を整理していく。なお、この時代の土器群は同じ型式でも地域によって違いが表れているため、主に津軽地方の土器を取り上げることとする。

器形：底面から口縁部まで外側に直線的に開くもの（器形A）、底面から外側に直線的に開くが、口縁部がやや外反するもの、胴部上半がやや張り、口縁部で屈曲し口縁が外反するもの（器形C）などがある。全体の器形のなかではそれぞれに個体差があるが、共伴事例からも、概ね底面から外側に開く器形といえる。

口縁部・口唇部の形状：口縁部はごく緩い波状口縁であることが多いが、平口縁も見られる。口唇部は徐々に先細りしている。

口縁部の文様（図175）：口縁部文様帯が狭くなり、主に単軸絡糸体第1類を側面圧痕する施文技法を用いる。前型式と比較して多種多様になり、b₂式で見られた単軸絡糸体第1類の横位回転施文＋縄文原体の縦位押し施文が消えている。この類では、単軸絡糸体の側面圧痕施文や縄文原体の押し施文方法が変化しており、とくに単軸絡糸体第1類を施文するものが多い。文様構成は、横位に数状施文＋波頂部などの縦位に2～3条施文するもの（1類）波頂部を中心に菱形文に施文するもの（2類）、波頂部を中心に三角形文を施文するもの（3類）に分かれる。3類は三角形文の内部に充填される文様構成からa・bの2種類に分けられる。これらの文様パターンは次のd₁型式まで継続して使用されている。

このほかに、本遺跡では前型式に見られなかった、口縁部に結束縄文を横位に回転施文したものが表れ始める。津軽地方では、円筒下層b式段階から、このタイプが出現しはじめる^(注1)。本遺跡例や三内丸山遺跡出土例などは口縁部に横位の側面圧痕を用いる例もみられ、これに後続する可能性がある。

結束縄文は口縁部文様帯に施文される以外、口縁部文様帯直下から胴部上半までの範囲で施文され

沢

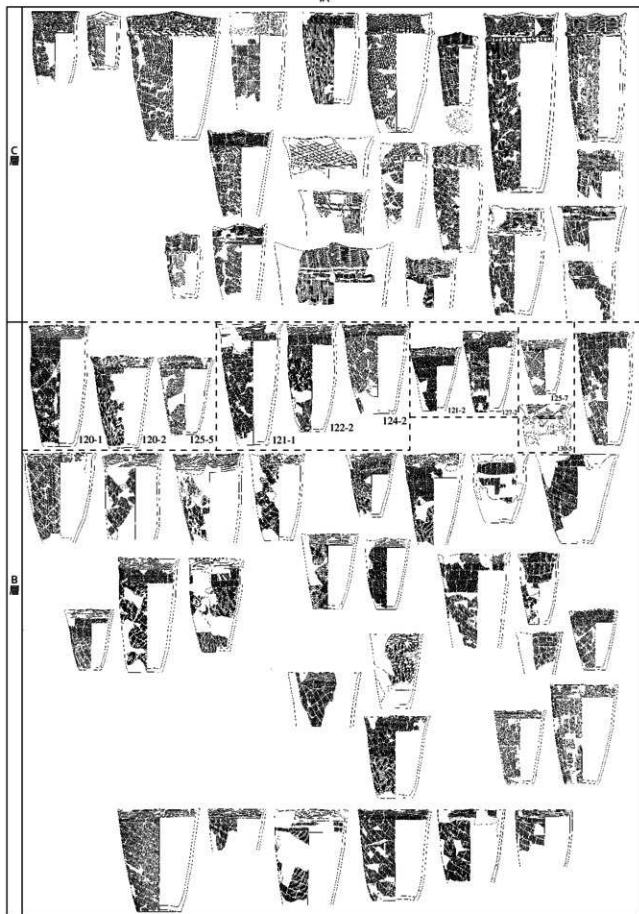


图170 沢 C・B層出土土器

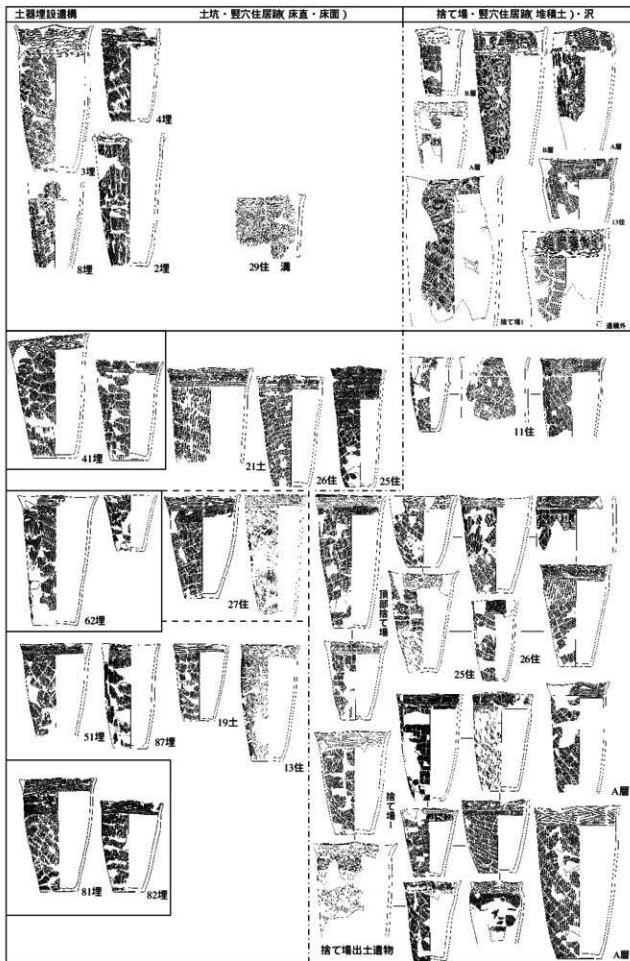
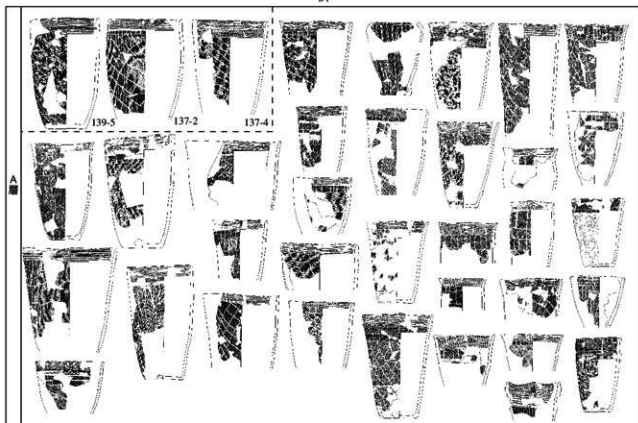


図171 遺構・捨て場等出土土器1



□ 共伴すると考えられる出土状態
 □ 共伴に準ずる出土状態

図172 沢 A層出土土器

るものが多く、d型式でも継続して使用されている。

以上、この類の口縁部文様を概観してみた。前型式から踏襲された文様構成には、単軸絡条体回転施文技法が押圧技法によって変わられるもの（類）前型式で口縁部に単節縄文や結束縄文の横位回転施文をする一群（類）の2つの傾向の土器群が認められる（図175）。

胴部・底部の文様：単軸絡条体の施文がほとんどなくなり、縄文本体を斜めに回転している。前型式まで若干認められた底外面への文様施文は復元個体では確認されていない。

共伴関係と他遺跡との比較：本遺跡出土の先に示した類土器群の特徴を述べる。1 器形は胴部上半がやや張るものが多い（112-3 が顕著な例）。2 口縁部が肥厚せず、先細りする例が多い。3 口縁部文様構成で、波頂部から垂下する文様が少ない（復元個体のみ確認したため、破片資料は不明）。共伴事例やこれに準じる事例（図170・171）では、口縁部の文様構成が類似する場合が多い（81・82埋^(注2)、沢出土121-1・122-2・124-2、沢出土120-1、120-2、11住堆積土出土遺物）。

第 類は、単節縄文の施文例は、b₂式では出土例があるが、c式ではほとんど見られず^(注3)、共伴事例から考えると、b₂式からc式の過渡期に見られる特徴の可能性がある。

注1 田小屋野貝塚では円筒下層 a・b式前半としている。三内沢部遺跡遺物包含層出土例などが出土している。

注2 第352集では下層d式に分類しているが、口縁部で器形が外反していることや口縁部文様帯幅が広いことから、下層c式に改めた。

注3 稲山遺跡1036土、41埋例

第5 a類 円筒下層 d₁式 沢 A層で概ね主体をなす土器で、土器埋設遺構、捨て場1、頂部捨て

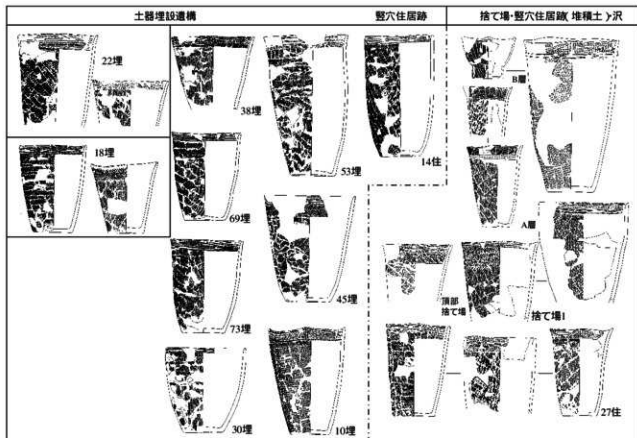


図173 遺構・捨て場等出土土器2

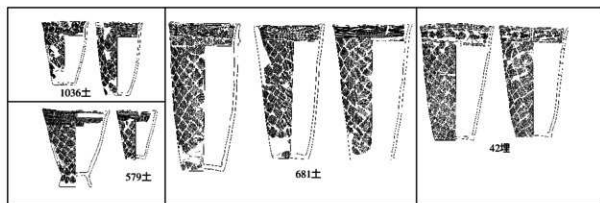
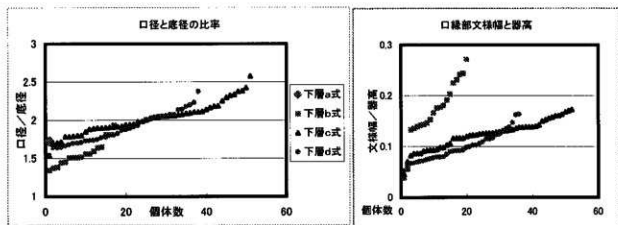


図174 稲山遺跡出土共伴土器



場でも主体を占めるとされる。

器形は底面からやや外側に開くもの、底面からほぼ真っ直ぐに立ち上がるもの、底面から緩やかに立ち上がり、胴部中央から上半でやや膨らみ口縁部がやや内湾するものなどがある（器形D）。c式より底径の規模が大きい。器厚が厚く、胎土が緻密である。内面にはほぼ全面にミガキが入る特徴がある。口唇部の形状は、断面が先細りするもの（c類）と厚みをもち三角形状になるもの（d類）がある。口縁部文様帯は前型式に比べて狭くなり、その幅は3cm以下となる（小笠原2002）。文様構成は前型式の文様パターンが踏襲されるもので、施文される縄文のバリエーションが多くなる。縄文原体は単軸結条体・縄文原体の押圧が主体であるが、単軸結条体の回転施文と単軸結条体第5類の押圧、縄文原体の種類を変えて交互に押圧施文するなど前型式に見られなかった施文方法が加わっている。また、口縁部と胴部文様帯との境界に微隆帯を貼付け、その上部から刺突文が施文されるものもある。文様帯の境界には結束縄文や結節縄文が施文されるが、特に結束縄文は前型式に比べて極めて幅が狭いのが特徴である。胴部縄文には主として縄文原体を斜回転するものがあるが、結束縄文と単軸結条体第1類を縦回転させたもの（縄文原体を斜回転したものもあり）を交互に施文するもの、縄文原体に縄文を巻き付けて回転施文したもの^(注1)がある。

下層c式との比較：不明瞭であるが、器形・口縁部幅・口唇部形状に違いが表れる表で示しているとおり、器高に対する口縁部幅は若干d1型式のほうが狭く、底径と口径の規模に差がなくなる傾向がある。（p.353下表）

注1 当センター職員 茅野氏による指摘

異系統の土器：352集78-26、352集186-20の2点が出土した。いずれも南側斜面の出土である。深鉢の口縁部と考えられ、沈線による施文が見られる。

赤色顔料を塗布した土器片：5点出土している。第3号土坑堆積土から3点、第6号土坑堆積土上位から1点、沢出土のもの1点である。いずれも深鉢片と思われる。第6号土坑出土のものは内外面に赤色顔料が塗布されており、沢出土のものは外面のみ、第3号土坑出土のものは内面のみ塗布である。いずれも摩耗が激しい。

（坂本）



図175 土器の模式図

2 石器

二カ年の調査で出土した石器は、文末の表のとおりである。一部に縄文時代中期のものも含んでいるが、大半が縄文時代前期中葉から後葉にかけてのもので、主に捨て場や沢、住居跡覆土中から多く出土した。剥片石器類ではとくに石匙の出土が目立ち、礫石器類では各種の敲磨器類のほかには半円状扁平打製石器や挟入扁平磨製石器、石皿等が比較的多く出土している。

石鏃は18点の出土で、基部形態による分類では凹基無茎鏃2点、平基無茎鏃6点、凸基有茎鏃4点、尖基鏃5点、円基鏃1点である。この中で、特記されるものに第1号住居跡から出土した尖基鏃があり、器面には赤色顔料と思われる物質が付着している（未分析）。また、第2号住居跡から出土した凸基有茎鏃は、出土状況から縄文時代中期前葉の可能性が高い。本遺跡出土の凸基有茎鏃は総じて茎部の挟り出しが弱いが、第2号住居跡出土のものは丁寧に茎部が作出されており、基部にはターレット状の物質が付着している。

石槍は基部片1点が捨て場から出土した。また、異形石器とした第25号住居跡から出土した基部に突起が付されたものは、尖頭部を欠損しているものの石槍の可能性がある。縄文時代前期には希に見られる石器であり、永野遺跡や畑内遺跡で類品が見られる。

石匙はD1類（縦形石匙）116点、D2類（横形石匙）13点、D3類（両面加工で槍先状の先端部を持つ縦形石匙）3点、つまみ部片のため細分できないもの4点である。D1類の縦形石匙が圧倒的に多く、裏面に光沢痕が観察されるものが多いことが特徴である。また、D3類とした石匙のうち第13号住居跡出土のものは石槍に似たもので、両面に丁寧な調整が施された優品である。また、第25号住居跡出土のものは槍先状というよりは石錐状の先端を持つもので、類品はD1類の中にも2点ある。機能的には刺突や穿孔といった使われ方がなされたものと思われる。

石匙の使用痕分析では、石匙の主な役割が植物資源の切断にあったことが明らかになっている。対象となった植物についての記述はないが、川口による熊ヶ平遺跡での分析ではイネ科植物の可能性が指摘されている（川口1995）。なお、前述の第13号住居跡から出土した両面加工の石匙は、使用痕分析では他のものとはあきらかに用途が異なった石器であるとしている。

石筥は15点の出土である。完形品の10点を対象に大きさをみると、長さ6～8cm、幅2.5～4cmのものが主体であり、1点のみ長さが11cmを越すものがある。刃部は円刃かこれに近いものが大半であるが、直刃のものが1点ある。使用痕分析からは、この直刃の石筥には木の加工に関する道具の可能性がうかがわれている。石筥に似た石器に搔器がある。使用痕分析からは石筥と搔器では被加工物に対する操作の仕方が異なり、本遺跡出土の石筥が皮加工に利用されていたとすれば、その工程によって、道具や対象獣による使い分けなどが考えられるという。

磨製石斧は19点出土したが、このほかに敲石に転用されたものが1点ある。完形品は3点である。また、小型磨製石斧は2点の出土である。擦り切り技法によって製作されたものもあり、擦切痕の見られる原石も1点出土している。

敲磨器類は185点出土したが、この中のKa2類にはスリ幅の広さから半円状扁平打製石器に含めなかったものが10点ほど含まれている。石材には17種類あり、最も多量の石材が選定されている。

半円状扁平打製石器は52点出土し、このうち完形品は19点である。器体の一部あるいは全体にスリ

整形が施されているものが少数例あり、なかには挟入扁平磨製石器と似た石器もある。

挟入扁平磨製石器は51点出土した。完形品は2点で、破損率の高い器種である。なお、完形品のうちの1点は第19号土坑から出土したもので、副葬品と考えられるものである。使用された石材は本遺跡では希少な玄武岩である。石材には11種類あるが、凝灰岩が62%と多数を占めている。

北海道式石冠は3点出土した。うち、1点は第15号住居跡から出土したもので、縄文時代中期に属するものである。他の2点は縄文時代前期中葉から後葉にかけてのものと思われる。石材は石英安山岩と凝灰岩、安山岩質凝灰岩が各1点である。中期のものは安山岩質凝灰岩である。

石皿・台石類は71点の出土である。完形品は10点で、破損率の高い石器の一つである。石皿の大半は自然礫の大礫を素材としているが、板状礫を素材としているものも少数ある。また、片面加工のものが多いが、両面加工のものも18点ある。

石棒は6点出土した。第22号土坑1点、沢4点、捨て場1点である。すべて無頭のもので、いずれも器面は滑らかである。長さ26～34cm、幅10～12cmで、重さは4000～6000gのものがあるが、5000g前後が多い。石材は安山岩2点、石英安山岩4点である。

石剣は1点の出土で、破損品である。第24号住居跡床面からの出土である。石材は輝緑凝灰質片岩であり、これを石材とするものはこの1点だけである。

砥石は12点出土した。このうち、第16号住居跡と第21号土器埋設遺構から出土したものは器面に溝を持った有溝砥石で、比較的小型の石器である。

擦切具は10点出土した。形状や大きさのわかる4点を対象とすると、3点は半円形、もう1点は方形に整形されている。大きさは概ね長さ18～21cm、幅13cm、厚さ1～2.5cmであり、重さ430～580gである。刃部はいくぶん丸みを帯びて摩耗痕が見られ、刃縁には平行する擦痕が見られる。また、1例だけであるが、沢出土品の中に装着痕を現しているかのように刃部以外の広い範囲に煤炭炭化物が見られるものがある。特殊な事例と思われるが、類例の増加を待ちたいと思う。

その他とした石器(Ta類)は25点出土したが、その中に擦切痕が見られるものが2点ある。南区遺構外と沢から1点ずつ出土している。擦切痕は板状礫の側縁に見られ、そこから折りとられている。流紋岩を石材とする小型の石器であり、加工途中の失敗品とも思われる。おそらく板状礫を素材とする石器の一部は、擦り切り技法によって切断されたものもあったものと推定される。

石器の石材傾向

剥片石器類は大部分が珪質頁岩を石材とし、玉髄・玉髄質珪質頁岩・鉄石英・頁岩・黒曜石などが数点ある程度である。黒曜石は楔形石器と剥片の2点の出土である。産地同定分析では2点とも県内の鷹森山、大釈迦、戸門産地等の三ヶ所のいずれかである可能性が高いことが推測されている。

礫石器類の石材には21種類の石材が用いられている。最も多いのは凝灰岩の145点で、流紋岩の114点、安山岩の68点、石英安山岩の66点が続く。これら4種類の石材は大半の器種に用いられており、全体の8割以上を占めている。頁岩や緑色細粒凝灰岩、ヒン岩、輝緑岩は12～18点の出土で、それぞれ全体の2～4%程度を占めている。このうち、ヒン岩と輝緑岩は数量的には少ないものの大半の器種に少量用いられており、緑色細粒凝灰岩は磨製石斧の石材として用いられている。(畠山)

出土石器一覧表

分類	器種	住居跡	土坑	土器埋 設遺構	焼土 遺構	頂部 捨て場	捨て場 1	南区 遺構外	北区 遺構外	表探	沢	小計
A類	石鏃	9				3	4				2	18
B類	石槍						1					1
C類	石鏃	1				1	2		1			5
D類	石匙	38		3		9	31	5	10	1	39	136
E類	石匙	4	1				4	1	2		3	15
F類	楔形石器	1							1			2
G a類	スクレイパー類	49				12	26	4	20		45	156
G b類	Rフレイク	14				2	10	1	3		20	50
G c類	Uフレイク	17	2			1	19	1	2		18	60
H類	異形石器	1										1
I a類	剥片	165	4	1		13	81	14	38	15	126	457
I b類	石核	1				1					6	8
I c類	母岩										1	1
小計		300	7	4		42	178	26	77	16	260	910
J a類	磨製石斧	5				1	1		6		6	19
J b類	打製石斧		1									1
K a 1類	磨器K a 1類	2					1	1	1		4	9
K a 2類	磨器K a 2類	17	1	2		7	3	2	12		22	66
K b 1類	磨器K b 1類	2				1		2	1		15	21
K b 2類	磨器K b 2類	6				4	5	1			20	36
K c類	磨器K c類	5	1		1	1	2	1	6		35	52
K a類	磨器K a類	1										1
L類	半円状扁平打製石器	10				2	5	6	5		24	52
M類	挟入扁平磨製石器	3	1		1	3	5		6		32	51
N類	北海道式石冠	1					1				1	3
O a類	石皿	11	1	4		2	3		2		37	60
O b類	台石	2							2		7	11
P a類	石棒		1				1				4	6
P b類	石剣	1										1
Q類	石錘										2	2
R類	砥石	5		2					1		4	12
S類	擦切具	1							2		7	10
T a類	その他(使用痕跡)	3		1		2	1	3	2		13	25
T b類	その他(搬入跡)	7					2	2	6		22	39
小計		82	6	9	2	23	30	17	53		255	477
総計		382	13	13	2	65	208	43	130	16	515	1387

※前年度に器種不明とした剥片石器2点はスクレイパーへ含む。

※器種不明の磨石器小破片を除く。

石製品一覧表

分類	器種	住居跡	土坑	埋設	焼土	頂部 捨て場	捨て場	南区 遺構外	北区 遺構外	表探	沢	小計
U類	岩偶										1	1
V類	浮き										2	2
V類	軽石製品	2									5	7
	その他										2	2
小計		2									10	12

※住居出土の軽石製品2点は縄文時代後期に属する。

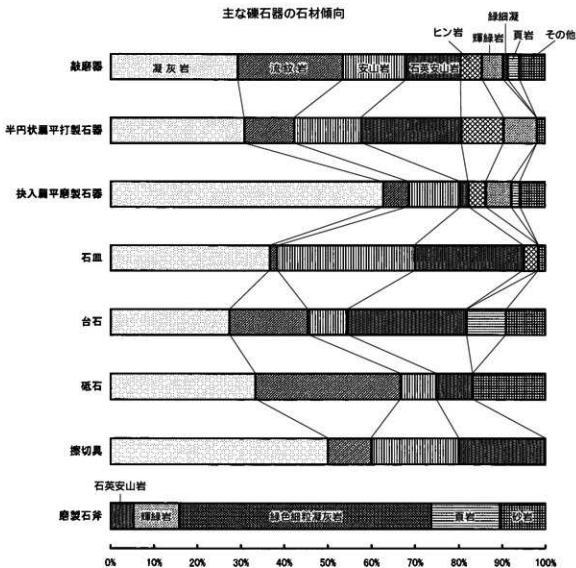
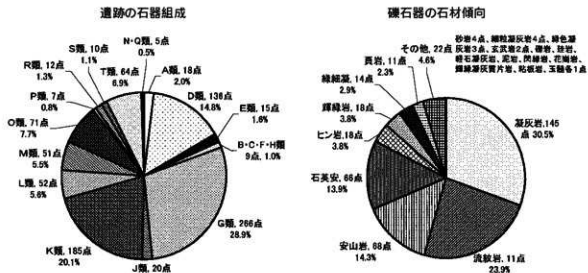


図176 石器組成と石材傾向

3 木質遺物

(1) 木質遺物における選択行為について

1 はじめに

本遺跡における発掘調査の結果、沢地区から縄文時代前期に帰属する1,800点以上のぼる木質遺物が出土しており、これらのうち623点(木製品・木材583点⁽¹⁾、樹皮40点)を対象に樹種同定を実施している(第3章第12節)。図177~180は樹種同定の結果に基づき、(1)全体の樹種組成と器種組成(2)層位別(A~C層)の樹種組成と器種組成(3)遺構構成材の樹種組成と器種組成(4)主要器種の樹種組成(5)主要樹種の器種組成と木取りの各項目に該当するものを抽出し、組成比率を百分率でグラフ化したものである。

本項では、このグラフをもとにこれまでの研究および発掘調査の成果から折に触れ指摘される、木質遺物における選択行為が本遺跡出土木質遺物にも認められるかを検討する。

なお、抽出作業において、層位や樹種が不明なものは各項目の対象外とした。器種の特定が可能な未製品および木製品は、その器種に一括した。遺構構成材の器種組成に限り、転用材は例えば「榧転用杭」は「杭」というように、転用後の名称を使用した。便宜上、板目板・板目材と柁目板・柁目材はそれぞれ「板目板材」、「柁目板材」とした⁽²⁾。いわゆる「みかん割材」は割材に含め、木取りは分割で一括した。用途不明木製品および用途不明加工材は「状」という語を使用せず、一括して扱った。各項目に占める割合が2%未満のものは一括して「その他」とした。

2 樹種組成・器種組成・木取り

(1) 全体の樹種組成と器種組成(図177) 樹種組成はクリが最も多く全体の5割強を占め、次いでコナラ節、オニグルミ、キハダ、ケンボナシ属が優占する28分類群が認められた。本遺跡における花粉分析(第3章第1節)の結果出現した分類群と重複する樹種が多い。また、クリとコナラの優占は共通する。器種組成は杭状先端加工材と板目板材が多く、それぞれが全体の2割強を占める。次いで割材、杭、丸木材、柁目板材が優占する。木製品15器種・木材16器種の合計31器種から成る。

(2) 沢地区層位別の樹種組成と器種組成(図178) ここでは、木質遺物が出土したA~C層について、層位毎に述べる。

A層：樹種組成はクリ、オニグルミ、コナラ節、カエデ属、イヌエンジュの5分類群が認められる。クリが突出して多く、全体の6割強を占める。器種組成は杭状先端加工材が約4割、次ぐ板目板材が約3割を占める。次いで割材、掘り棒、容器、杭などが多い。木製品2器種・木材7器種の合計9器種から成る。

B層：樹種組成はクリが5割強を占め、次いでコナラ節、オニグルミと優占する20分類群が認められる。器種組成は杭状先端加工材、割材、板目板材がそれぞれ約2割を占める。次いで丸木材、掘り棒が多い。木製品9器種・木材15器種の合計24器種から成る。

C層：樹種組成はクリが5割を占め、次いでコナラ節、キハダが優占する25分類群が認められる。組成比率はB層とほぼ同様であるが、ニレ属とウルシが優占樹種の上位になる。器種組成は板目板材、杭状先端加工材がそれぞれ約2割を占め、割材と杭がそれぞれ約1割を占める。木製品10器種・木材14器種の合計24器種から成る。

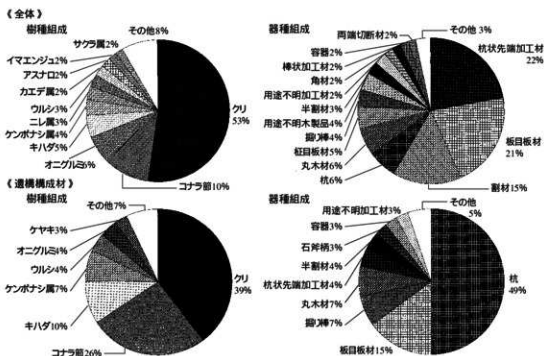


図177 樹種組成・器種組成1(全体・遺構構成材)

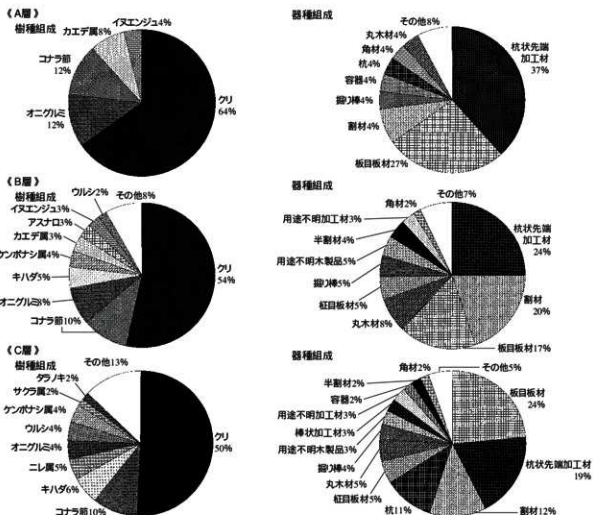


図178 樹種組成・器種組成2(層別)

各層を比較すると、樹種組成ではクリが5割もしくはそれ以上を占め、コナラ節、オニグルミが主要の樹種であること、器種組成では杭状先端加工材、板目板材、割材の3器種が大部分を占めるが、

A層とB層を境として大きな変化がみられ、A層に比べB・C層の樹種は4ないし5倍、器種は約3倍に増加し、木製品：木材はA層がおおよそ1：4であるのに対し、B・C層では2：3になる。また、C層は第1号木組遺構をはじめとする遺構群が検出されていることにより、遺構構成材に多用される板目板材と杭の占める割合が増加する。

(3) 沢地区遺構構成材全体の樹種組成と器種組成(図177) 沢地区から検出された遺構群を構成する樹種組成は、クリが最も多く全体の約4割を占め、次いでコナラ節、キハダ、ケンボナシ属、ウルシ、オニグルミが優占する12分類群が認められる。製材性や耐久性に富む樹種が構成材に多用される傾向が窺える。

器種組成は杭が最も多く、構成材の約5割を占める。次いで板目板材、掘り棒、丸木材が多い。遺構は板材を杭で固定するというように、複数の木質遺物が組み合わせられて構成されるものが多いことから、自然な結果といえるだろう。木製品4器種・木材10器種の合計14器種を使用している。

また、グラフ化はしていないが、遺構別にみると杭跡1のみ使用樹種および器種に大きな偏りが認められ、使用された杭の5本中4本はコナラ節を使用しており、それら4本中3本が樫(樫状木製品を含む)を転用している。

(4) 主要器種の機種組成(図179) ここでは、樹種組成に注目できる器種について個々に述べる。掘り棒(未製品含)：コナラ節、ケンボナシ属、アスナロ、オニグルミの4分類群が認められる。約7割がコナラ節で組成の大部分を占める。他の樹種はほぼ均一の比率である。

樫(樫状木製品含)：コナラ節とオニグルミのみが認められ、6点中、前者が5点である。

石斧柄：ケヤキとニレ属のみが認められ、3点中、前者が2点である。

用途不明木製品(舟形)：クリ、ウルシ、キリ、コシアブラ、ハリギリの4分類群が認められる。後二者は、樹種同定を実施した木質遺物の中で、ともに1点のみ認められた。クリの占める割合が最も多いが、組成全体に大きな偏りは認められない。

容器：クリ、ケンボナシ属、ウルシ、カエデ属の4分類群が認められる。クリとケンボナシ属がそれぞれ約4割を占める。

角材：クリ、キハダ、アスナロ、ケンボナシ属、コナラ節の5分類群が認められる。クリが約5割を占め、それに次ぎキハダが約2割と優占する。樹種に関係なく芯持材は認められない。

両端切断材：クリ、アスナロ、イヌエンジュ、ニレ属の4分類群が認められ、クリが全体の約7割を占める。

杭：クリ、コナラ節、キハダ、オニグルミ、ケンボナシ属、イヌエンジュ、ウルシ、ハンノキ属ハンノキ節の9分類群が認められる。クリが最も多く約5割を占め、次いでコナラ節、キハダが優占する。杭状先端加工材：クリ、オニグルミ、カエデ属、コナラ節、イヌエンジュが優占する17分類群が認められる。クリが約7割を占め、他を圧倒する。

(5) 主要樹種の器種組成と木取り(図180) ここでは、全体を占める割合が高い上位5分類群(クリ、コナラ節、オニグルミ、キハダ、ケンボナシ属)と、器種組成や木取りに特徴のみられる4分類群(ウルシ、アスナロ、イヌエンジュ、ケヤキ)について個々に述べる。また、それぞれの文末には樹種の特徴についても記述する。

クリ：樹種同定を実施した木質遺物全体の5割強を占めるとともに、層位別にもても半数もしくはそれ以上を占める。器種組成は杭状先端加工材が3割と最も多く、次いで多い板目板材、割材とで7割以上を占める。木製品4器種・木材13器種の合計17器種から成る。木取りは板目と分割が多く、両者で6割以上を占める。他には芯持丸木、柱目、芯持半割、芯去角や横木取りなどが認められる。なお、加工はやや困難であるが、水湿によく耐え、耐久性は非常に高いという特徴を有する。

コナラ節：器種組成は握り棒が最も多く約3割を占め、次いで割材、板目板材、杭、杭状先端加工材、櫃が多い。木製品2器種・木材9器種の合計11器種から成る。木製品の器種数は少ないが、数量は約4割に相当する。木取りは芯去削出が約3割、板目と分割がそれぞれ約2割で大部分を占める。なお、強度が高く硬いが、従曲性に富むという特徴を有する。

オニグルミ：器種組成は杭状先端加工材、板目板材、割材がほぼ同じ割合で大部分を占め、次いで柱目板材、握り棒が多い。木製品3器種・木材11器種の合計14器種から成る。木取りに大きな偏りは認

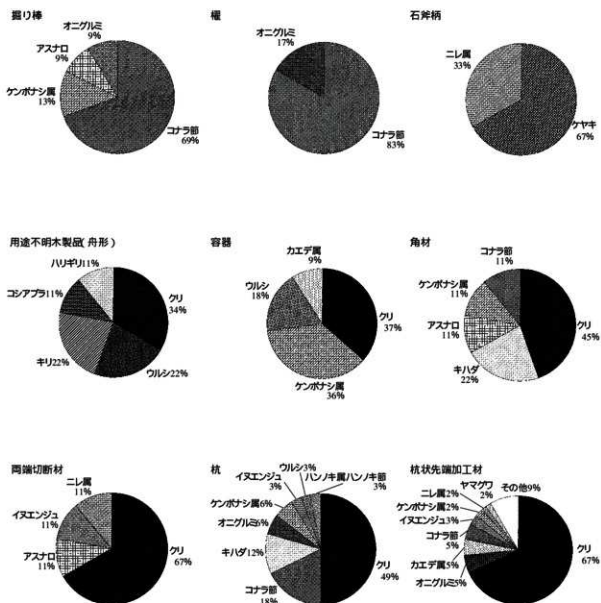


図179 主要器種の樹種組成

められず、板目が約 3 割と最も多く、次いで分割と芯持丸木が多いが、柾目や芯去削出もわずかに認められる。なお、狂いが少なく靱性に富み、加工が容易であるという特徴を有する。

キハダ：器種組成は板目板材と割材で全体の約 5 割を占めるが、他の樹種と比べ柾目板材の割合が多い。木製品 1 器種・木材 8 器種の合計 9 器種から成る。木取りは板目と分割に大きく偏り、ともに 3 割以上を占め、次いで柾目が約 2 割、芯持丸木が約 1 割と、器種組成に比べ木取りは少ない。なお、材肌は粗く強度の高い割には柔らかいという特徴を有する。

ケンボナシ属：器種組成は容器、割材、握り棒、杭状先端加工材がほぼ同じ割合で全体の 6 割以上を占める。また、他の樹種に比べ板目板材の割合がきわめて少ない。木製品 3 器種・木材 7 器種の合計 10 器種から成る。木取りは分割と芯去削出が大部分を占めるが大きな偏りはなく、他にも芯去角、横木取り、縦木取りなどが認められる。なお、材肌は粗いが美しい木理をあらわし、加工は楽であるという特徴を有する。

ウルシ：器種組成は板目板材が約 4 割と最も多く、次いで用途不明木製品（舟形、挟り付）容器が多い。木製品 3 器種・木材 5 器種の合計 8 器種から成る。木取りは板目が 5 割を占め、次いで横木取りと柾目が多い。なお、強度はやや弱い方で脆いが比較的軽量で吸水しにくいという特徴を有する。

アスナロ：器種組成は用途不明木製品（薄板状、箸状）が最も多く 3 割以上を占め、次いで削出割材片、握り棒が多い。木製品 3 器種・木材 4 器種の合計 7 器種から成る。木取りは芯去削出が 5 割を占め、次いで分割、柾目、芯去角となる。芯持材は認められず、すべて幅・厚さが 3 cm 未満である。なお、材質は柔らかいが強靱で耐久性に優れ、水湿の場所での使用は有効であるという特徴を有する。

イヌエンジュ：器種組成は丸木材が約 5 割と最も多く、次いで杭状先端加工材、杭、両端切断材の 4 器種に分類される。木製品は認められず、すべて木材である。木取りはすべて芯持丸木である。なお、加工はやや困難であるが、耐久性は高いという特徴を有する。

ケヤキ：器種組成は石斧柄と用途不明木製品（鳥形）のみである。すべて木製品である。木取りはすべて芯持丸木で、石斧柄は股木部分を使用している。なお、水湿によく耐え、耐久性が高く比重の割に加工は比較的楽であるという特徴を有する。

上記した樹種の内、クリ、オニグルミ、キハダ、イヌエンジュは数量に対する木材の占める割合が多く、これとは対照的に、ウルシ、ケンボナシ属、ケヤキは木製品の割合が多い。前者と同様の傾向はここでは述べていないニレ属、カエデ属にも認められ、後者と同様の傾向はサクラ属、キリ、コシアブラ、ハリギリに認められる。また、アスナロ、イヌエンジュ、ケヤキは器種に限定されないものの、木取りが限定される。

3 みかん割材・半割材・丸木材の意味するもの 本遺跡から出土した木質遺物には、丸木材、半割材のほか、放射状に分割される、いわゆる「みかん割材」に分類されるものが一定量認められる。これらの器種からは、伐採された木の直径がおおよそではあるが求めることが可能である。図 181 は上記した器種の内、樹種を問わず直径の算出が可能な 160 点（みかん割材 89 点、半割材 23 点、丸木材 48 点）から復元直径を算出し⁽³⁾、その分布を 4 cm 毎と 10 cm 毎でグラフ化したものである。

4 cm 毎の分布をみると、4～16 cm の範囲に 123 点（77%）が集中し、ピークである 4～8 cm に 76 点（48%）が集中する。10 cm 毎の分布では、0～10 cm の範囲に 113 点（71%）が集中し、0～20 cm の範囲には 142 点（89%）が収まるという注目できる結果となった。

上記したように復元直径は必ずしも正確ではないものの、樹種に関係なく特定の範囲内にほとんど

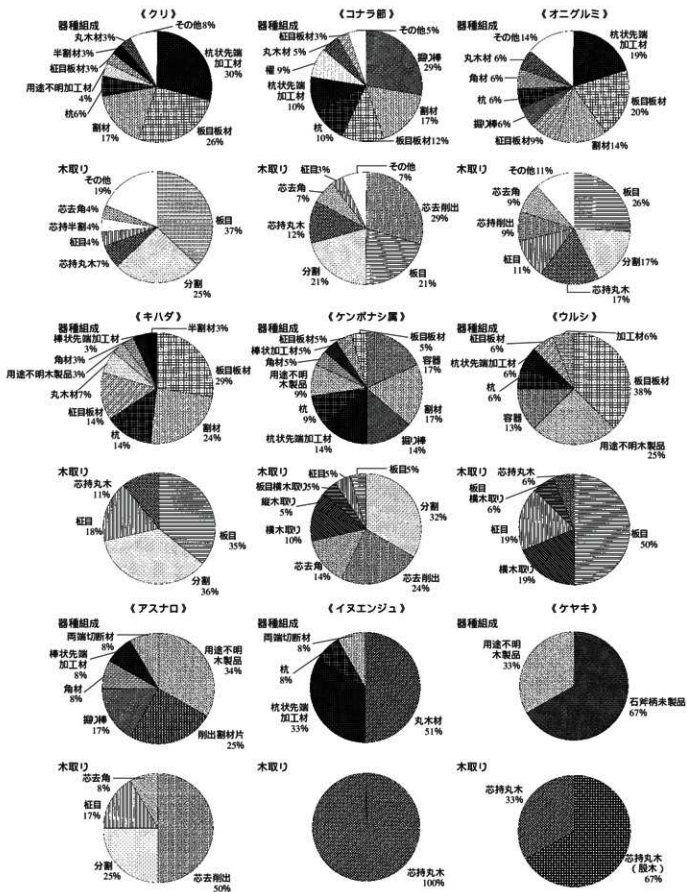


図180 主要樹種の器種組成・木取り

が集中することからは、木を伐採する際には径の太細が大きく関係した、言い換えれば、適当な太さを選択したうえで伐採が行われたものといえるであろう。「成長が速い木は、適する太さになる時間が短い(プラス要因)しかし、適する太さである時間は短い(マイナス要因)。逆に成長が遅い木は、適する太さになる時間はかかるが(マイナス要因)しかし、適する太さである時間は長くなる(プラス要因)」(山田2002)ことを反映させれば、本遺跡出土木質遺物の伐採に関わった人間にとって、直径約4→20cmが適する太さであったといえるであろう。

4 イヌエンジュと木取りの関係 本節2(5)で述べたように、イヌエンジュは例外なく芯材材である。この関係は、東京都東村山市下宅部遺跡第7号水場遺構(東村山市2000・2001)にも認められる。第7号水場遺構は出土土器から縄文時代後期の所産と推定され、二つの流路合流地点付近に構成材をコの字形に配置し、周囲に多数の杭を打ち込んだ遺構であり、イヌエンジュは構成材を支える重要な位置に杭として多用されていた。樹種同定された30本中27本(90%)が丸木材であること、構成材ではクリに次いで多用されていること、出土位置、樹種の特徴から、これまでに類例のないイヌエンジュの選択的な使用が指摘されている(佐々木・能城2004刊行予定)。

本遺跡においては、遺構構成材として使用されたものもあれば包含層から出土したものもあり、選択的に使用されたものかは判然としない。しかしながら、7cm前後にまとまる径からは本項3で述べた太さの選択性が窺え、これに木取りの特徴を踏まえれば、選択的に使用された可能性は考えられるであろう。

そして、時期的・地域的に離れている遺跡間において、これまで類例のない樹種について同様の選択性が指摘できることは、ヒトの植生への関与を検討するうえで注目できるであろう。

5 クリ使用と非クリ使用 まとめにかえて 本遺跡から出土した木質遺物の中で、樹種同定を実施したものについて検討してきたが、その結果、いくつかの注目すべき事柄が挙げられる。

まず、クリは他の樹種に比べて圧倒的に多く認められ、大部分の器種の優占樹種であるだけでなく、木取りも多様性に富む。これに加えて、丸木材や半割材、みかん割材から算出できるおおよその径ならびに大型の遺構構成材などから想定できる、伐採・運搬・製作などの行為に要した労働力を最小限

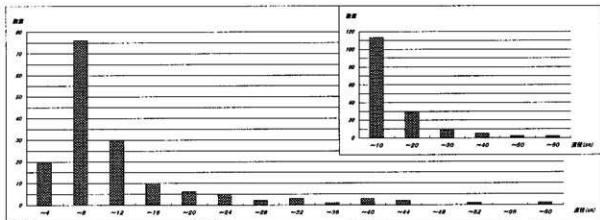


図181 みかん割材・半割材・丸木材の直径分布 4cm毎(大)・10cm毎(小)

に考慮しても、本遺跡から出土した木質遺物に関わった人間にとって、ク리는様々な利用条件に適応し得る樹種であったといえるであろう。

しかしながら、掘り棒、櫂、石斧柄、敲き具、用途不明木製品、加工材といった、ク리를ほとんど、もしくはまったく使用していない器種が存在する。これらの器種は、それぞれの器種とそれに多用される樹種が相互に大部分を占める傾向にあるだけでなく、加工材以外はすべて木製品である。

ク리는出土量が他の樹種に比べ突出していること、器種や木取りが多様であることは先に述べたが、出土数に対する木製品が占める割合は3%（300点中9点⁽⁴⁾）ときわめて少ない。本遺跡の花粉分析（第3章第1節）や約2km北東に位置する三内丸山遺跡第6鉄塔地区での分析結果（青森県1998）からは、円筒下層a・b式期の本遺跡周辺におけるクリ優占の木の分布が推定されており、これを踏まえると、クリで製作された木材が少なすぎるのはきわめて不自然といえる。

以上の事柄を合わせて考えれば、木材製作にはクリ、木製品製作には主としてクリ以外の樹種が多用された、つまり、クリ使用器種と非クリ使用器種を区別していた可能性が指摘できるであろう。

次に、丸木材や半割材、みかん割材から求められるおおよその径がほぼ同一の範囲内に集中することからは、木の伐採や割りに際し、木の太さが選択されたものと思われる。

そのほか、クリも含め、樹種によって器種組成が木製品に偏るものと木材に偏るものに大別できることから、木製品製作と木材製作という特定の器種に限定しない範囲での樹種選択が行われた可能性が指摘できる。さらに、イヌエンジュ、アスナロ、ケヤキなど、器種に限らず木取りに統一性がみられる樹種が認められることから、樹種に応じた木取りの概念が存在した可能性も指摘できるであろう。

以上の事柄を総合すると、選択行為は単に器種に応じた樹種を使用するだけに留まらず、伐採時における木の径、樹種に応じた木取りなど、木の取り扱いに対していくつかの選択項目が存在したことが推察できるであろう。

注(1) 第3章第12節では樹皮を除く598点を対象に樹種同定を実施しており、本項とは点数が異なる。これは同定後の整理作業で接合したものがあることなどに起因する。

(2) 「板」と「材」の明確な分類および基準の設定はかなり困難且つ曖昧であり、特に器種組成において両者を区別するのは問題があると判断した。両者を一括したのはそのためである。

(3) みかん割材の権元径の算出については、放射方向の値を2倍した。芯部分が加工してあるものは、二つの放射方向を延長した交点までの値を2倍した。

(4) 注(1)に同じ。

(2) 「杭状先端加工材」の検討

1 「杭」と「杭状先端加工材」 二つの名称 本報告において、転用材を含む「杭」はすべて「地表に打ち込まれた状態で確認されたもの」であり、本遺跡から出土した多くの木質遺物の中で用途の特定が可能な数少ない器種のひとつである。それに対し、包含層から出土し、一端が杭状に加工されている木質遺物は、杭として使用された可能性が高いが「杭状先端加工材」（以下、本遺物と呼称）という名称を付し、第2章第4節1では杭と区別して扱った。

これは、木質遺物における各研究機関での器種分類基準の不一致や、木質遺物が有する使用法の複雑性に因る混乱（山田1993）を避けること、この事柄から、「地表に打ち込まれた状態で確

認められたもの」以外の木質遺物に対して、形状や製作技術から「杭」という用途を限定する名称を使用するのは問題があること：「杭」という名称は、支えや区画といった用途を限定するものであるが、本遺物の名称は「先端を杭状に加工している」という製作方法を付したものであるため、その用途は限定されないことに起因する。

本節では上記の理由から区別した両遺物の対比など、いくつかの視点から本遺物の用途を検討する。

2 二つの器種

(1) 杭(図179・182) 本遺跡から出土した杭の総数は44点である。冒頭で述べたように、地表に打ち込まれた状態で確認されたものである。樹種同定の結果ではクリが5割を占め、次いでコナラ節、キハダが優占する8分類群が認められた。分割材と板目板・板目材が多用されているが、内2割に相当する9点は掘り棒などの木製品を転用したものである。全体の6割以上に上端の潰れや欠損が認められ、それらの大部分は打ち込みによるものと思われる。炭化しているものや樹皮が残存しているものも存在するが、それらは全体の1割にも満たない。

杭を使用する際、ポイントのひとつとなる下端面の形状から、A類：平らなもの(方形状) B類：尖るもの(V字状) C類：丸みを帯びるもの(U字状) D類：何らかの力が加わり、本来の形状が変形しているもの に分類した。

その結果、最も多くなるのがA類で全体の3割強を占める。その中には転用材である掘り棒のヘラ部分など平らで幅広い部分を使用しているものもあることから、加工の段階から使用に至るまで、下端の形状にさほど固執していないことが窺える。また、使用する際のもうひとつのポイントである上端(1)は、打ち込むには適さないと思われる板状のものや、潰れや欠損の認められないものが存在する。

以上の事柄に、使用場所が台地に比べて比較的容易と思われる沢地形の泥炭質土や砂質土であることを加味すれば、打ち込まれたものだけでなく人力で挿し込まれたものが少なからず存在したものと考えられるだろう。

(2) 杭状先端加工材(図179・183) 本遺物は樹種同定を実施した木質遺物の中で最も多く、未報告のものを含めれば128点で全体の約2割に相当する。未報告分を含めた樹種同定の結果、クリが約7割を占め、次いでオニグルミ、カエデ属、コナラ節、イヌエンジュが優占する17分類群が認められた。分割材と板目板材がほぼ同じ割合で多い。ほぼ半数に炭化もしくは焦痕が認められ、少数だが樹皮が残存するものが認められる。出土状況および A～C 層の器種組成(本節3(1))から、大部分は上流からの流れ込みもしくは廃棄されたものと考えられる。

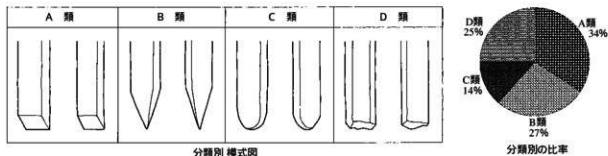


図182 杭

これらを先端加工部分の特徴から、A類：一方の側縁を加工するもの B類：全体を加工するもの C類：両側縁を加工するもの D類：両面を加工するもの E類：一方の面を加工するもの F類：焼きを入れ、炭化させることで整形しているもの に分類し、F類を除いた各分類はさらに、1類：炭化が認められるもの 2類：炭化が認められないもの に二分した。

各分類の比率をみると、A・B類がそれぞれ3割、C・D・E類が約1〜2割、F類が1割未満となり、A・B類で大部分を占める。次に、分類別の炭化の割合をみると、多い順に、F類100%、B1類65%、C1類・E1類50%、A1類・D1類25%となり、先端の加工が少ないものほど炭化する傾向が窺える。これは、炭化させることで材の強化や腐食防止を図ったことのあらわれと考えられる。

そのほか、上端は破損しているものが多いが、杭の上端に類似する潰れや歪みが認められるものも存在する。これまでの事柄を踏まえれば、本遺物は「差（挿）す」や「打ち込む」など、杭と似た用途が考えられるだろう。

ただ、本遺物に分類したコナラ節については、クリに次いで多いものの加工の度合いに関係なくすべてに炭化が認められない。また、掘り棒や杵に分類されるものと規模・形状に大差がない。さらに、芯の有無に限らず例外なく一面以上の平坦面が作出されていることから加工の発展が窺える。以上のことを踏まえれば、加工途中の未製品が含まれる可能性も考えられるだろう。

3 両者の対比 これまではそれぞれの特徴に注目して述べてきた。ここでは両者を比較し、その所見を述べる。

まず、両者に共通する点は、第一に、樹種組成や木取りが概ね同様の傾向を示すこと、第二に、杭の上端に多く認められる敲打痕に似た痕跡が本遺物にも観察されることである。

次に、両者の異なる点は、第一に、杭は下端が尖らないもの（転用材は平らな部分を下向きにしているもの）が多いが、本遺物は加工の程度に関係なく先が尖ること、第二に、杭に比べると本遺物における炭化の割合は圧倒的に多いことである。

以上、共通する二点からは両遺物が同様の用途を持つ可能性が考えられる。しかしながら、製作方

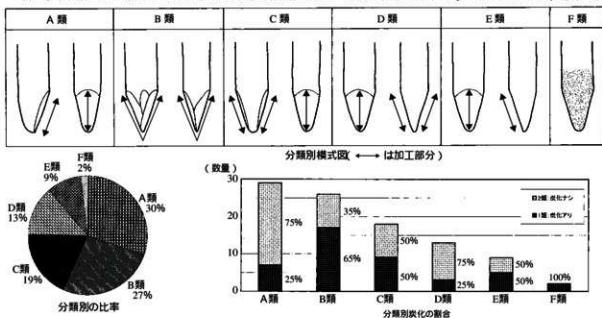


図183 杭状先端加工材

法や形状の相違という視点からは両者はその用途を異にするものと考えるのが妥当であろう。つまり、両遺物における矛盾が発生するのである。

4 遺構との関連性 さて、これまで杭と本遺物の両者を観察・比較し、所見を述べてきた。その結果発生した矛盾については後にふれるとして、ここでは視点を変えて検討する。

本遺物は掘り棒や槌などの木質遺物とは異なり単独での機能が考えにくいほか、先述したように、大部分は廃棄もしくは流れ込みと考えられる。このことから、本遺物の使用場所を沢周辺の台地、すなわち本遺跡丘陵から検出された遺構群（『岩瀬小谷（3）・（4）遺跡』所収）その中でも木質遺物と同時期である縄文時代前期に帰属する遺構に絞り込み、本遺物との関連性を検討する。

その前に、遺構が構築されている台地という場所を考えれば、先端を尖らせることで「差（挿）す」もしくは「打ち込む」際の労働力や地面の硬さなど、使用時に発生する諸問題を大なり小なり回避できるだけでなく、先端を炭化させることにより材の強度は増し、腐食防止効果が最大限に発揮されることは想像に難くないだろう。

上記の点で先ず考えられるのは、住居との関連である。住居跡群の覆土は地山ないし住居内堆積土と同質の土で埋め戻されているものが多い。また、これらには建て替えが認められるものが一部存在し、第4B号住居跡ピット6を除き全体的に柱痕が認められるものは少ない。

次に、沢に面する北側斜面および調査区南側の土器埋設遺構周辺の二つの地域から検出されている小ピット群に着目すれば、これらには建物跡の存在や周辺の遺構との関係が考えられ、多くは柱穴状を呈するが、住居内柱穴と同様に柱痕が認められるものは少ない。このことから考えると、住居内柱穴やピット群は柱材が抜かれた状態で埋められた可能性が高いといえるであろう。もし、この見解に誤りがないのであれば、抜かれた後の柱材は一体どう取り扱われたのであろうか。

また、炭化させる作業が住居内で行われたものと仮定した場合、実物から想像すれば決して不可能ではない。しかしながら、火災の危険が伴うことを加味すれば、住居外で行われたものと考えことはさほど不自然ではないであろう。

そのような視点からも検討すれば、第4号土坑は底面からピット1基が焼土と炭化物とともに検出され、地床炉を伴う仮小屋的な機能が考えられている。また、調査区中央に集中する焼土遺構はいずれも被熱深度が浅く、廃棄と思われるものを除き一時的に火が焚かれたものと考えられる。かなり漠然とした見解であるが、上記の土坑および焼土遺構は、本遺物を加工（炭化）する作業の場でもあった可能性がある遺構といえ、本遺物との関連が考えられる。

5 結語 これまで、「杭状先端加工材」という名称を付した木質遺物について、いくつかの視点から検討してきた。これまで述べてきたすべての事柄を踏まえたとうえで本遺物の用途を考えれば、住居の柱材などの遺構構築材として使用された可能性が濃厚である。これは本遺物の樹種組成の7割を占めるクリが青森県内外の当該期の住居跡から出土する炭化材に多く認められることから推測できるであろう。

しかしながら、先端部に集中する加工や炭化などの技法からは、杭として使用された可能性が高いことにも変わりはない。ただ、本遺物を杭として考えたとき、両者は明らかに加工の特徴が異なることから、使用場所に依じて製作方法を変化した製作者の柔軟な対応が考えられる。そして、このこ

とは本項3での矛盾の理解にも繋がるであろう。

また、先端部以外や全体に炭化や焦痕が認められるものは、燃料材ないし燃料材への転用材、さらには燃料材としての利用途中で消火されたもの（青森県1998）である可能性も考えられる。さらに、先述したコナラ属の検討をふまえれば、加工途中の未製品が含まれることも考えられるであろう。

以上、「杭状先端加工材」という遺物に対していくつかの視点から用途を検討してきた。冒頭でもふれたように、「杭状先端加工材」とは「杭」と区別するために便宜上使用した名称であるものの、考えられる用途は多様であり、木質遺物特有の複雑性をあわす結果となった。

考古学における木質遺物の研究は、土器や石器に比べると未だ発展途上の段階にあり、検討すべき問題は決して少なくない。しかし、それらを明らかにしていくことで、過去に生きた人々の痕跡がより鮮明に描かれることはいうまでもない。

（工藤）

注（1）民俗事例では、杭を加工する際に頭（叩く面）を面取りすることで、叩いた時に縁が欠けるのを防ぐことができるほか、頭がある程度尖っている力が集中して入りやすいといわれる（村上2002）。この点を踏まえると、杭の下端に限らず上端の形状や状態は、杭や杭を使用する際の行動を検討するうえで重要なポイントであると考えられる。

（3）木製品

掘り棒（図184）棒状に削り出された木材の端部にヘラ状または尖り状に加工されているものである。完形品・破損品・未製品が出土している。大きさは、完形品やこれに近いものから、長さ70cm～1.3m、柄の幅2.5～3.5cm、ヘラ部分の長さは8cm～20cm、幅3cm～6cmである。器面が平滑で丁寧に加工されている。使用された木材はコナラ節が多く、アスナロやクリなど他の木材で作られたものよりも柄などの断面径が大きい。前期には各地から出土例が報告されるようになり、これ以降にもその利用が広範に認められるようになる。ここでは、主に、縄文時代前期の掘り棒を比較検討してみる。加工：製作工程に違いがあり、次の2つに分かれる。一つは、割材を削り出して丸い棒状に加工したもので、本遺跡や三内丸山遺跡で出土例がある。もう一つは丸木の両端を加工しているもので、福井県鳥浜貝塚・神奈川県羽根尾貝塚（戸田ほか2003）・富山県桜町遺跡（小矢部1998）（中期）で出土例がある。

形態：一端をヘラ状に加工し、一端を尖らせた形状と両端を尖らせた形状の2種類がある。とくにヘラ状に加工してあるものは柄とヘラの肩部分形状にも違いがあり、大きく分けて3つのタイプがある。1 柄とヘラ部分に境界のないもの、2 撫で肩状になるもの、3 肩部をもつものである。1のタイプは、本遺跡出土例の9と丸木を使って製作された掘り棒4～7がこれに当たる。2のタイプは、本遺跡出土例の2・15と三内丸山遺跡出土例である。3のタイプは本遺跡出土の12と13を除いた出土例であり、ヘラ部分に肩をもつものが本遺跡の特徴である。

大きさ：断面径が3～3.5cmの太めタイプと断面径が2.5cm以下の細身タイプとに大きく分かれる。本遺跡例は大部分が太めタイプで、丸木を使って製作された掘り棒は細身タイプになる。掘り棒の長さも、完形品がこれに近い形状のものだけで確かなことは言えないが、本遺跡例が70cm～1.3mと幅があるのに対して、丸木の掘り棒は1～1.3mと同じような長さの範囲にまとまっている。

ヘラ部分の大きさを探るために、ヘラ部分の形状が1・2のタイプについて、全体の長さやヘラ部

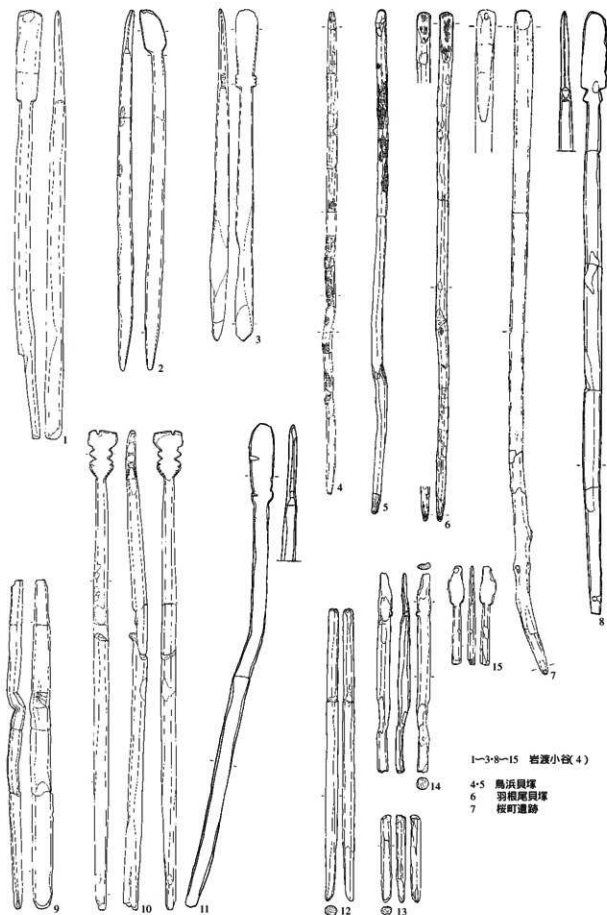


图184 掘口棒集成

分の比率を算出した。使用した掘り棒は3点で、本遺跡の完形掘り棒2点と三内丸山遺跡出土の掘り棒1点である(註1)。比率をみると、全体の長さが各々異なるにも関わらず、およそ8:1であり、掘り棒の長さの違いによってヘラの部分も変化することが分かった。

想定される機能：掘り棒に類似した形状の道具が、「フグシ」と呼ばれる近世の農具である。この農具は「根菜類を掘り取るのが目的で、(一)土をゆるめる、(二)土を掘り上げる、(三)根を突き切る」といった機能のいずれか、または組み合わせによって、根菜類を掘り上げる農具であった。」とされている(藤塚1986)。

根菜類には下表のような種類のものがあり、この内、縄文時代前期にはイモ類が京都府松ヶ崎遺跡(戸原2000)で、中期にはコゴミが桜町遺跡(小矢部市 前掲)で確認されている。松ヶ崎遺跡で出土したのはムカゴで、ツルの葉脈にできる珠芽であるが、主根の部分も掘り上げられ、食用とされた可能性は十分に考えられる。このような出土例から本遺跡でも根菜類を食用に採取していた可能性も考えられる。

下表は根菜類の地表からの長さも表しているが、掘り棒の長さと比較すると、根菜類を掘り上げることが可能な深さであることが分かる。(藤巻1993 表3から転載)

カタクリ・アサツキ	オニユリ・ヤマユリ	ワラビ・ウバユリ	クズ・ヤマイモ
20cm	20~30cm	30cm	100~150cm

このほかにも、ヤマノイモを崖に自生した場所から掘り上げると労力がかからないため、縄文人がこの採取方法を利用してヤマイモを採取していた可能性が述べられている(中口1982)。以上のことから、本遺跡から出土の掘り棒が、形状や規模から根菜類を掘る道具として使用された可能性は高い。

注1 三内丸山遺跡対策室で実測させていただいた計測値をもとにしている。

石斧柄未製品 3点出土しており、台部と柄のなす角度は鋭角である。台部の先端は全体が樹芯に向かって斜めに削られ、柄に近い端部は両面から削りが入る。32-1・3はこの端部が斜めに削られる。台部の先端中央は削られたままのものや若干ツブレたような痕跡のある32-1がある。台部の径は32-1・2と32-3に大きな違いがあり、これと同じように樹種にも、32-1・2のケヤキ、32-3のニレ属のように違いが認められる。台部径の大きさの違いが樹種の違いに反映しており、使用目的等が異なる可能性がある。未製品を含む石斧柄が大量に出土した遺跡として有名なのが縄文時代前期の鳥浜貝塚である。鳥浜貝塚の木製品を分析した網谷氏は、斧身と柄のなす角度によって、鋭角型と鈍角型に分類しており、鋭角型174例・鈍角型11例と大多数が鋭角型の柄である。この内未製品は台部両端のみを裁断したものが実に7割を占めており、網谷氏は成形の第一段階にあてている(網谷1996)。これらの事例を本遺跡の3点と比較してみると、同じ様な加工が台部に施されており、石斧柄に加工する前段階の未製品と位置づけられる。

樞・樞状木製品(図185)本遺跡出土の樞は、柄の断面形が円形で、水かきの部分に向かって緩やかに幅が広がる形状で、下端が尖るものが多い。水かき部分の断面は両側縁がやや尖り、中央部分が

膨らむ形状である。他の遺跡出土の縄文時代前期の櫂は、本遺跡出土例と同じく、下端が尖った形状を持ち、水かき部分が緩やかに広がる形状である。とくに羽根尾貝塚の出土例は水かき部分の長さや幅が本遺跡例に近い。鳥浜貝塚例は多くの種類が出土しているため一概にはいえないが、水かき部分の規模が大きく、やや幅の広い形状をしている。

縄文時代の舟を漕ぐ方法としては、櫂の出土する事例が多いことから、座位による走法であったといわれており、とくに櫂の動作によっては、最適な長さの櫂や水かき部分の面積も変わると考えられる。本遺跡出土例・羽根尾貝塚出土例・鳥浜貝塚出土例で各々櫂の形状が異なるのは、時代や地域性のほかに、海や湖沼・川など舟を操る環境の違いとも考えられる。

容器 本遺跡の容器類は9個体11点出土している。漆を塗布しているのは鉢・皿の4点である。漆は、何層かの構造で塗り重ねられており、赤漆には、ベンガラが使用されている。黒漆に使用されたものは本遺跡出土遺物でははっきりしなかったが、一般的には炭化物が使用されていたと推定されている。容器は全体形が復元できたものは59-1の1点のみで、その他は破片資料である。器種は鉢3点・皿4点・槽2点で、この内、台付鉢2点、台付皿1点である。使用された樹種はケンボナシ属・クリ・カエデ属・ウルシで、とくにケンボナシ属が多い。内訳は、ケンボナシ属：鉢1点・皿3点、クリ：鉢2点、カエデ属：皿1点、ウルシ：槽2点である。

縄文時代前期の他遺跡と比較してみると、器種では鉢の残存する遺跡が多く認められるが、最も出土点数の多い鳥浜貝塚では鉢・皿・碗の割合はほぼ同じである。使用される木材はケンボナシ属・クリ・ケヤキ・トチノキなどが各遺跡に共通する樹種である。とくにケンボナシ属が各遺跡で顕著に使用されており、「この木はそれほど優先的に自生しない木であるのに容器類に多く見られるのは、容器を製作するにあたっての樹種の選択が行われた可能性がある。」と述べられている（能城1996）。本遺跡でもケンボナシ属が容器に使用される割合が高く、同時代に使用された容器類と同じような器種組成や樹種選択が行われたと思われる。

用途不明木製品（槳状）：横断面形がU字形を呈し、内外面とも厚さが均一になるよう削られ、木口面は真っ直ぐに加工されており、表面の端部付近には一条の文様が施される。槳状木製品と分類した

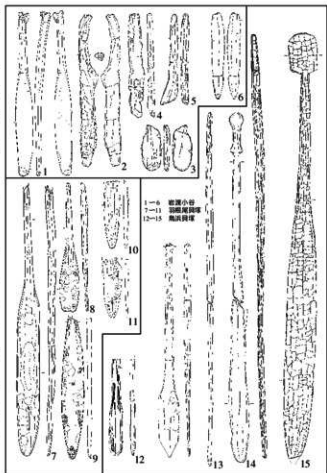


図185 櫂状木製品集成

ものの、その精巧な作りから「櫓」とは別の用途も考えられる。この櫓状木製品の類似例としては、鳥浜貝塚出土の漆塗り製品が挙げられる(鳥浜貝塚1987)。これは表面に赤漆と黒漆で文様が表現され、表面に一条の削り出し突帯がつくものである。出土例も少ないことから機能については不明であり、今後の出土事例の増加が待たれる。

用途不明木製品(鳥形) やや湾曲した丸木材の形状を生かして、全面を削り、鳥を表現したような形状に加工している。上面に楕円形状の削りが入っており、完成品のようにも見える。使用された木材はケヤキであり、97-1の用途不明加工材(容器状)や御井戸遺跡(新潟)出土の把手付き片口木製品(大田区2001)と同様に木製品の未製品の可能性もある。弥生時代以降の鳥形木製品と同様、祭祀的な意味合いで製作された可能性もあり、いずれかの判断はつかない。

用途不明木製品(舟形) 先端を三角形・楕円形状に加工しているもので、内外面が平坦〜丸味を帯びて加工され、両側縁がやや立ち上がり、端部などが加工されているものである。これらの木製品の1つ、61-1は突起部分が両端につくのが特徴で、縄文時代中期の紅葉山49号遺跡(石狩市)から出土した「舟形容器」に形状が類似している(石狩市2003)。

舟形木製品と呼称されるものは全国各地で弥生時代以降も出土しており、準構造船などその時代の舟を模したと思われる木製品も出土している。本遺跡から出土した用途不明木製品(舟形)も縄文時代の舟を模した可能性もあり、このことについて若干触れてみる。

両端形状の分かる60-2、61-1は平面形がいわゆる腰節形に近い形状である。60-2は側面からみると噴水線が両端とも高くなっており、外洋にも適した構造になっている(阿部2002)。川舟の場合は「舟底の下方に丸味をつけると据わりが悪く、波にゆられて転覆するので、底下は、平らなほうが波返りすることがない」(出口2001)とあり、仮に本遺跡から海に出る場合、沖館川を通して移動する方法がとられたであろうから、川の移動と海の移動を兼ね備えた丸木舟が必要であったと想定するのは難くない。縄文時代の他の丸木舟例の平面形は腰節形の舟である(出口 前掲)。「帆定用の装置が発見されておらず、櫂が多く発掘されているので、走法はペーロン漕法(漕手が進行方向に向かって櫂で漕ぐ漕法)であったと思われる」(橋口1999)から推測すると、座位による櫂が使用されたと考えられる。

用途不明木製品(薄板状・管状)と削り出し棒状木製品の加工方法(図186)とくにアスナロから作り出された木製品は、断面が円形で径2〜2.5cmに削り出ししているものである。これらと同じような形状を持つものに、掘り棒や両端切断材がある。他の削り出し材と異なる点は、1 径がやや小さく特徴的なこと、2 削り出し材をさらに分割した材が認められ

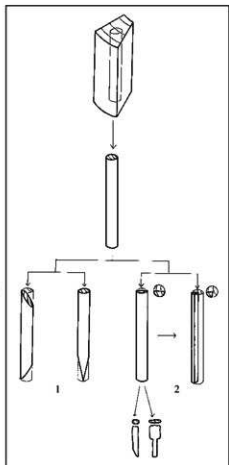


図186 用途不明木製品(管状・薄板状)と削り出し加工材の加工方法

ること、3 アスナロを使用した木製品でかなり小さく加工した木製品がみられることである。これらの違いを踏まえてアスナロ材の加工工程の想定を行った。：木材を適当な大きさに割る、：その割材を削り出して断面形状を丸くする、1：削り出した丸棒の一部を加工して使用する、2：削り出した丸棒を更に削り取る、：加工して別の木製品を仕上げる、である。・工程を示すものは出土していないが、これは、アスナロ材が製品として利用される頻度が高く、無駄なく使用される表れかもしれない。1工程のものは削出割材片の一部を加工して使用している。2工程のものは、半割したもの(88-12)、四分割したもの(88-11)、分割した材の裏面を除いたもの(74-6、88-13)とさらに削り取られているものがあり、やの工程から連続する加工方法と位置付けられそうである。これらはの工程で作られた薄板状・管状木製品に加工されたと考えられる。他遺跡でもアスナロ材は木製品に利用されている。三内丸山遺跡出土の筒状木製品もアスナロ材で(中村2002)、形状は若干異なるものの、最大幅は5mm～3cm程度であり、本遺跡の薄板状・管状木製品に類似するものである。青森平野周辺の縄文時代前期遺跡における針葉樹の木材加工方法の一つである可能性がある。

第3節 遺跡のまとめ

1 分析結果のまとめと今後の課題

花粉分析 表土から第層では多くないが、これより下部の層ではクリが最も優占する。このほかコナラ属コナラ亜属が試料9・10で多く出現し、クルミ属もやや多い。

植物珪酸体分析 各層ともクマザサ属の残存が多い。

珪藻分析 沢の本流では各層とも河川の中～下流域に生息する指標種群や流水性種の出現率が高い。支流の下部堆積層は殻数密度が低く、ほとんど生息していない。上部は陸生珪藻が多く、ほとんど水が流れる環境ではなかったと思われる。

昆虫同定 C層からサクラコガネ属の一種、ハナムグリが最も多く確認された。これにオサムシ科、アオオサムシなどが他の昆虫化石よりもやや多く確認されている。食性のサクラコガネ属は「周辺の植生が人為度の高い二次林で占められていたことを示す」、ハナムグリは「森林性昆虫」であり、オサムシ科、アオオサムシは「食屍性」であることを示す。これらのことから、二次林・森林性の両者を併せ持った環境であった可能性がある(森2002)。

放射性炭素年代測定 三内丸山遺跡での測定結果から、円筒下層式土器の測定値の幅は、5,100～4,600炭素年前(yrBP)とされており(辻2002)、本遺跡の年代も試料3(縄文時代後期)を除き、すべてこの範囲に含まれる。試料別にみると、第1号木組遺構は4940～40炭素年前(yrBP)から4650～40炭素年前(yrBP)と年代幅が大きい。貯水部の南北枠はほぼ同時期の値を示しているが、埋・排水・土留部分は大きな差がある。分析結果の誤差があるいは、第1号木組遺構の使用期間が長く、最終的な形態なのかは疑問が残る。住居跡は、1・11・13・23号住居跡から採取された炭化材・炭化種子を使っている。炭素年代は23・13・11・1号住居跡の順に新しくなり、竪穴住居跡のまとめで大きく分類した一～期の中に包括されるものである。上流側の杭跡2・板敷遺構の炭素年代は近接している。三内丸山遺跡では円筒下層c式に相当する炭素年代試料が得られておらず、この型式の

炭素年代の対比は出来なかったが、第11・13号住居跡の炭素年代がこれに当てはまる可能性もあると思われる。

塗膜分析 59-1 は砂を混和した漆が1～2層塗布されている。このほか、赤く塗布された木胎漆器の赤漆はベンガラを含むものである。黒漆に含まれる黒色物質は不明である。

黒曜石産地同定 試料すべてが高い確率で遺跡の西側に位置する鷹森山・大釈迦・戸門産地である。
石器の使用痕分析 筒状石器と挿器には被加工物に対する刃部の当て方が異なる。素刃の筒状石器は木などの植物に対して使用されたと考えられる。とくに木製品の仕上げには小さく鋭利な工具が必要であり、これらの石器が使用された可能性がある。

土器の成分分析（松本2004）の文献と比較すると、本遺跡の土器胎土は円筒下層b・d式土器は津軽東部採取の土（遺跡周辺の土）に近い値、円筒下層b式は津軽西部採取の土に近い値を示す。また、下層b～d式にかけて白色系粘土を胎土として用いており、三内丸山遺跡で白色系粘土の利用期間内（円筒下層a式～大木10式併行）に収まるものと考えられる。

遺構内土壌分析 土器埋設遺構のまとめにあり。

大型植物化石群 A～C層をととして、クリ果皮片が最も多い出土量である。オニグルミ・ミズナラ等のコナラ節などの食用、ヒョウタン・ウリ・ウルシ属・キハダなどの有用植物の種子が出土している。

樹種 第4章第2節3(2)に樹種同定のまとめあり。

2 集落のまとめ

縄文時代早期 遺構は確認されておらず、土器片が沢を中心に出土しており、施文文様から縄文時代早期中葉に相当する。沖館川を挟んだ西側の熊沢遺跡でも同じ時期の土器片が出土しており、遺跡周辺でこの時代の人々が活動していた。

縄文時代前期 本遺跡の主体をなす時期である。前期中葉～末にかけて集落が営まれたと考えられる。沖館川流域には縄文時代前期の遺跡が立地しており、これらの遺跡と本遺跡が沖館川を介して集落間の交流をもった可能性がある。

前期中葉：沢の近辺で遺物が出土する。遺構は確認されていない。沖館川西岸の熊沢遺跡では竪穴住居跡が構築され、沖館川に面した斜面に捨て場が形成され、三内丸山遺跡では集落が形成され始める。前期中葉～後葉：沢を挟んだ南北斜面で小型の竪穴住居跡が構築される。土器埋設遺構は北側斜面のやや南側に埋設される。沢では上流側に導水状施設を設け、その下流側に木組遺構が構築され、堰部で水を遮断し、貯水部で水を貯める機能が想定される。このさらに下流側には樹皮範囲が広がり、木組遺構と樹皮範囲の間には対岸を行き来すると思われる木道がある。下流側・南側斜面住居跡周辺では土器が捨てられる。熊沢遺跡でも集落が営まれ、第2号遺物集中ブロックが形成される。

前期後葉：沢を挟んだ南北斜面に中型の竪穴住居跡が構築される。土器埋設遺構は、南側斜面の西寄りと頂部に埋設され、土坑墓も同じく南側斜面頂部・東寄りに構築される。遺物も沢下流及び南側斜面・頂部周辺に捨てられている。沢の上流側を作業場・廃棄場にしていった可能性があり、クリ果皮片

集中範囲が検出される。

前期後葉～末：北側斜面に竪穴住居跡が多く作られ、住居跡を拡張して大型住居跡を構築している。集落範囲は北側斜面頂部に広がり、貯蔵穴の可能性のある土坑はこの時期に構築された可能性がある。沢や南側斜面の住居跡のあった場所に遺物が捨てられる。また、土器埋設遺構の集中範囲となる。

前期の生業活動：本遺跡から出土した遺物から、1年の中で行われる作業を下表にした。とくに沢か出土した大型植物遺体からクリ・オニグルミ・コナラ節などを採取して食料としたと思われる。また、本遺跡からは漆器が出土し、ウルシ種子、ウルシ材も利用されていることから、遺跡周辺でウルシ採取が行われた可能性は高いと思われる。樹皮を剥いて丸めたものも出土しており、樹皮剥ぎが行われていたと思われる。また、沢から出土した多量の木質遺物から、伐採が行われていた可能性は高い。ただ、伐採季節が不明であったため、鳥浜貝塚例を参考にしている。

落葉広葉樹地帯の民俗例からみた本遺跡での生業活動の想定（年単位）

		春		梅雨		夏		秋			
1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
漆採取											
木の实採取											
樹皮剥ぎ											
木の伐採(鳥浜貝塚の例による)											

縄文時代中期 中期初頭～前葉は数点の遺物が南側頂部、沢近辺に散在している。遺構は検出されなかった。中期中葉から後葉にかけては北側斜面に円筒上層e式期の住居跡・土坑が構築される。遺構は存在するものの、遺物量は多くない。むしろ、北側斜面から沢にかけて円筒上層c・d式土器の出土量が多く、前期の竪穴住居跡の埋まりきらない凹地に遺物を廃棄したと思われる。この凹地は発掘調査の段階でも確認されている。後葉～末は沢から南側斜面で遺物が散在している。

縄文時代後期 前葉は遺物が散在しており、北側斜面住居跡堆積土内、沢、頂部捨て場から出土している。中葉は焼失家屋が1軒検出されている。中葉～後葉は土坑が1基検出されている。

縄文時代晩期 南側斜面・沢で土器片が2点検出されている。

平安時代 北側斜面の東寄り、白頭山降下火山灰以前に構築された土坑が4基、沢から出土した土器片が1点出土している。

最後になりましたが、4年間に及ぶ発掘調査並びに報告書作成に関わりましたすべての方々に心から感謝申し上げます。 (坂本)

引用・参考文献

- 青森県教育庁文化課1996『三内丸山遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第205集 青森県教育委員会
 青森県教育庁文化課1997『三内丸山遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第230集 青森県教育委員会
 青森県教育庁文化課1998『三内丸山遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第249集 青森県教育委員会

- 青森県埋蔵文化財調査センター 2003『畑内遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第345集 青森県教育委員会
- 青森県埋蔵文化財調査センター 2003『上野尻遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第353集 青森県教育委員会
- 青森県教育委員会 1978『熊沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第38集 青森県教育委員会
- 青森県教育委員会 1980『大平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第52集 青森県教育委員会
- 阿部千春2000『第3章第1節』『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 網谷克彦ほか 1996『縄文時代木製遺物・木工技術の基礎的研究 平成7年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書』
- 池谷勝典2003『磨石・鮎石・石皿の実験考古学的研究』『アルカ 研究論集第1号』埋蔵文化財研究業務 株式会社アルカ
- 石狩市教育委員会2003『2003年度 石狩紅葉山49号遺跡低湿地部発掘調査概要報告』CD-ROM版
- 江原 英1998『寺野東遺跡(縄文時代谷部編)』栃木県埋蔵文化財調査報告書第208集
- 大川 清・鈴木公雄・工業普通編1996『日本土器事典』雄山閣出版株式会社
- 大田区立郷土博物館2001『ものづくり考古学-原始・古代の人々の知恵と工夫』東京美術
- 小笠原雅行2000『第3章第2節第1項』『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 小野賢之ほか2000『熊沢遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第48集 青森市教育委員会
- 小野賢之ほか2001-2003『稲山遺跡発掘調査報告書 一』青森市教育委員会
- 小矢部市教育委員会1998『桜町遺跡おやべ展-縄文の森に吹く風を感じて-』小矢部市・小矢部市観光協会
- 河内武春1993『吉野の塚かき-奈良県吉野郡高吉野村賀名生を中心として』『日本歴史民俗論集7 海・川・山の生産と信仰』吉川弘文館
- 柏崎市教育委員会1985『刈羽大平・小丸山』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5 柏崎市教育委員会
- 鹿沼市教育委員会2002『明神前遺跡-発掘調査概要報告書』鹿沼市教育委員会
- 工藤大他『木造り田小屋野貝塚-岩木川流域の縄文前期の貝塚発掘調査報告書-』青森県立郷土館調査報告第35集考古-10
- (財)長野県埋蔵文化財調査センター1994『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路-長野県中野市内-栗林遺跡・七瀬遺跡』(財)長野県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 19
- 櫻田 隆ほか1999『池内遺跡 遺物・資料編』秋田県文化財調査報告書第282集 秋田県教育委員会
- 佐久間惇1985『三面のヤマノイモ』『技術と民俗(上)』日本民俗文化大系(普及版)第13巻 小学館
- 佐々木由香2000『縄文時代の「水場遺構」に関する基礎的研究』『古代』第108号 早稲田大学考古学会
- 佐々木由香・熊城修一2004『東京都下宅部遺跡の水場遺構材から復元する縄文時代後期の森林資源利用』『植生史研究』第12巻第1号 刊行予定
- 静岡市教育委員会1990『蛭田遺跡』静岡市埋蔵文化財調査報告23 静岡市教育委員会
- 栗田正蔵1999『雪国の保存食』『ブナ林の民俗』高志書院
- 末木 健1999『埋蔵』『縄文時代』第10号 第3分冊 縄文時代研究会
- 滝沢規明ほか2002『元屋敷遺跡(上段)奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書』朝日村文化財報告書第22集 朝日村教育委員会
- 種市幸生・田口 尚ほか『忍路土場遺跡・忍路5遺跡』北海道埋蔵文化財調査センター調査報告書第53集
- 茅野高健ほか2001『畑内遺跡』青森県埋蔵文化財調査センター第308集 青森県教育委員会
- 辻誠一郎2000『第3章第4節』『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 出口晶子2001『丸木舟』ものし人間文化史98 法政大学出版局
- 戸田哲也ほか2003『神奈川県小田原市 羽根尾貝塚』玉川文化財研究所

- 原和人も2000「話題の通跡と出土遺物 京都府網野町松ヶ崎通跡」文化庁編『発掘された日本列島2000 新発見考古通報』朝日新聞社
- 鳥浜貝塚研究グループ1987「図版312」『鳥浜貝塚 - 1980-1985年度のまとめ』
- 中口 裕1982「縄文農耕のあけぼの」『実験考古学』鎌山館
- 中村美杉2000「第 3章第2節3」『青森県史 別編 三内丸山通跡』青森県史友の会
- 名久井文明1999『樹皮の文化史』吉川弘文館
- 奈良国立文化財研究所1985『木器集成図録 近畿古代編』
- 成澤渾水1982『木材 - 生きている資源 - 』パワース社
- 能城修一ほか1996『鳥浜貝塚から出土した木製品の樹種』『鳥浜貝塚研究1』福井県立若狭歴史民俗資料館
- 横口尚武ほか1999『海を渡った縄文人 縄文時代の交流と交易』小学館
- 東村山市遺跡調査会2000『下宅部遺跡 2000年度発掘調査概報』東村山市遺跡調査会下宅部遺跡調査団
- 東村山市遺跡調査会2001『下宅部遺跡 2001年度発掘調査概報』東村山市遺跡調査会下宅部遺跡調査団
- 藤澤悦司1986「武蔵の掘り棒」『技術と民俗(下)』日本民俗文化大系(普及版)第14巻 小学館
- 藤巻正徳1993「土器具(一)」『新潟考古学談話会会報』第12号 新潟考古学談話会
- 北海道開拓記念館1998『第47回特別展 うるし文化 - 漆器が語る北海道の歴史 - 』北海道開拓記念館・開拓の村文化振興会
- 前田義人ほか2001『長野小西田遺跡2』北九州市埋蔵文化財調査報告書第262集 (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 松本建通2003「三内丸山遺跡粘土探窟坑粘土と遺跡出土土器の成分分析」『特別史跡三内丸山遺跡 年報6』青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室
- 松本建通2004「三内丸山遺跡出土土器粘土成分分析の時代的変化に関する研究 - 円筒下層a式から大木10式まで - 』平成15年度 三内丸山遺跡報告会 予稿集。青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室
- 三浦貞栄1983「衣 食 住」『小田野沢の民俗』調査報告書。青森県郷土館調査報告第14集・民俗・7
- 南北海道考古学情報交換会第20回記念シンポジウム実行委員会1999『北日本における縄文時代の墓制 資料集』
- 村上由美子2002「木を割るということ」『住進する考古学』近江貝塚研究会
- 村上義直ほか2003『平成14年度 縄文講座 縄文人の台所・水さらし場遺構を考える - 縄文人は水とどう関わってきたか - 』資料
- 森 勇一2000「第 3章第2節」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 山本暉久2003「墓室内に倒置された土器」『神奈川考古 第39号』神奈川考古同人会
- 山田昌久2002「材成長から見る縄文・弥生時代の人類-森林関係」『人類誌集報2002』東京都立大学考古学報告8
- 山田昌久1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 - 用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第1号 植生史研究会
- 渡邊 昌2000「縄文時代の建築用主要道具について - 木の建築をつくる技術と道具の歴史に関する調査報告 その2 - 』
- (財)竹中木工道具館研究紀要 第12号 財団法人 竹中木工道具館
- 渡辺 誠2002「水さらし場遺構研究の現状と課題 - 明神前遺跡の成果に基づいて」『明神前遺跡 - 発掘調査概要報告書』鹿沼市教育委員会

遺構出土土器

図版番号	出土地点	出土層位	部位	口唇・口縁	胴部	口径(mm)	胴高(mm)	底径(mm)	分類	備考
図 - AN P	C	口-胴上	波状 単(LA) 残溝、 残溝 RLR 側注	単(L) 残 口	()	()	-	-	3	口縁丸み
図 - AN	C	口	波状 単(LA) 残溝、 残溝 RLR 側注	口	-	-	-	-	3	

二次加工 - 割り取り後の加工を指す。割裂痕の残存しているものは 二次加工なし にしている。
樹皮の推定長は実測図をマップメータ で計測した。

遺構出土木質遺物

遺物番号 No	種類	層位	グリッド	遺構埋没部位	出土の場所、 採取層	形態・用途	全長(mm) 推定	備考
遺 - H-C- コナラ コナラ	C層 AN	1木版	割り片	志末直	へう部分は断面直で、横との境界の両側に2層ずつ削み取った。横の断面は内面である。下部は大きく傾斜し、下部5cmほどがへう状に削り加工されている。おそらく、下部を傾斜させたへう部分を修正している。	へう部分は断面直で、横との境界の両側に2層ずつ削み取った。横の断面は内面である。下部は大きく傾斜し、下部5cmほどがへう状に削り加工されている。おそらく、下部を傾斜させたへう部分を修正している。		AMS 5201 RWATARI
遺 - C- コナラ コナラ	C層 AN	1木版 野水部 残溝材	割り片	志末直	へう部分がやや湾曲し、断面形は中央にやや膨らみがある形で、上部が湾曲している。横部分は内側で、裏面下部は斜めに破断している。	へう部分がやや湾曲し、断面形は中央にやや膨らみがある形で、上部が湾曲している。横部分は内側で、裏面下部は斜めに破断している。		湾曲あり
遺 - C- コナラ コナラ	C層 AN	1木版 野水部 残溝材	割り片	志末直	横の断面は内側で、へう部分は扁平である。横面は平直である。下部は cm程度傾斜しており、使用による傾斜と思われる。	横の断面は内側で、へう部分は扁平である。横面は平直である。下部は cm程度傾斜しており、使用による傾斜と思われる。		
遺 - C- コナラ コナラ	B層 AN	1木版 野水部 残溝材	割り片	志末直	へう部分は扁平で、横との境界を三角形に加工する。横の部分は断面直でやや湾曲した形状である。表面下方で大きく平坦に削られる。下部につれ先が鋭くなる。	へう部分は扁平で、横との境界を三角形に加工する。横の部分は断面直でやや湾曲した形状である。表面下方で大きく平坦に削られる。下部につれ先が鋭くなる。		
遺 - H-C- ケンボ アナン	B層 AN	1木版 野水部 残溝材	割り片	志末直	先端は欠損しており不規則。中央付近で削り加工による痕が見られる。横の断面は丸く削り出されている。へうの両側は左右非対称である。	先端は欠損しており不規則。中央付近で削り加工による痕が見られる。横の断面は丸く削り出されている。へうの両側は左右非対称である。		
遺 - H-C- コナラ コナラ	B層 AN	1木版 野水部 残溝材	割り片	分類	へう付き削り残木製7金目の断面が方形一長方形で、下部を尖らせている。表面のへうは両部分と思われる箇所に取りがら。上部は斜めに削られる。	へう付き削り残木製7金目の断面が方形一長方形で、下部を尖らせている。表面のへうは両部分と思われる箇所に取りがら。上部は斜めに削られる。		
遺 - H-C- コナラ コナラ	C層 AN	1木版 野水部 残溝材	割り片	8分類	断面材の下部にかけて先を尖らせており、削り片の痕が保持する。上部は斜めに削り出され平直である。	断面材の下部にかけて先を尖らせており、削り片の痕が保持する。上部は斜めに削り出され平直である。		
遺 - H-C- コナラ コナラ	C層 AN	1木版 野水部 残溝材	割り片	志末直	中央を楕円にやや湾曲しており、部材や水漬の圧力によるものと考えられる。削り出しによって断面直を内側にしており、下部は丸みを帯びている。上部から上部にかけて大きく傾斜しており削り出しによるものと考えられる。	中央を楕円にやや湾曲しており、部材や水漬の圧力によるものと考えられる。削り出しによって断面直を内側にしており、下部は丸みを帯びている。上部から上部にかけて大きく傾斜しており削り出しによるものと考えられる。		
遺 - H-C- コナラ コナラ	C層 AN	1木版 野水部 残溝材	割り片	志末直	下部がやや湾曲しており、ヒビやツブレがわずかに認められる。断面材の圧力によるものと考えられる。上部から側面にかけて削り出しと認められる。断面形は内側になるよう下側に削り出され、下部は丸みを帯びている。必ずしも丸みの一部が欠損している。	下部がやや湾曲しており、ヒビやツブレがわずかに認められる。断面材の圧力によるものと考えられる。上部から側面にかけて削り出しと認められる。断面形は内側になるよう下側に削り出され、下部は丸みを帯びている。必ずしも丸みの一部が欠損している。		樹皮付き
遺 - H-C- アスロ コ	C層 AN	1木版	割り片	志末直	中央上部で破断している。削り加工によるツブレあり。下部はやや平坦な状態で下部を斜めに削り加工している。	中央上部で破断している。削り加工によるツブレあり。下部はやや平坦な状態で下部を斜めに削り加工している。		丸縁断面
遺 - H-C- オニグ ルミ	A層 AN	1木版 野水部 残溝材	割り片	志末直	削り出しで断面を丸く作る。下部を斜めに削っている。裏面に工具の痕で深く見られる。	削り出しで断面を丸く作る。下部を斜めに削っている。裏面に工具の痕で深く見られる。		
遺 - C- ケンボ アナン	C層 AN	1木版 野水部 残溝材 逆削材	割り片	志末直	と推定。 の下部と の上部が破断している。この部分に斜めと方向からの力がかけられている状態である。 上部は三角形状で、表面部から内側に削り出しのみ削り残す。横部分の断面は丸く、 の下部は中央より両側である。下部は断面が斜めに削られている。下部は破断している。	と推定。 の下部と の上部が破断している。この部分に斜めと方向からの力がかけられている状態である。 上部は三角形状で、表面部から内側に削り出しのみ削り残す。横部分の断面は丸く、 の下部は中央より両側である。下部は断面が斜めに削られている。下部は破断している。	()	
遺 - H-C- ケンボ アナン	B層 AN	1木版 野水部 残溝材	割り片	志末直	へう付き削り片 断面は平直に加工されている。下部のへう先は長さ 5mm以上ある。中央付近で削り加工により大きく丸みをつけている。上部の両側は不明だが、斜めに削り出されており、先端を尖らせている可能性がある。	へう付き削り片 断面は平直に加工されている。下部のへう先は長さ 5mm以上ある。中央付近で削り加工により大きく丸みをつけている。上部の両側は不明だが、斜めに削り出されており、先端を尖らせている可能性がある。		
遺 - C- コナラ コナラ	C層 AN	1木版 野水部 残溝材	割り片	志末直	断面は削り加工よりツブレ、よくは上部は削り残が削り出されている。断面直の内側で、中央付近から斜めに削り出される。断面、上部の断面が中央付近で約 cm前後で破断の跡状あり。裏面中央付近を尖らせてわずかに凹みあり。	断面は削り加工よりツブレ、よくは上部は削り残が削り出されている。断面直の内側で、中央付近から斜めに削り出される。断面、上部の断面が中央付近で約 cm前後で破断の跡状あり。裏面中央付近を尖らせてわずかに凹みあり。		断面直？
遺 - C- ケヤキ C層 AN	1木版 野水部 残溝材	石研削木製 品	志持丸木 (酸木)	表面と裏面される部分は、両側の残溝部分に二次加工あり。表面は断面は平らになるよう、削り加工。他方は両側から削り加工。	表面と裏面される部分は、両側の残溝部分に二次加工あり。表面は断面は平らになるよう、削り加工。他方は両側から削り加工。			
遺 - C- ケヤキ C層 AN	1木版 野水部 残溝材	石研削木製 品	志持丸木 (酸木)	表面と裏面される部分は、両側の残溝部分に二次加工あり。表面は断面は平らになるよう、削り加工。他方は両側から削り加工。	表面と裏面される部分は、両側の残溝部分に二次加工あり。表面は断面は平らになるよう、削り加工。他方は両側から削り加工。			
遺 - H-C- ニレ C層 AN	1木版 野水部 残溝材	石研削木製 品	志持丸木 (酸木)	性質、左側は断面直を楕円と両側を平直にしている。右側は断面直を楕円として両側から削り、形を整えている。	性質、左側は断面直を楕円と両側を平直にしている。右側は断面直を楕円として両側から削り、形を整えている。			
遺 - H-C- クリ C層 AN	1木版	板目材	板目	断面材を板目材に加工したもので、表面は断面直に削り取り時の破断痕。裏面は削り取りによる破断痕がある。中央付近で、削り出しにより加工されている。下部は斜めに削り出されとされている。	断面材を板目材に加工したもので、表面は断面直に削り取り時の破断痕。裏面は削り取りによる破断痕がある。中央付近で、削り出しにより加工されている。下部は斜めに削り出されとされている。			
遺 - H-C- オニグ ルミ	C層 AN	1木版 野水部 残溝材	割り片	志末直	上部は削り加工によりツブレは5〜 cm前後で削り加工によるヒビが認められる。	上部は削り加工によりツブレは5〜 cm前後で削り加工によるヒビが認められる。		
遺 - H-C- オニグ ルミ	C層 AN	1木版 野水部 残溝材	板目材	板目	全体に丁寧な加工されており、表面は断面直下部は斜めに削られている。下部は削り加工による破断痕で傾斜し、ツブレしている。上部は両側から削り残すのみ削り加工。上部の削り加工により両側が大きく傾斜し、ツブレしている。	全体に丁寧な加工されており、表面は断面直下部は斜めに削られている。下部は削り加工による破断痕で傾斜し、ツブレしている。上部は両側から削り残すのみ削り加工。上部の削り加工により両側が大きく傾斜し、ツブレしている。		
遺 - H-C- クリ C層 AN	1木版 野水部 残溝材	石研削木製 品	志持丸木 (酸木)	分類	断面材の表面、裏面を削り取り材に加工している。全面で断面直に平直である。上部から上部と下部付近は削り加工により丸みをつけている。表面中央には表面に削り出されとされていると思われる。	断面材の表面、裏面を削り取り材に加工している。全面で断面直に平直である。上部から上部と下部付近は削り加工により丸みをつけている。表面中央には表面に削り出されとされていると思われる。		AMS 5201 RWATARI
遺 - H-C- ケンボ アナン	C層 AN	1木版 野水部 残溝材	割り片	志末直	断面材の表面と裏面を削り取りし、角材としている。断面は全体的に平直である。下部は削り加工によるツブレが見られ、上部は破断している。	断面材の表面と裏面を削り取りし、角材としている。断面は全体的に平直である。下部は削り加工によるツブレが見られ、上部は破断している。		
遺 - H-C- コナラ コナラ	C層 AN	1木版 野水部 残溝材	割り片	志末直	断面材が方形一長方形で、両側面は削り取り痕あり。表面と裏面は削り加工の下側に削り加工に削られる。上部は削り加工によるヒビが見られ、上部は破断している。	断面材が方形一長方形で、両側面は削り取り痕あり。表面と裏面は削り加工の下側に削り加工に削られる。上部は削り加工によるヒビが見られ、上部は破断している。		
遺 - H-C- クリ C層 AN	1木版 野水部 残溝材	板目材	板目	表面、両側面を平直に削り出す。裏面は削り取り時の破断痕が保持する。上部断面には小さく削り取り痕が見られる。上部は削り加工によるツブレあり。表面に貫通して2〜3cmのくぼみ状の凹みがある。	表面、両側面を平直に削り出す。裏面は削り取り時の破断痕が保持する。上部断面には小さく削り取り痕が見られる。上部は削り加工によるツブレあり。表面に貫通して2〜3cmのくぼみ状の凹みがある。			
遺 - H-C- キハダ C層 AN	1木版 野水部 残溝材	分類別	分類別	表面に削り取り時の破断痕が保持する。表面は平直に両側面は大きく加工されている。横の下部で折れ曲がり、下部に向かつて先鋭になる。上部は削り加工の残存する。	表面に削り取り時の破断痕が保持する。表面は平直に両側面は大きく加工されている。横の下部で折れ曲がり、下部に向かつて先鋭になる。上部は削り加工の残存する。			

連筋番号	No	形状	方位	グリッド	連筋高さ	製造の時期、水質	形状・技法	全長 (mm) 備考	備考
H-C-	キハダ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	表裏面は平準で二次加工があったと思われる。下部は丸味を帯びて斜めに崩れ、上部は両側縁を削り上向きをなせる。上部は斜削りによるツブシあり。		
H-C-	コナラ 黒コナラ 片筋	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	分削りの本葉、本葉を削って平準面を制作している。表裏中央から下部にかけての左側縁は大きく削り落とされている。下部付近では両側縁も削れられ直ぐなっている。		
H-C-	クリ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	下部に斜削りによる歪みあり。下部を両側とも薄く削り出す。		
H-C-	クリ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	表面に近い部分の分削りを使用している。両側縁を削り取られている。裏面は削り残しの丸味を帯び残している。上部縁は上部から削り残りが存在する。上部縁は凹凸がある。下部から下部にかけて両側縁を削り取られている。		
H-C-		C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	分削り	分削りで、削りによる歪みがあり、上部は斜削りに崩れる。下部は丸味を帯びて削られている。		
H-C-	コナラ 黒コナラ 片筋	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	分削り	削り取ったあとを両側削って平準に加工している。両側縁を削り取り際の凹凸は、上部右側縁には削りの痕跡が見られる。中央付近まで出ており、部材の崩れや虫食いのためと考えられる。下部は斜削りに加工されている。		
H-C-	クリ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	分削り	丸木の裏面を削り取り、中央部分に丸まりが残る。右側部から下部にかけて削り落とす。表面は、炭化。		炭素化
H-C-	クリ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	全体に二次加工あり。裏面に削り取り時の連続性がある。両側縁はほぼ直ぐ削りに加工される。		
H-C-	キハダ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	表面上部を中心に削り取りがなされ、削りにより材が歪んでいる。下部は右側縁は多く削り取られている。両側縁は削り取りの際、下部まで削り取られている。上部にはツブシたような痕跡も見られるが、ほぼ平準であった。		炭化?
H-C-	ウルシ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	削り取りにより両側縁に連続性が残る。両側縁は直ぐ削りに加工する。両側縁斜めに削り落とされ、削りによる凹凸が残る。		
H-C-	ウルシ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	平準削りを取り、芯部分を削る。両側・両側縁に削り取りの加工がほとんど見られない。両側とその付近には削り残りが残る。		
H-C-	クリ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	分削り	丸木を 4 層削り取り、断面を方形に加工する。裏面の一部を削り取ってほぼ炭素化している。表面は平準である。削り取りの際、丸木は丸味を帯びて削り取られている。		
H-C-	キハダ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	両面に削り取りによる連続性が残る。両側縁は削り取られている。表面左側縁は直ぐ削りに加工する。両側縁は削り取りの際、丸木は丸味を帯びて削り取られている。上部にはツブシたような痕跡が見られる。		
H-C-	クリ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	平準削りの本葉と両側縁を削り取り、全体二次加工あり。裏面には削り取り時と削り取り前後と異なる凹凸あり。表面はツブシが削り取られるが削り残りのみで加工がなされ、両側縁は削り取りの際に歪みが生じている。		炭化あり。
H-C-	キハダ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	表裏面に削り取り時の連続性がある。両側縁は直ぐ削りに加工される。上部に削り取りの痕跡が認められ、裏面下部にはヒビが見られる。		
H-C-	クリ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	分削りを取り削り材に加工している。削り取り時の連続性があるが、両側とも全周縁に直ぐ削りに加工されている。両側縁は削り取りの際、丸木は丸味を帯びて削り取られている。下部から下部にかけて両側縁を削り取られている。		
H-C-	クリ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	表面には、削り落とす際の連続性が残る。両側縁も削り取りによる中央方向に向って削り取られている。ともに削り取りは削り取りされている。表面は炭素化はほぼ直ぐ削りに加工されている。下部は両側縁に削り取りの痕跡が見られる。上部は裏面が削り取りがなされ、丸味を帯びて削り取られている。		
H-C-	クリ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	両側とも表面から中央方向に向って削り取られている。ともに削り取りは削り取りされている。表面は削り取りの際、丸木は丸味を帯びて削り取られている。両側縁は直ぐ削りに加工されている。下部は両側縁に削り取りの痕跡が見られる。上部は裏面が削り取りがなされ、丸味を帯びて削り取られている。		
H-C-	オニグルミ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	裏面に削り取り時の連続性がある。表面はキヤ平準で削り取りされている。両側縁は削り取りの際、丸木は丸味を帯びて削り取られている。上部は削り取りの際、丸木は丸味を帯びて削り取られている。		
H-C-	クリ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	削り取り時の連続性がある。全体二次加工あり。両側とも削り取りされている。		
H-C-	クリ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	裏面には削り取り時の連続性がある。表面は表面が削り取りでやや平準削りだが、ほぼ平準である。両側に削り落とすした痕跡あり。		AM5 斜削り AWAT7
H-C-	クリ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	分削りを取り削り材に加工している。両側縁も平準である。裏面には削り取り時の連続性がわずかに残る。両側に削り取りの痕跡あり。		AWAT7
H-C-	クリ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	表面に近い部分を残す削り取り。裏面は分削り分削り削り取りしている。表面下部右側縁の凹みは削り取りの打ち込み部分にあたる。両側縁は連続した痕跡は認められないが斜削りは不明である。		
H-C-	キハダ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	削り取り時の連続性がある。表面下部は左側に削り取りあり。両側縁は直ぐ削りに加工されている。		
H-C-	クリ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	表面は両側縁と上部と下部を削る。表面は平準にし、左側縁は直ぐ削りに加工されている。右側縁は直ぐ削り取りする。両側縁は削り取りの際、丸木は丸味を帯びて削り取られている。		
H-C-	クリ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	分削り	上部は削り取りによる連続性あり。ほとんど二次加工なし。表面には削り取り時の連続性がある。表面は上部に近い部分以外平準に削り取り。上部は丸味を帯び、両側縁は直ぐ削りに加工される。裏面はほぼ平準で上部は削り取りに向って斜めに削り取られている。		/ / /
H-C-	クリ	B	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	分削りの本葉を削り取り、斜削りに加工したもので、裏面に連続性がある。表面に削り取り後の連続性が見られるが、表面右側縁の中央から下部にかけて直ぐ削り取りされている。上部から右側縁にかけて丸味を帯びて削り取りされている。下部は両側縁に削り取りがなされる。		
H-C-	クリ	B	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	削り取りにより板状に加工。下部は平準な削り取りで両側縁を削り取りしている。両側縁の凹み部分は丸まりを直ぐ削りに加工されている。		
H-C-	キハダ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	連作伐痕あり。削り取りは平準削りだが、削り取りの際、丸木は丸味を帯びて削り取られている。表面は削り取りの際、丸木は丸味を帯びて削り取られている。上部は削り取りの際、丸木は丸味を帯びて削り取られている。		スケッチのみ
H-C-	オニグルミ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	表面は削り取りの際、丸木は丸味を帯びて削り取られている。上部は削り取りの際、丸木は丸味を帯びて削り取られている。		
H-C-	コナラ	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	既設	平準削り(した後)表面のほぼほぼ中心縁を連続削り取りする。上部は、幅約 3cm の工具痕の凹凸があるものを平準に仕上げている。表面は右側縁が連続削り取られ、直ぐ削り取られている。裏面は平準削りである。		
H-C-	コナラ 黒コナラ 片筋	C	AN	1 本筋 鉄筋	1 本筋 鉄筋	分削り	連作伐痕あり。表面下部は平準削りになるが、中央部は残る。裏面はほぼ平準である。		炭化?

建物番号	No	階層	種別	グリッド	構造体 部位置	部材の種類、 実測寸法		形態・技法	全高 (mm) の 補遺 注	備考
H-C-		キハダ	C	AN	1本柱	杭(丸木)	芯持丸木	上部が破壊している。下部は腐りにより丸味を帯びている。		
H-C-		二し炭	C	AN	1本柱 野水部 笠付部	半割材	芯持半割	遺存状態悪い。表面は二次加工あり。裏面は平頭。表面下部に腐り痕あり。		
H-C-		クリ	B	AN	1本柱 野水部 上部	板目材	板目	断面内で、表面下部・表面左側縁に大きな割傷あり。上下部は破壊している。二次加工なし。		
H-C-		クンボ アノシ	C	AN	1本柱 野水部	割材	分割	分割時の下部裏面に腐り割傷形状にしている。右側縁中央には分節部分が見られる。		
H-C-		クリ	C	AN	1本柱 野水部	杭(割材)	分割	両面・左側縁に割傷あり。右側縁縁付目に腐り出しがある。右側縁は真っ直ぐに加工する。右側縁から下部にかけて斜めに割れ、下向きを向く。上部には切欠けとした腐り痕が見える。		先端腐化
H-C-		クリ	C	AN	1本柱 野水部	用途不明加工(端状)	板目	表面を取り回り平頭面を作り出す。裏面は芯部分を削り出す。両側縁下部斜めに削り出し。下部は真っ直ぐである。全体に丁寧な二次加工である。		先端腐化
H-C-		クリ	C	AN	1本柱	柱状先端加工(割材)	分割	全体に二次加工あり。断面三角形で、裏面の中央から下部の縁線の上に腐り入る。		側面腐化
H-C-		クンボ アノシ	C	AN	1本柱	割材	分割	表面下部から下部にかけて腐りをいれて斜めに加工している。裏面上部にも腐り痕あり。		
H-C-		クリ	C	AN	1本柱	割材	分割	両面は欠損している。二次加工なし。		
H-C-		クリ	C	AN	1本柱 端部	杭(丸木)	芯持丸木	表面腐敗あり。下部丸味を帯びる。上部破壊。裏面一部欠損。		
H-C-		ウルシ	C	AN	1本柱 立ち杭	杭(柱目録)	柱目	上部全体に削りによるツブレが見られる。また、裏面に削りによる凹みが見られる。上部や中腐している。		
H-C-		ウルシ	C	AN	1本柱	板目材	板目	深く削り割った板材で、表面の左右端も斜めになり、中央は削り腐り残ってほぼ平頭である。裏面は平頭で、上部に削り取り時の縁線残存する。		
H-C-		クリ	C	AN	1本柱	柱目録	柱目	同一個体と思われるが割れしない。両面を削り出しで平頭に仕上げている。断面にごく浅い腐り痕が見られる。上部は虫食により変形している。		
H-C-		クリ	C	AN	1本柱	用途不明加工(端状)	板目	木質の内部を削り取り、両側縁縁線に緩やかに立ち上がり。両側縁は真っ直ぐに加工される。裏面は中央の縁線を除くすべてに裏面左側のみ加工されている。		
H-C-		クリ	C	AN	1本柱 野水部 笠付部	丸木材	芯持丸木	断面の上部の高さをそろえ、下部を尖らせた形状。一辺削りをして、平頭面を作り出す。		AMS5級 HWATHAR9
H-C-		クリ	C	AN	1本柱 野水部	半割材	芯持半割	上部がやや中腐った感じとした丸木の下部の一部を削り取り平頭面を作り出す。上部は断面を揃えて残す。裏面中央付近に腐り出した浅い凹みが見られる。上部には切欠けした腐りあり。芯持残存する。		AMS5級 HWATHAR9
H-C-		二し炭	C	AN	1本柱 高板	板目板	板目	表面左側縁に削り腐り痕が2ヶ所見られる。裏面中央付近に削りがある。		
H-C-		クリ	C	AN	1本柱 野水部 笠付部	丸木材	芯持丸木	丸木を5〜6割削りして断面形状に仕上げている。上部右側縁は大きく破壊している。下部は断面が大きく変形している。一辺削りに長さ cm、幅 3cmほどだけ残して加工されている。両側縁の下部及び裏面の縁線に腐りが見られるが程度は浅く平らに仕上げられている。		部材利用全 面腐り
H-C-		コナラ 黒コナラ	B	AN	1本柱 野水部	丸木材	芯持丸木	芯持とした丸木を5割削り両面に作り出す。二次加工なし。両側縁はやや丸味を帯びている。下部はほぼ真っ直ぐに削られ、上部は断面形状によるように腐り入るが、いずれも断面長方形に加工されており、何らかの部材であった可能性が高い。		芯持して加工
H-C-		クリ	C	AN	1本柱 端部	半割材	芯持半割	表面は上部を削り割がしている。これ以外の加工は見られない。		
H-C-		カエデ	B	AN	1本柱 野水部	柱状先端加工(丸木)	芯持丸木	丸木材を伐採したもので、裏面上部に削りを入れ平頭にしている。両面は芯部分を削って切り離されている。		端状付き
H-C-		カエデ	C	AN	1本柱 野水部 笠付部	柱状先端加工(丸木)	芯持丸木	丸木材を伐採したもので、上部は丸みがあり、下部は平頭に作り出される。		端状付き
H-C-		ハンノ クニ ハンノキ	C	AN	1本柱 野水部 内	丸木材	芯持丸木	下部は二重に削りが入る。下部には両面から斜めに割れたあとがあり、伐採時の痕跡の可能性が高い。		端状付き
H-C-		キハダ	C	AN	1本柱 野水部 笠付部	板目材	板目	半割材で、両面・左側縁を真っ直ぐに加工する。裏面は削り取り時の状態である。左側縁から下部にかけて丸味を帯びて削られている。裏面上部はさらに削り残されている可能性がある。		
H-C-		ミズギ	C	AN	1本柱 端部	丸木材	芯持丸木	断面によるヒビが全体に入る。木の輪が削り部分を利用し、上部は断面長方形によるように腐り入る。下部は先端を尖らせるよう削りして傾いている。下部には腐りによるダメージが見られる。		先端腐化
H-C-		オニギ カサ	C	AN	1本柱 高板	丸木材	芯持丸木	分割時に両面に平頭面を作り出す。上部は両側縁を斜めに削り、先端を尖らす。		
H-C-		クリ	B	AN	木造	丸木材	芯持丸木	芯部分を削り両面を平頭にする。裏面の下部は芯部分を削り両側縁を縁線に削り出し。両側縁は削り取りによる形状のままである。上下部は両面とも平頭で深く削られている。		
H-C-		クリ	B	AN	木造	半割材	芯持半割	平頭(した後) 芯部分を削り、表面に粗皮の剥がれた部分あり。上下部は切欠けの加工あり。		
H-C-		コナラ 黒コナラ	C	AN	板状 部材	欄干用材	芯持板目	削り出しで、上部は断面形状に削り、下部は幅が広がる形状である。下部の断面形状はやや中央が膨らんだ形状である。上部及び下部には破壊している。		
H-C-		コナラ 黒コナラ	C	AN	板状 部材	欄干用材	芯持板目	両面に平頭面を作り出し、全体的に削って形を整えている。下部の両側縁を斜めに削っている。		
H-C-		コナラ 黒コナラ	C	AN	板状 部材	欄干用材	板目	両側縁から下部にかけて丸味を帯び、平頭面が隅内部分である。上部は破壊している。断面は中央が膨らんだ形状である。表面には削り痕跡がある。		
H-C-		イヌ ツルギ	C	AN	板状 部材	欄干用材	芯持丸木	丸木の柱で、両面を切欠いた削り腐り痕がある。表面左側縁を削り残している。		
H-C-		コナラ 黒コナラ	C	AN	板状 部材	欄干用材	板目	板材の両側縁の上部・下部にかけて真っ直ぐに加工される。下部には削り部の痕跡が見られるが、切欠けの痕跡である可能性が高い。両面は平頭で、表面下部は削り部の痕跡が見られる。		

岩盤小致 4 遺跡

遺物番号	No	形状	素材	グリップ	遺物所在部位	製造の時期・状況	形態・技法	全長 (mm) 推定値	備考
H-C-		ナリ	C	AN	環状状遺物 (丸石・内形)	新石器	最大厚 5mm 程度の薄板で、磨り出されていく。縦線は中や厚く、ごく細く立ち上がるようである。反対側の縁が厚く、1.2mm 程度である。		
H-C-		ナリ	C	AN	環状状遺物 (丸石・内形)	新石器	同一と一と思われるが理由がなかった。上部は丸味を帯びている。両端を平直に磨り、左側縁をやや高く残している。裏面はほぼ平直で両側縁付近で軽く立ち上がる。下部は横線が深い。		
H-C-		コナラ丸コナラコナラ	B	AO	環状状遺物	磨り研削用	全体的に磨面を付与して磨り出している。下部は尖らせてあり、磨り縁の磨り残される。下部は磨り打による凹凸のツレが見られる。		
H-C-		ナリ	C	AO	環状状遺物	杖(薪材)	下部を斜めに磨っている。裏面に磨り打による凹凸あり。		
H-C-		サハギ	C	AN	杖(薪材)	分断	上部から磨り打より、下部が磨り打による。重みによるヒビも見られる。		
H-C-		ナリ	B	AO	環状状遺物 7	用途不明加工工程 (管轄状)	方形の半環材の裏面を半円状に磨り、裏面は内部を削りぬき、両端を平直にしていく。中心部は両側の縁と 2mm ほど高く平直に磨り出す。		
H-C-		ケンボアナシ	C	AN	環状状遺物	紅目板	全長の上部 1/3 は断面が円筒形で磨り、その他 2/3 は上部より 0.5mm 程度で磨り出している。両端左側縁と下部付近はさらに磨り出している。下部は斜めに切り落とされている。上部は縦線が見られる。		
H-C-		ナリ	C	AO	杖(薪材)	分断	断面三角形で、中央部分は、磨り打によって重みを感じている。下部は丸味を帯び、一部尖り残りが残り、磨り打による凹凸も見える。下部左側縁は縦線に磨り出している。	AMS 試料 RWATARI	
H-C-		ナリ	C	AO	杖(薪材)	分断	断面三角形で、中央部分は、磨り打によって重みを感じている。下部は丸味を帯び、一部尖り残りが残り、磨り打による凹凸も見える。下部左側縁は縦線に磨り出している。	AMS 試料 RWATARI	
H-C-		ナリ	C	AO	杖(薪材)	分断	断面三角形で、中央部分は、磨り打によって重みを感じている。下部は丸味を帯び、一部尖り残りが残り、磨り打による凹凸も見える。下部左側縁は縦線に磨り出している。		
H-C-		ナリ	C	AN	環状状遺物 (丸石)	磨り研削用	磨り取りにより断面が五角形状である。裏面には縦線が見られる。下部は全体が丸味で、下部にかけて尖り出す形状である。上部は中央部分を削り、磨り打によるツレも見られる。		
H-C-		コナラコナラコナラ	C	AO	環状状遺物	杖(薪材)	上部に磨り打によるツレあり。上部断面に磨り縁の磨り残りが残り、下部は両側縁を斜めに磨り先端を尖らさず。		
H-C-		コナラコナラコナラ	B	AN	板状遺物	薪材	一部が折れ、裏面は平直で、上部は磨り打による。裏面は平直に加工され、上部から上部にかけて磨り打より。		
H-C-		ナリ	B	AN	板状遺物	丸木材	分断した磨り取った板状に加工する。上部は右側部分を切断し、見る左側の一部を丸く削り出している。中央部は凹凸による加工されている。裏面に縦線は一部残されている。両端は磨り取った板状である。裏面は断面が磨り打によるツレが残り、磨り打によるツレも見られる。		
H-C-		ナリ	A	AN	板状遺物	紅目板	両端とも平直に磨り、下部断面を斜めに磨り出し、上部は下部と厚さで違いが残り、断面は磨り取った板状である。裏面は断面が磨り打によるツレが残り、磨り打によるツレも見られる。		
H-C-		ナリ	B	AN	板状遺物	紅目板	分断した木質を磨り取ったもので、この部分が加工されている。裏面には磨り取り縁の磨り残りが残り、断面は断面が磨り打によるツレが残り、磨り打によるツレも見られる。	裏面(裏面) AMS 試料 RWATARI	
H-C-		ナリ	C	AN	環状状遺物	杖(薪材)	両端・両側縁は長方形・長方形に加工する。全体に角がとれて磨り出している。裏面は断面が磨り打によるツレが残り、磨り打によるツレも見られる。	横の可能性あり?	
H-C-		ケンボアナシ	C	AN	杖(薪材)	3分断(断面)	上部から上部にかけて丸味を帯び、下部は断面を残して斜めに切断している。下部は縦線を作り出し、中央部を方形断面に磨り出している。		
H-C-		ナリ	C	AO	杖(薪材)	分断	上部左側縁に磨り打によるツレ1箇所あり。	炭化 磨り打付	
H-C-		コナラ丸コナラ丸コナラ	C	AN	杖(丸木)	芯持丸木	全体的に炭化、下部に磨り打による凹凸が見られる。		
H-C-		ナリ	C	AO	杖(薪材)	新石器	幅 7cm の板であるが、上部から下部にかけてカーブしている。両端とも平直に磨り出している。上部は断面が磨り取った板状である。	磨り打?	
H-C-		ナリ	C	AN	環状状遺物	両側縁磨り	両側縁全面に磨り残あり、芯部はやや丸味を残している。磨り打によって断面は、両端に磨り取り縁が残る。		

遺構外出土木質遺物

遺物番号	No	形状	素材	グリップ	遺物所在部位	製造の時期・状況	形態・技法	全長 (mm) 推定値	備考
H-C-		コナラ丸コナラ丸コナラ	B	AN	磨り研削用	磨り研削用	断面が円形に磨り出され、下方から下部にかけて先尖りした形状で、両端が磨り出している。中央部はやや変形している。上部は断面が長方形で両端に平直に磨り出され、へら状になる可能性がある。		
H-C-		コナラ丸コナラ丸コナラ	C	AN	磨り研削用	磨り研削用	上部は縦線が深い。下部は断面が長方形で、両端は断面が磨り出されている。裏面下部に工具による磨り打りや、磨り打りによる凹凸が残り、長さ 2mm 程度で、両端を丸く加工している。		
H-C-		コナラ丸コナラ丸コナラ	C	AN	磨り研削用	磨り研削用	元は磨り研削と思われるが、縦線 7 のため、裏面が半分欠損している。下部は平直で、両側縁から磨り出している。上部から上部は断面が磨り取った板状である。	輪廻材の可能性あり	
H-C-		アスロ	B	AN	磨り研削用	磨り研削用	磨り取って全体を丸く加工する。断面下部に磨り残あり、下部は全体に磨り、下部をやや中出す。		
H-C-		コナラ丸コナラ丸コナラ	B	AN	磨り研削用	磨り研削用	へら状を磨り研削の未製品。へら部分の両端を平直に磨り、断面は長方形で、下部から下部にかけては先を尖らす。他の部分は断面が長方形である。		
H-C-		コナラ丸コナラ丸コナラ	B	AN	磨り研削用	磨り研削用	断面はほぼ円形で、裏面が上部が大きく破損している。下部もわずかに破損している。		
H-C-		コナラ丸コナラ丸コナラ	B	AN	磨り研削用	磨り研削用	へら状を磨り研削の未製品。上部は断面が長方形で磨り出している。下部は大きく欠損している。左側縁の一部は木質との接合により欠損している可能性がある。		
H-C-		コナラ丸コナラ丸コナラ	B	AN	磨り研削用	磨り研削用	へら部分の上部両端欠損。上部は平直でやや丸味を残している。両側縁とも断面が平直に磨り出されている。断面は断面が磨り出されている。下部は断面が磨り出されている。		
H-C-		コナラ丸コナラ丸コナラ	B	AN	環状状遺物	新石器	全体に平直で、下部に二次加工あり。両側縁は磨り出している。断面は縦線が残り、断面に向かって丸味を帯びる。裏面には斜めに縦線が残り、	縦線	

岩盤小致4 通称

通称番号	No	形状	グリッド	構造体	用途の場所、実用等	形態・技法	全長(mm)幅高さ	備考
H-C-		オニブ丸型	C	AN	柱目	全形二次加工あり、両面はほぼ平直で、表面は上面から上面にかけて削りがある。両側縁は丸みを帯びており、裏面は工具痕が見られる。下部は破壊している。		
H-C-		クリ	A	AO	角材	芯芯角		先端欠損
H-C-		実Vヘルト	オニブ丸型	C	AN	角材	芯芯角	
H-C-		キハダ	B	AN	角材	6分割		
H-C-		クリ	B	AN	角材	芯芯角		
H-C-			C	AN	角材	芯芯角		
H-C-		オニブ丸型	C	AN	角材	芯芯角		
H-C-		クリ	C	AN	角材	柱目		先端欠損あり
H-C-		コナラ横コナラ型	B	AN	角材	芯芯角		
H-C-		クリ	C	AN	棟柱加工材	芯芯角		
H-C-		クリ	C	AN	棟柱加工材	芯芯角		
H-C-		ケンボナシ型	B	AN	棟柱加工材	芯芯角		
H-C-		コナラ横コナラ型	C	AN	棟柱加工材	芯芯角		
H-C-		単子葉植物	C	AN	棟柱加工材	芯芯角		棟柱木製
H-C-		ジワコソギ	C	AN	棟柱加工材	芯芯角		棟柱木製
H-C-		クリ	C	AN	棟柱加工材	芯芯角		
H-C-		クリ	C	AN	棟柱加工材	芯芯角		
H-C-		クリ	C	AN	棟柱加工材	分割		
H-C-		クリ	A	AN	柱状先削加工材(角材)	芯芯角		先端欠損
H-C-		実Vヘルト	クリ	C	AN	柱状先削加工材(角材)	芯芯角	
H-C-		ケンボナシ型	B	AN	柱状先削加工材(角材)	芯芯角		炭化あり
H-C-		クリ	B	AN	柱状先削加工材(角材)	芯芯角		先端欠損
H-C-		クリ	C	AN	柱状先削加工材(角材)	芯芯角		先端欠損
H-C-		クリ	B	AN	柱状先削加工材(角材)	芯芯角		先端欠損
H-C-		コナラ横コナラ型	B	AO	柱状先削加工材(角材)	芯芯角		先端欠損
H-C-		クリ	C	AN	柱状先削加工材(角材)	芯芯角		
H-C-		オニブ丸型	A	AN	柱状先削加工材(角材)	芯芯角		
H-C-		クリ	C	AN	柱状先削加工材(角材)	芯芯角		へう付削り跡か?
H-C-		クリ	B	AN	柱状先削加工材(角材)	芯芯角		
H-C-		キハダ	C	AN	柱状先削加工材(柱目)	柱目		表面欠損
H-C-		クリ	B	AO	柱状先削加工材(柱目)	柱目		
H-C-		コナラ横コナラ型	A	AN	柱状先削加工材(柱目)	柱目		
H-C-		クリ	C	AN	柱状先削加工材(柱目)	柱目		先端欠損

遺物番号	No	形状	素材	グッド	遺物構成	加工の種類、		形態・技法	全長 (mm)	備考
					状況	状況			長さ	
H-C-		クリ	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		下部から下部にかけて先頭を尖らす。上部は破壊。二次加工なし。		先頭加工
H-C-		クリ	C	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		表面・右側縁に二次加工あり。上部左側縁斜めに削り落とす。		先頭加工
H-C-		二方片	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		表面は平直で二次加工あり。右側縁・裏面は削り取り残あり。下部両側縁斜めに削り。下部は先頭を尖らす。		先頭加工
H-C-		クリ	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		表面は平直で、両側縁は真っ直ぐに加工された全体に平直である。表面は削り取り残あり。上部は削り落とされ、下部から下部にかけて削りの痕跡あり。		先頭加工
H-C-		クリ	C	AO	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		断面に削り取られたもので、上部は破壊している。下部につれて細くなっている。		
H-C-		クリ	C	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		表面は平直に作り出され、裏面は上部から中央にかけて7箇所削り残あり。両側縁下部から下部が削られ、先が尖る。		
H-C-		クリ	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		分断後、全面に二次加工あり。下部両面を磨くしている。上部には削りあり。		
H-C-		コナラ 樹皮コ ナラ	B	AO	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		と原木7分部分を一部份削し、裏面を削り取る。削り取り後の痕跡なし。下部表面両側縁は斜めに削り落とされる。上部は比較的平らに削り落とされる。		
H-C-		クリ	C	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		表面に削り取り時の痕跡が残る。表面から両側縁にかけて平直である。二次加工あり。上部左側縁に削り残あり。下部縁部左が左側縁下部は斜めに削り出される。		
H-C-		クリ	A	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		下部両側縁・表面を削り先頭を尖らす。両面に削り取り時の痕跡が残る。		
H-C-		クリ	C	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		表面及び両側縁は平直に作り出される。表面左側の大部分は削り取られている。裏面には若干ではあるが削り残あり。表面左部は斜めに削り出される。		
H-C-		クリ	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		両面平直で、裏面下部は破壊している。上部は比較的あり、下部から下部にかけては先が尖る。		
H-C-		クリ	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		二次加工なし。表面に工具痕のようなものがあるが不顕。左側縁下部から下部に削りあり。		
H-C-		カゴ	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		表面は平直で、裏面は比較的あり。右側縁は下部から下部に向かい尖る。		
H-C-		クリ	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		右側縁を真っ直ぐに加工する。裏面はほぼ平直である。下部左側縁から下部にかけて斜めに削られる。裏面に削り取り残が見られる。		痕跡残存
H-C-		カゴ	C	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		上部に削り残。下部両側縁から斜めに削られ、下部を尖らす。表面中央付近に削り残あり。		痕跡残存
H-C-		クリ	C	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		削り取りにより、断面長方形状になる。右側縁は比較的なが。右側縁はほぼ真っ直ぐに加工する。裏面は削り取りにより中央部がぼんやりしている。表面下部は下部に削って先頭を尖らす。		表面加工
H-C-		クリ	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		全体に二次加工あり。削り取り時の痕跡残存する。両側縁の下部斜めに削り下部を尖らす。工具痕残存。		先頭加工
H-C-		クリ	C	AO	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		削り取り時の痕跡残存する。下部は表面と両側縁を削って先頭を尖らす。上部は比較的残る。		先頭加工
H-C-		クリ	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		全面に削り取り時の痕跡が残る。右側縁は真っ直ぐに加工される。下部は右や斜めに削り出す。全体に平直である。		先頭加工
H-C-		フナボ ン片	C	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		両面に削り取り時の痕跡が残る。両面下部から下部にかけて削りあり。		先頭加工
H-C-		クリ	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		全面に削り取りあり。角材に加工している。上部は破壊している。下部は右側縁斜めに削り落とされている。		先頭加工
H-C-		クリ	A	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		全体に平直で、二次加工あり。表面左側半分が大きい削り取られ、上部は断面長方形に削り落とされている。両面下部に削りあり。		先頭加工
H-C-		クリ	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		両側縁上部斜めに削り下り表面に二次加工あり。		先頭加工
H-C-		クリ	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		削り取り前に炭化?二次加工なし。削り取り時の形状をそのまま利用?		先頭加工
H-C-		クリ	C	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		削り取りによる痕跡あり。二次加工なし。下部は若干細くなっているが、炭化により跡跡不顕。断面の形状をそのまま利用?		炭化あり
H-C-		クリ	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		下部から下部にかけて尖らせる。裏面に二次加工あり。上部には削り残あり。		先頭加工
H-C-		クリ	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		右側縁は真っ直ぐに加工する。表面を側面を中心に尖らす。上部は炭化により跡跡に削れる。左側縁下部は斜めに削られる。		先頭加工
H-C-		クリ	C	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		断面長方形に近いが、表面左右側縁を削り下っている。上部に削り取りによる跡跡あり。下部は比較的残っている。左側縁から下部にかけて炭化している。下部は下部から下部に削り取り時に削り先頭を尖らせている。		
H-C-		トナリ コ	C	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		断面長方形で表面は平直。丁寧な二次加工あり。表面上部から下部は斜めに削られる。		
H-C-		クリ	C	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		削り取り時の痕跡残存する。下部は表面を削り、先頭を尖らす。上部尖る。		
H-C-		クリ	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		削り取りにより幅5mm程度の幅に加工した後、右側縁の下部斜めに削り。上部を尖らせている。右側縁上部に比較的よく削り残(炭化)あり。下部は表面を削り取り時に削り落とす。全体に平直である。		
H-C-		オニグ ル	B	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		下部の先頭が削られる。		先頭加工
H-C-		クリ	C	AN	柱状先加工 工材(器具 材)	断面		二次加工全体にあり。削り取り時の痕跡表面に残存する。下部は細く削られ、上部は破壊している。		先頭加工

岩盤小致 4 通筋

通筋番号	No	形状	グリッド	通筋構成	筋の配列・配筋率	形態・技法	全長 (mm) 補遺	備考
H-C-		クリ	B 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	掘り取り直張り。下部は鉄筋を掘り、先を尖らす。		先頭硬化
H-C-		クリ	C 層 AD	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	全体二次加工あり、表面下部に掘り直しが残る。下部は先頭を帯びて掘られる。上部は鋼筋。		先頭硬化
H-		クリ	C 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	全体に二次加工あり、断面三角形だが、上部は掘り直して扁平で、下部は先頭が鋭くなっている。		先頭硬化
H-C-		クリ	B 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	分層時に、上部から下部にかけては、断面形状が方形から五角形で、下部では断面三角形になる。下部にかけ直り直る。全体に二次加工あり、裏面に掘り直しのよみは鋼筋も残る。		標準?
H-		クリ	B 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	下部先頭を尖らす。鉄筋は全体に平準で二次加工あり、表面上部に鋼筋による掘りあり。		先頭硬化
H- 実Vヘルト		クリ	C 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	右側は下部に掘りあり、このほかの二次加工は不明。		先頭硬化
H-C-		クリ	C 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	上部から下部にかけて断面を削り出して断面長方形に削り、下部は鉄筋を斜めに削り、先頭を尖らす。		先頭硬化
H-C-		クリ	C 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	全体に二次加工あり、右側面に工具痕多量あり、下部から下部にかけて全体に削り、尖らす。		先頭硬化
H-C-		クリ	C 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	断面三角形で、全体に平準。丁寧な二次加工あり、下部は断面左右側面を掘り先頭を尖らす。表面上部は鋼筋は若干残しているが、全体としては鋭くなる。		先頭硬化
H-C-		クリ	C 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	分層時の下平を掘り直して下平を先頭させている。断面形状上部で方形だが、下部では角となる。掘り直り直りの状態で掘りによる歪みが見られる。また、工場の直下でのよみは長さ 1m 程度のくぼみ跡がまだ確認できる。		先頭硬化
H-C-		クリ	B 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	下部鉄筋面は二次加工の可能性あり。		
H-C-		二方キ	B 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	下部右側面を斜めに削っている。右側は平準で、掘削のようなものが重交している。		
H-C-		クリ	A 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	裏面に掘り取り時の線状残存する。左側は下部から下部にかけて斜めに削り出される。		
H-C-		クリ	B 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	全体に平準で、二次加工あり。掘り取りにより生じた線状残存している。また、正断面形状を中心に工具痕による崩れあり。上部は鉄筋に向って斜めに削り直している。		
H-C-		クリ	C 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	二次加工あり、裏面に掘り取り時の線状残存する。表面は平準で、下部は尖らす。		
H-C-		クリ	B 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	全体に平準で、丁寧な二次加工あり、中央付近が大きく削られている。右側は真っ直ぐに加工される。裏面は掘り取り時の線状残存する。下部には左側面に掘りあり。		
H- 実Vヘルト		クリ	C 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	全体に二次加工あり、裏面に掘り取り時の線状残存する。右側は下部から下部にかけて斜めに削りあり。		
H- 実Vヘルト		二方キ	C 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	3 分離 (断面形状)	断面の残存状態無し、裏面に掘り取り時の線状残存する。左側は下部に向かって斜めに削られる。		
H-C-		クリ	C 層 不明	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	鋼材の表面上部と下部断面を削り出している。上部は右側面から上部にかけて斜めに削り、下部は表面から削り出す。全体に二次加工あり、裏面に掘り取りあり。		
H-C-		クリ	C 層 AD	柱状先張加工鋼 (鋼材)	8 分離	表面左側面に縦から入った掘り直りあり。上部から中央付近に断面三角形だが、下部では断面長方形に削り直。両側面削れているが上部から上部にかけては斜めに削り出される。		硬化あり
H-C-		クリ	B 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	二次加工あり、全体に先頭を帯びている。下部は両側面から斜めに掘り落とし、先頭を尖らす。上部は分層時に掘り直されている。		
H-C-		クリ	B 層 AD	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	二次加工あり、表面は平準。裏面は掘り取り時の線状残存する。表面下部は平準に加工される。裏面に鋼筋上部に工具痕あり。		
H-C-		コナブ 鋼コナブ 鋼	B 層 AD	柱状先張加工鋼 (鋼材)	6 分離	表面右側面上下を削ぎている。左側面は真っ直ぐに加工される。右側は下部から下部に削りあり。		
H-C-		アスタ ロ	C 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	全体に掘り取りあり、裏面と上部に線状残存。上部は削りによる崩れも見られる。下部は両側面から削られ丸がる。		
H-C-		クリ	B 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	掘り取り時の線状残存する。表面上部に掘り直りあり。裏面は硬化。両側面と両側下部を掘り先頭に向けて削り直している。		硬化あり
H-C-		クリ	C 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	分離	掘り取り時の線状残存する。二次加工の有無は不明だが、左側面に掘り直りあり。		先頭硬化
H-		エノキ 炭	C 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	6 分離	木炭層の表面上部に浅い層あり、右側面下部から下部にかけて掘りあり。		腐食被害
H- 実Vヘルト		オニゴ ル	C 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	芯持半断	断面形状で、全体に二次加工あり、裏面に存在させる。左側面下部から下部にかけて斜めに削り出す。		全体腐食
H-C-		二方キ	B 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	芯持半断	先平を半分削り取り、木炭を平準に加工した直後あり。上部は1層目の直後あり。下部は硬化してあり。不明。木炭には芯持無し掘り取り時の線状残存する。両側面を掘り断面長方形に削る。右側面は斜めに削り先頭を尖らす。		先頭硬化
H- 実V		ヤマブ ウ	C 層 AD	柱状先張加工鋼 (鋼材)	芯持半断	半断時の下平を削ぎしている。上部は線状残存している。両側面を斜めに削り先頭を尖らせている。		先頭硬化
H-C-		クリ	A 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	芯持半断	丸木の半断材で、上部ととなり。下部から下部にかけて斜めに削り出される。		先頭硬化
H-C-		クリ	C 層 AD	柱状先張加工鋼 (鋼材)	芯持半断	丸木を平準し、表面両側下部を斜めに加工している。		
H-C-		クリ	A 層 AN	柱状先張加工鋼 (鋼材)	芯持半断	半断材の木炭部分を二方向から削り取る。中心に線状残存。裏面は比較的平準。左側面下部から下部に削りあり。		
H-C-		クリ	B 層 AN	柱状先張加工鋼 (丸木材)	芯持丸木	裏面・右側面を真っ直ぐに加工される。下部を尖らす。上部は断面あり。		先頭硬化

建物番号	No	階層	部材	グリッド	構造体 完成部	部材の種類、 仕様等	形状・技法	全高 (mm) 備考	備考
H-C-		02	床	AN		柱状先張加工材(丸木材)	丸木材の下向きを二方向から斜めに削る。上向きはほぼ平らに削られ、削り残あり。裏面と右側縁の一部が真っ直ぐに加工される。		先張強化
H-C-		クリ	床	AN		柱状先張加工材(丸木材)	丸木の外側を削り落とし、断面を五角形状に加工する。削り落とされた面はほぼ平らである。中央部分は木こぶあり。上向きはほぼ平らあり。下部表面は斜めに削られ、その部分の色が変化する。		先張強化?
H-C-		イスエ ンジュ	床	AN		柱状先張加工材(丸木材)	丸木の外側を削り落とし、両面を平らにし、断面を長方形に加工する。上部を削り落とし、下部に向けて斜めに削られる。		
H-C-		オニヅ ル	床	AN		柱状先張加工材(丸木材)	削り取りにより中央は断面がレンズ状になり、他は断面が三角形になる。左側縁から下部にかけて斜めに削られる。		
H-C-		クラノ ホ	床	AN		柱状先張加工材(丸木材)	表面一部削りと上部が研ぎされている。下部は表面を 5cm 前後削り、下部を尖らす。表面と上部と中央に削りあり。		
H-C-		コナラ 黒コナ ラ	床	AN		柱状先張加工材(丸木材)	丸木の外側及び両側縁を削り、断面が凸レンズ状になるよう加工している。上向きは両面を加工する際に斜めに削られている。		芯持材を平らに加工
H-C-		イスエ ンジュ	床	AN		柱状先張加工材(丸木材)	丸木材で、裏面と上部から下部全体に削り取りあり。下部は斜めに削られている。		
H-C-		クリ	床	AO		柱状先張加工材(丸木材)	断面を広く作り出す。下部は先張を尖らせ、断面が三角形になる。		
H-C-		クリ	床	AN		柱状先張加工材(丸木材)	芯欠無し? 芯部分欠。下部研削。上向きは真っ直ぐに切り落とし、右側縁を削り削がした状態あり。		
H-C-		クリ	床	AN		柱直板	上部左側研削。二重加工あり。		
H-C-		コナラ 黒コナ ラ	床	AN		柱直板	両面には調整面なし。下部を斜めに削り落とし、裏面右側縁に滑り削りに削り削がし面あり。		端部強化
H-C-			床	AN		柱直板	両面から削って薄く仕上げしており、表面に削り残りが残る。左側にややゆがみがある。		
H-C-		ヒノキ	床	AN		柱直板	両面を薄く削り出し、素材に加工している。表面を側縁にごく浅く深く端縁が見られる。		横断あり?
H-C-		クリ	床	AN		柱直板	削り削がしにより、縦状に加工する。両側縁は真っ直ぐに加工される。表面から右側縁にかけて工具痕あり。		
H-C-		カエデ 葉	床	AN		柱直板	全体に平手で、丁寧な二次加工あり。右側縁が滑らかな断面三角形である。右側縁は削り残りが残る。		
H-C-		クリ	床	AN		柱直板	全体に平手で二次加工あり。両面・左側縁は真っ直ぐに加工される。下部は表面から下部にかけて斜めに削られ、下部付近では両面とも削り残りが残る。左側縁は平ら。		先張強化
H-C-		クリ	床	AN		柱直板	全体に削り取り時の縁線あり。両側縁は真っ直ぐに加工され、全体に平手である。上端削りあり。		先張強化
H-C-		ニレ	床	AN		柱直板	上部の表面から左側縁にかけてと下部の表面から右側縁にかけて削り残りが残る。両面とも同様の削れがある。両側縁は幅 3cm 前後は真っ直ぐに加工される。		右方向の芯材を露出?
H-C-		トナリ コ	床	AN		柱直板	断面が竹の形で、全体に平手で二次加工あり。上向き欠。裏面と上部に削りとツレの痕線がある。下部から下部方向に向かって力が加わった痕線あり。		
H-C-		ニレ	床	AN		柱直板	両面はほぼ平ら。両側縁に削り取り時の縁線残存する。全体に工具痕・削り削がし残存。上部は両面・右側縁を削る。右側縁はややゆがみがある。裏面下部は斜めに削られる。	/ / /	
H-C-		オニヅ ル	床	AN		柱直板	表面に削り取り時の縁線残存する。裏面二次加工あり。		
H-C-		キハダ	床	AN		柱直板	両側縁を真っ直ぐに加工され、両面に平手面を作り出す。全体に平手で、両面ともほぼ真っ直ぐに削り削がしされている。		
H-C-		オニヅ ル	床	AN		柱直板	全体に平手で、丁寧な二次加工あり。両面を平らに加工している。両面の上部に削り取り時の縁線残存する。上部は削りあり。		
H-C-		クリ	床	AN		柱直板	全体に平手で二次加工あり。右側縁から裏面に削り取り取り時の縁線残存する。左側縁・下部に削り残あり。		
H-C-		キハダ	床	AN		柱直材	二次加工面が一部に削られる。下部は丸みを削り削がれる。上部は尖削している。		遺存状態悪い
H-C-		クマシ ズ マシ デ	床	AN		柱直材	両面に二次加工あり。両面左側縁には浅い削りあり		
H-C-		コナラ 黒コナ ラ	床	AN		板直板	上部に削り。下部に工具痕あり。両面に削り取り時の縁線残存する。		板皮付き
H-C-		コナラ 黒コナ ラ	床	AN		板直板	全面平手で、丁寧な二次加工あり。両側縁は丸みを削り。裏面の上部から上部にかけて削り残りが残る。		板皮付き
H-C-		クリ	床	AN		板直板	全体に平手で、丁寧な二次加工あり。削り取り時の縁線残存する。断面の中央部分にややゆがみがある。下部は両面から薄く削られている。		
H-C-		クリ	床	AN		板直板	両面はほぼ平ら。両側縁は削り取り時の形状で斜めに削られている。両端研削。		
H-C-		クリ	床	AN		板直板	断面全体が平手で、左側縁部は丸味を持つ。全体に反っているようであるが表面右側縁部とする接合部の可能性もある。		管轄内の可能性あり
H-C-		キリ	床	AN		板直板	表面全体に角切込みあり。削り出しによる縁線の加工痕と思われる。表面左側縁は研削している。右側縁は丸味を削り削がれている。		先張強化
H-C-		黒 尻 瓦 ヘル ト	床	AN		板直板	両面に削り取り時の縁線残存する。両面とも平手で、下部は丸味を削っている。		
H-C-		オニヅ ル	床	AN		板直板	裏面に削り取り時の縁線残存する。断面は中平手で二次加工あり。		

遺物番号	No	種類	部位	グリッド	遺物構成	製造の時期	大塚市	形態・技法	全長(mm)	備考
H-C-	-	クリ	D層	A0				両面を削って平坦面を作り出す。表面下部に削りの線跡あり。		炭化あり
H-C-	-	クリ	C層	AN				全面二次加工あり。両側線跡。		
H-C-	-	クリ	C層	AN				表面は平澤で、丸味を帯び、丁寧に二次加工されている。裏面は削り取り時の線跡残存する。		両面に炭化あり
H-C-	-	クリ	D層	AN				上面は長尺に削る。中央に部分に穿孔あり。表面部分で周辺も削っている。裏面に削り取り時の線跡残存する。下部は削打によるヒビが入る。裏面右側端には斜めに削りが入る。		
H-C-	-	クリ	D層	AN				上面に削打によるツレあり。両面・両側線跡を削り取り。裏面中央付近に長軸に直交する溝を削り出す。		
H-C-	-	クリ	C層	AN				板状に加工される。上面は破壊している。両側線跡を真っ直ぐに加工され、両端は削って平坦にしている。		
H-C-	-	キハザ	C層	AN				下部に両側線跡幅2cm、長さ4cmに削って直方型削り込み。全体的に両側線跡とその裏面右側線跡は深く削られている。表面上部も浅く削っている。表面には工具痕であった線跡が見られる。	///	
H-C-	-	ワルシ	C層	A0				右側線跡が深く、左側線跡がやや厚みを持つ形状。左側線跡は真っ直ぐに加工される。		線跡炭化
H-C-	-	クリ	C層	A0				残存線跡無し。二次加工なし。中央付近で破壊している。	///	
H-C-	-	ケンボ テシ	D層	AN				全体に平澤で丁寧な二次加工あり。右側線跡には削り痕あり。表面上部は破壊している。		
H-C-	-	クリ	C層	A0				表面部に平坦面を作り出し、右側線跡下部を削り出す。左側線跡は削りの線跡が見られない。		
H-C-	-	クリ	D層	AN				板面材を削り削りす際に使用されたと思われる線跡あり。両面・両側線跡とも削りの線跡がほとんど見られない。一部、表面の両側線跡は浅めに削られている。下部はやや丸味を帯び、上部付近は深く削られている。		線跡
H-C-	-	オニゴ ルミ	D層	AN				板状に削り取り。表面上部を深く削り出している。下半部両側線跡の削り取り上部よりも鋭い線跡に加工する。裏面下部は削り取り時の線跡残存する。		
H-C-	-	クリ	C層	AN				両面は平澤で、両側線跡は真っ直ぐに加工される途中の段階である。全体に平澤で、丁寧な二次加工あり。両端は破壊。		
H-C-	-	コナラ 黒コナ ラ	C層	AN				削り取り痕あり。上面は丸味を帯びて削られている。表面上部に削り痕が浅い。		
H-C-	-	クリ	D層	AN				両面平坦に加工。両面とも上部・下部全体に削りあり。右側線跡はやや丸味だが、左側線跡はほぼ真っ直ぐに加工される。右側線跡に工具痕あり。		
H-C-	-	オニゴ ルミ	D層	AN				裏面に削り取り時の線跡残存する。右側線跡には斜めに削り落とされた痕あり。上面にも削り時の線跡が見られる。表面はやや平澤で二次加工した線跡あり。		
H-C-	-	キハザ	D層	AN				下部の両側線跡を斜めに削り、下部を尖らす。裏面は上面に削り残し部分あり。		
H-C-	-	カエデ	A層	AN				表面に二次加工の線跡あり。工具痕残存。上面を斜めに削り、両側線跡は丸味を帯びて削られる。裏面は二次加工があったが不明。		
H-C-	-	クリ	C層	AN				全体に平澤で、丁寧な二次加工あり。両端平澤で、両側線跡は真っ直ぐに加工される。裏面下部は削り痕が残る。全体に全体的であるが、木の歪みをもそのまま利用している。		
H-C-	-	キリ	C層	AN				裏面の下部全体を削って深く削っている。表面上部も全体削り込みが入る。		横穴か
H-C-	-	ワルシ	C層	AN				板材を深く削り取る。表面上下両面は割傷している。上部は右側線跡は残存しており、厚さ5mm程度で真っ直ぐに加工されている。		横溝?
H-C-	-	榎皮	C層	AN				表面を削いたもので下部を切り落とすもの。		板皮付き
H-C-	-	コナラ 黒コナ ラ	A層	AN				表面を削り、平坦面を作り出す。下面には削り痕あり。裏面は芯が残存する。		
H-	-	コナラ 黒コナ ラ	C層	AN				表面に削り取り時の線跡残存する。全体に二次加工あり。右側線跡下部を斜めに削られる。		板皮付き
H-C-	-	クリ	D層	AN				分節材の末節・本節を平澤に削り取り形状にする。両側線跡は削り取り時のままで、断面が形状である。両面は文割している。二次加工なし。		
H-C-	-	ワルシ	C層	AN				表面は全面板皮付き。裏面は平澤である。下部には削り痕が見られる。伏線跡のものか不明。		板皮付き
H- 武V ル	-	クリ	C層	AN				全体に二次加工あり。断面長方形になるよう削り出している。下部は両面から斜めに削る。		未組込か
H- 武V ル	-	クリ	C層	AN				削り取り時の線跡残存する。両面の両方を削り取って平坦面を作り出す。裏面に削りの線跡あり。		
H-C-	-	クリ	C層	AN				全体に平澤で、丁寧な二次加工あり。両側線跡を真っ直ぐに加工する。表面に削り取り時の線跡残存する。		
H-C-	-	クリ	C層	AN				両面平澤で、二次加工あり。削り取り痕あり。下部から下部にかけて斜めに削り、先端部を尖らす。表面上部から上部にかけて工具痕が残り、上部付近には上部からの削りが見られる。		
H-C-	-	カエデ	C層	AN				両面と左側線跡は真っ直ぐに加工する。右側線跡はやや丸味を帯びる。上部はやや斜めに削り落とされている。断面に中央付近が深くぼみ使用時の木であったと思われる。裏面は削り取り時の線跡残存する。		
H-C-	-	オニゴ ルミ	C層	AN				二次加工なし。裏面に削り取り時の線跡残存する。		
H-C-	-	クリ	D層	AN				両面に削り取り痕あり。裏面は二次加工あり?		

遺物番号	No	形状	素材	グリッド	遺物構成	製造の場所	使用時期	形態・技法	全長 (mm) 幅	備考
H-C-		クリ	C	AN		板素材	板目	丸木の両端を切断。斜めに削り取はいる。		
H-C-		クリ	C	AN		板素材	板目	全体に平澤で、二次加工あり。両側縁は真っ直ぐに加工される。上部が大きく削られている。		
H-C-		クリ	C	AN		板素材	板目	表面は平澤で、裏面中央付近には大きく窪みが残存する。下部は削りにより鋭角になっており、削り残りが残る。		炭化あり
H-C-		クリ	B	AN		板素材	板目	二次加工あり。左側縁を真っ直ぐに加工される。右側縁は下部を斜めに深く削り出している。		
H-C-		クリ	B	AO		板素材	板目	縦溝に近い部分を垂直に削り取る。表面は平澤で、下部右側縁はやや斜めに削り取られる。両側縁はやや斜めに削り取られている。		先端炭化
H-C-			C	AN		板素材	板目	遺存状態悪い。表面は平澤であるが、裏面は大きく破壊している。上部は破壊しているが、下部は平澤である。		
H-C-		クリ	C	AO		板素材	板目	裏面平澤で、両端切断面あり。表面は削り取りにより、凹凸あり。左側縁は真っ直ぐに加工される。右側縁は斜めになっている。		
H-C-		クリ	C	AN		板素材	板目	断面の上下両側、中央を一直線削っている。下部右側縁にも斜めを入れている。下部は斜めに削り取らる。表面下部中央の中央部まで一直削っている。表面右側縁は全体的に深く削り、裏面側も同様である。表面左側縁は平澤面がある。側縁を削り取らせた状態である。		
H-C-		キハダ	C	AN		板素材	板目	表面から右側縁にかけて削り残あり。		
H-C-		クリ	B	AN		板素材	板目	分断材を削り取って垂直にしている。削り取り時の線跡残存する。		
H-C-		クリ	C	AN		板素材	板目	両面を深く削りだしている。裏面右側縁はやや立ち上がる。両面は破壊している。		
H-C-		クリ	C	AN		板素材	板目	表面上部に木の繊維方向と異なる線状痕あり。裏面には削り取り時の線跡残存する。両面下部には削り残あり。		先端炭化 線跡?
H-C-		クリ	B	AN		板素材	板目	二次加工なし。削り取り時の線跡残存する。		
H-C-		クリ	C	AN		板素材	板目	全体に平澤で、丁寧な二次加工あり。断面形はやや平型な方形である。下部は表面を削り先端を尖らせる。		材質追加加工 材の可能性あり、炭化あり
H-C-		クリ	B	AN		板素材	板目	全体に平澤で、二次加工あり。両面は平澤で、両側縁は真っ直ぐに加工される。		
H-C-		ミズキ	C	AN		板素材	板目	二次加工なし。両面に削り取り時の線跡残存する。表面右側から下部にかけて浅い窪みあり。		
H-C-		クリ	C	AN		板素材	板目	二次加工あり、裏面に削り取り痕あり。		
H-C-		クリ	C	AN		板素材	板目	削り取り時の線跡残存する。両側縁は真っ直ぐに加工される。右側縁が深く、左側縁は削り取らぬ形で、下部右側縁は削り取られている。		
H-C-		クリ	A	AN		板素材	板目	遺存状態やや悪い。分断材の木葉部分を削り取って平ら面を作り出す。裏面の二次加工なし。		
H-C-		クリ	C	AN		板素材	板目	上部は断面形が長方形だが、下部につれて、台形状になり、下部付近で再び長方形になる。下部にかけて両面が薄くなる。		
H-C-		クリ	B	AN		板素材	板目	二次加工なし。両面に削り取り時の線跡残存する。		
H-C-		クリ	B	AN		板素材	板目	表面は中央から下部で平澤に加工される。裏面には削り取り時の線跡残存する。右側縁の上部・下部は斜めになっている。		
H-C-		クリ	B	AN		板素材	板目	全体に平澤で、丁寧な二次加工あり。両面に切断痕あり。表面には平澤面を作り出す。裏面は下半部を深く削ってあり、工具痕が見られる。		
H-C-		クリ	C	AN		板素材	板目	両面・右側縁、左側縁の一部に二次加工あり。上部は破壊している。		
H-C-		ウルシ	B	AN		板素材	板目	二次加工あり。上部右側縁、両面に浅く削り取りの痕跡あり。		線跡?
H-C-		クリ	C	AN		板素材	板目	断面三角形で全体に平澤で、二次加工あり。		
H-C-		クリ	A	AN		板素材	板目	表面やや平澤でその他の部分は二次加工なし。削り取り時の線跡残存する。		
H-C-		クリ	A	AN		板素材	板目	削り取り時の線跡残存する。二次加工なし。表面は上部右側縁から下部にかけて大きく削れている。裏面も中央を残し左右が削れている。		
H-C-		クリ	C	AN		板素材	板目	分断材の木葉部分を削り取って厚みを小さくしている。下部は断面形が薄肉に近い。削り取り時の線跡残存する。		
H-C-		カエデ 葉	B	AN		板素材	板目	上部右側縁を削り取るとし、下部は両面を削り、下部に向かって幅広く、薄い刃状をつくる。半割(した後)薄い部分を残して断面厚みがほぼ二割に薄くなる。表面下部には削り痕が多く見られる。種のような形状のものを観察していたが、裏面は断面部分の線跡あり。		
H-C-		コナラ 葉 コナラ	B	AN		素材	分断	遺存状態悪い。削り取り後の加工は裏面下部の不整形な浅い窪みのみである。		全体黒焦
H-C-		クリ	B	AN		素材	分断	両側縁を真っ直ぐに加工される。両面に平ら面を作り出す。下部は両側縁を斜めに削り下部を尖らせる。		先端炭化
H-C-		クリ	C	AN		素材	分断	分断材の木葉部分を削り取り、平ら面を作り出す。全体に二次加工あり。		先端炭化
H-C-		クリ	B	AN		素材	分断	削り取りにより断面方形状にする。炭化あり。下部は表面から右側縁にかけて斜めに削られる。		炭化あり

遺物番号	No	形状	素材	製造の場所・採取地	製造の時期・大塚群	形態・技法	全長(mm)・幅・高さ	備考
H-C-		クリ	C製 AN			磨り取り時の線跡残存。二次加工なし。右側縁は真っ直ぐに加工される。		先端欠化
H-C-		クリ	B製 AN			分製材で、下部を斜めに削る。両面に磨り取り時の線跡残存する。		先端欠化 目玉?
H-C-		クリ	B製 AN			全体に平直で、丁寧な二次加工あり。左側縁が厚く、右側縁が薄く(断面三角形の形状である。右側縁の上よりに削り、右側縁付近で薄くなる。裏面に工具痕残存)。		先端欠化
H-C-		クリ	B製 AN			分製材の末梢部分を斜めに削り、本質は磨り取られている。表面から両側縁にかけて二次加工あり、下部から下部にかけて斜めに削られる。		透経目?
H-C-		クリ	B製 AN			分製材で二次加工の痕なし。上部が破損している。		透径状態類似 欠化あり
H-C-		クリ	B製 AN			全体に平直で、丁寧な二次加工あり。両側縁は真っ直ぐに加工する。裏面は平直。表面・両縁は平直。		
H-C-		アスロ	B製 AN			両縁は欠損している。表面に磨り痕あり。裏面は磨り取られている。		破損
H-C-		アスロ	B製 AN			磨りだして表面に丸味をつける。裏面は磨り取痕あり。二次加工なし。両縁破損?		破損
H-C-		アスロ	B製 AN			磨り取り前に丸く削り出して、両面に磨り取る。		破損
H-C-		クリ	B製 AN			上下両縁縁。断面長方形。二次加工なし。	()	経目
H-C-		クリ	C製 AN			両面平直で、両側縁は磨り取り時の形状で斜めである。上部左側縁破。	()	
H-C- H-Vベルト		クリ	C製 AN			表面には磨り取り時の線跡残存する。裏面に二次加工あり。		
H-C-		ニレ属	C製 AN			磨り取りにより断面がやや平直だが、上部から下部にかけて断面形状で、下部は磨り出して断面長方形である。二次加工全体にあり。		
H-C-		クリ	B製 AN			全体に二次加工あり。上半部は断面三角形だが、下半部は断面長方形である。		
H-C-		クリ	A製 AO			表面上部は磨り取りにより平直で、下部は磨り取り部分あり。下部付近では先を向らす。裏面は磨り取り痕あり。		
H-C-		ミズキ	C製 AN			全体に平直で、丁寧な二次加工あり。表面左側が大きく磨り取られ、断面形状が平直形である。		
H-C-		クリ	C製 AO			全体二次加工あり。上部は丸角を帯びて削られる。		
H-C-		ニレ属	B製 AN			裏面に磨り取り痕あり。両側縁は真っ直ぐに加工される。表面上部に磨り痕あり。		
H-C-		クリ	B製 AN			表面・左側縁に磨り取り痕あり。二次加工なし。		
H-C-		サクラ属	B製 AN			二次加工痕ほとんどなし。表面に磨り痕残る。断面形状に磨り痕とす。		
H-C- 下		ニレ属	C製 AN			上部破損。表面下部右側に工具痕・磨り痕あり。二次加工あり。		
H-C-		クリ	C製 AN			透径状態類似。両側縁ともに縦破あり。両縁破損。		
H-C-		コナラ属 コナラ コナラ コナラ	B製 AN			表面下部に約4mmの高さ、幅5cmで片を作り出す。上部に磨り取りの痕跡が二カ所見られる。下部は破損。		
H-C- H-Vベルト		クリ	C製 AN			磨り材片で、下部は丸角を帯びてカーブしている。二次加工なし。		
H-C-		クリ	B製 AN			両面に磨り取り時の線跡残存。表面の上部は両縁に片割れて磨りが入る。裏面は中央部分付近が平直である。下部にも磨りが入る。		
H-C-		コナラ属 コナラ コナラ	B製 AO			磨り取り痕あり。両面二次加工なし。		
H-C-		クリ	B製 AN			全体に二次加工あり。表面面を平直に削る。		
H-C-		キハダ	B製 AN			二次加工なし。表面に磨りあり。		
H-C-		コナラ属 コナラ コナラ	C製 AN			左側縁に破損?あり。右磨り取り。二次加工なし。		破損?
H-C-		キハダ	B製 AN			全体に平直で、二次加工あり。表面から右側縁にかけて磨り痕あり。磨り取り時の線跡残存する。		
H-C-		オニグルミ	B製 AN			両面に磨り取り時の線跡残存。全体に二次加工あり。		
H-C-		クリ	B製 AO			二次加工あり。上部を斜めに削っている。下部は縦く削られ、断面形状が長方形となる。		
H-C-		ミズキ	B製 不明			磨り取り時の線跡残存する。全体に二次加工あり。表面下部を削る。上部に軸打による痕跡あり。		
H-C-		クリ	B製 AN			分製材で、右側縁に磨り痕がある。表面・左側縁は平直形であるが、加工があったかは不明。		

	造物番号	No	形状	素材	グリッド	造形機 構成	加工の環境 木取り等		形態・技法	全長(mm) 幅 高さ	備考
面	H-C-		クワ	C	AN			3分筋	木裏を削り取っている。芯部分除去。		
面	H-C-		クワ	C	AN			4分筋	削り取り時の継線残存する。二次加工なし。		
面	H-C-		クワ	B	AN			分筋	両端とも切り落とされており、素材内と思われる。表面に削り取り時の継線残存する。		
面	H-C-		クワ	C	AN			分筋	削り取り時の継線残存する。二次加工の痕跡なし。		
面	H-C-		キハガ	B	AN			4分筋	表面に削り痕あり。裏面下部にも削りが見られるがこれ以外の二次加工は見られない。		
面	H-C-		京Vベルト	C	AN			8分筋	表面・右側面に二次加工あり。左側面は破壊。		
面	H-C-		クワ	B	AN			8分筋	削り取り時の継線残存する。二次加工なし。上部右側面に削り？の痕跡あり。		
面	H-C-		クワ	C	AO			分筋	全体に風がしている。削り取り以外の痕跡はあまりみられないが、表面左側面上部に窪みがある。また、表面右側面は若干曲線を描き、削り出した可能性もある。		
面	H-C-		コナラ 板(2つ)	C	AN			分筋	分筋材の削り両面に平切面を作り出す。表面下部と裏面上部に窪みが見られる。	/ /	遺存状態悪い
面	H-C-		クワ	B	AN			6分筋	削打により中央付近で変形している。全体に二次加工あり。表面中央に長方形の窪みが見られる。右側面には工具による削りの痕跡が多く見られる。		
面	H-C-		クワ	C	AN			分筋	二次加工なし。両面に削り取り時の継線残存する。表面右側面ごく浅い窪みあり。破壊？		
面	H-C-		クワ	B	AN			分筋	二次加工あり。表面に削り取り時の継線残存する。下部はやや薄く削られる。中央付近にごく浅い窪みあり。裏面平直。		
面	H-C-		クワ	B	AN			分筋	二次加工あり。両端丸味を帯び削り出す。	()	
面	H-C-		キハガ	B	AN			4分筋	二次加工なし。表面に削り取り時の継線残存する。上部は切斷面あり。下部は側面は斜めに削り入る。		
面	H-C-		クワ	B	AN			分筋	上部に切斷面あり。下部は平直。表面に工具痕あり。裏面・左側面高く削って加工される。二次加工なし。		破産行き
面	H-C-		キハガ	C	AN			8分筋	削り取り後。表面に二次加工あり。両端は破壊している。		
面	H-C-		クワ	C	AN			分筋	断面形状がL字型である。両端削り痕あり。両端とも中央が平直になる。側面は斜めが抜く。	()	
面	H-		打でズ 三層	B	AN			4分筋	削り取り後の二次加工なし。	/ /	破産行き
面	H-C-		クワ	C	AN			3分筋(裏面)	丸木の外側を削りつけた新材内。裏面に削り取り時の継線残存する。	/ /	破産行き
面	H-C-		クワ	C	AN			半筋材	表面は平直で、左側面は高く削って加工されるが、右側から裏にかけて大きく削り取る。左側面下部は下部に向かって斜めに削られ、中央付近で削りの痕跡が多く見られる。		
面	H-C-		クワ	C	AO			芯持半筋	表面は分筋部分を残し、左右両側を削り取る。裏面は芯部分はややく残存する。		
面	H-C-		クワ	B	AN			半筋(した後)	木表・指線方向を一箇所削り削ぎ、面を作り出す。左側面は欠けている。		
面	H-C-		クワ	B	AN			半筋材	半筋材。表面の端の部分に平直にして、表面左側面。裏面右側面も同じように削っている。裏面は芯部分を除去しているが、下部は残存している。下部は削り部の端が部分から斜めに削られ、先を尖らす。上部の尖りは下部ほど大きくない。		
面	H-C-		クワ	C	AN			半筋材	両面にツブレあり。表面に削り時の継線残存。		
面	H-C-		二し儀	C	AN			半筋材	半筋材。木表を削り削ぎしている。裏面では一部芯部分除去している。このほか削りの工程はみられるが、詳細は分からない。		
面	H-C-		クワ	C	AN			両端切斷材	下部は指線・斜めに削りか入り芯部分残存する。・上部は切斷材の痕跡あり。右側面二次加工なし。側面裏面にあり？		破産
面	H-C-		クワ	A	AN			4分筋	4分筋した材の左側面を高く削って加工する。表面は調整あり。両端は削り痕はいる。裏面は二次加工なし。		
面	H-C-		クワ	B	AN			両端切斷材	丸木の裏面を削り取る。両端は芯を残して斜めに切斷する。		
面	H-C-		二し儀	B	AN			両端切斷材	下部に切斷面全面あり。表面上部には大きく削り取られた痕跡あり。表面の側面には削り痕あり。		
面	H-C-			C	AN			両端切斷材	芯に近い部分が残存する。表面は平直に削り取る。		破産行き
面	H-C-		クワ	A	AN			両端切斷材	両面に削り取り時の継線残存する。全体に二次加工あり。表面上部に破壊？右側面には工具痕あり。両端は平直に切斷されている。		
面	H-C-		アスノ 口	B	AN			両端切斷材	断面形を工具材に削り出し。下部の先端を削り尖らせている。側面は垂直に削っている。上部は削りによる切斷と思われる。		両面文化
面	H-C-		カゴ 裏	C	AN			芯持丸木	芯部分を削り取る。全体に二次加工があり、側面はほぼ同じで削り加工される。木のうち下部の丸木を持った部分は内部が丸木状になっている。		木のうろ部分を使用
面	H-C-		クワ	C	AN			芯持半筋	変形した丸木半筋材の内部芯部分を取り取り、内側から外側に向かって緩やかに立ち上げる形状である。両端には削りを入れて丸味を帯びた形にしている。		

遺物番号	No	形状	部位	グリップ	遺物構成	製造の時期		形態・技法	全長(mm)	備考
H-C-	-	ウケウ	C	AN		用途不明加工材(管状)	芯丸丸木	木の芯部の木質部を削り取り加工している。上部は破損。内部は丸木を穿けて削られている。		
H-C-	-	クリ	C	AN		用途不明加工材(棒状)	棒目	全体に器蓋が穿通で、両面に二次加工あり。表面左側は金棒にカブって立ち上がり、器蓋が刺し。		
H-C-	-	クリ	B	AN		用途不明加工材(棒状)	半割細目	平製材の芯部分を削り出し、表面に幅約 5mmの平器蓋を付し出す。上部に押合する芯丸丸木を刺した器蓋が刺しあり。表面は細目状に削り取りあり。		内面炭化
H-C-	-	ウケウ	C	AN		用途不明加工材(棒状)	3分筋(裏面)	裏面は大きく削り取りされる。表面は平器蓋に削り取りされるが、削り取りあり。下部は表面は丸木を穿けて加工。両側面は丸木に加工される。		
H-C-	-	ウルフ	C	AN		加工材	芯持丸木	裏面は両側に線を持つように加工している。左側面は丸木に加工する。表面は右側面を丸木に削り出す。		
H-C-	-	コナヲ	C	AN		加工材	芯持丸木	丸木の外側を削り取りし、断面は円形にする。削り落とされた断面は器蓋平器である。		
H-C-	-	コナヲ	C	AN		丸木材	芯持丸木	丸木の分枝部分を切断。右側面下部から下部にかけて大きく削り取り。上部は破損している。		
H-C-	-	オニグル	B	AN		丸木材	芯持丸木	丸木を両側面を丸木に加工し、両面にも削り取り。両面は破損している。		
H-C-	-	クリ	C	AN		丸木材	芯持丸木	丸木の表面下部を両側面を削る。表面上部から器蓋にかけて削り取りあり。		
H-C-	-	クリ	B	AO		丸木材	芯持丸木	全体に削り取り。下部は器蓋の痕跡。芯部分が器蓋。		
H-C-	-	クリ	B	AO		丸木材	芯持丸木	丸木を器蓋を作り出すように全体的に丸木に削り取り。表面は丸木に仕上げている。下部は器蓋の痕跡が大きく削り取り。下部は丸木。上部は丸木に削り取り。芯丸木。切り取りした器蓋と思われる。		
H-C-	-	イヌエ	C	AN		丸木材	芯持丸木	上部に切断痕あり。下部は平器。器蓋に切断痕あり。		
H-C-	-	キハダ	C	AN		丸木材	芯持丸木	外側の削り取りはほとんどなく、下部の一方に大きく削り取り。工具による削りの可能性もある。		
-	-	オニグル	B	AN		器蓋のある丸木		クルミ器蓋は打撃により破損し、器蓋縁に沿って二分割されている。この器蓋を割ったものと考えられ、器蓋縁が残る。		
H-C-	-	ヒョウタン	B	AN		ヒョウタン		ヒョウタンの下部に近い部分。		
H-C-	-	マタタ	B	AN		ツル植物を削り出した器蓋		ウルフの様にツル植物を削り取りしている。器蓋を削り取ったツルと器蓋の間に器蓋に削り取ったツルを固定している。		全体を削削
土器サンプル		ツル植物	不明	不明		ツル植物を削り出した器蓋		器蓋か? おそらく器蓋の器蓋片と思われる。二葉一組のツルを器蓋に、一葉のツルを器蓋に削削。		
H-Vベル			C	AN		器蓋管	幅広、両端管、折疊み	割削法による割削取りか。器蓋は破損している。	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			B	AN		器蓋管	幅広	割削法による割削取りか。器蓋は破損している。	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			不明	不明		器蓋管	厚手管	器蓋取り法?	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			B	AN		器蓋管	普通管	割削法による割削取りか。	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			B	AN		器蓋管	普通管	割削法による割削取りか。	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			B	AN		器蓋管	普通管	割削法による割削取りか。	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			B	AN		器蓋管	普通管	割削法による割削取りか。	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			B	AN		器蓋管	太管	割削法による割削取りか。表面にコブあり。	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			B	AN		器蓋管	普通管	割削法による割削取りか。表面にコブあり。	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			A	AN		器蓋管	普通管	割削法による割削取りか。	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			A	AN		器蓋管	普通管	割削法による割削取りか。	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			B	AN		器蓋管	折疊み	割削法による割削取りか。破損した器蓋片多数あり。	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			B	AN		器蓋管	折疊み	割削法による割削取りか。破損した器蓋片多数あり。	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			B	AN		器蓋管	角戸形	割削法による割削取りか。破損した器蓋片多数あり。	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			B	AN		器蓋管	両端管	割削法による割削取りか。破損した器蓋片多数あり。	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			A	AO		器蓋管	普通管	割削法による割削取りか。破損した器蓋片多数あり。	最大幅 器蓋片	鑑定品
H-C-			B	AN		器蓋管	両端管	割削法による割削取りか。破損した器蓋片多数あり。	最大幅 器蓋片	鑑定品

土器観察表 1

図録番号	出土地点	出土層位	部位	口唇・口縁	胴部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備考
-	AM P	A・B	口一胴	口唇上部に貝殻線跡を斜めにして施文	貝殻線跡を直角に施文。沈線	-	-	-		
-	AL		口縁	口縁部断面三角形。縦方向に貝殻線跡を斜めに施文。	縦方向に貝殻線跡を斜めに施文	-	-	-		
-	AN - P	C	底部分近	-	貝殻線跡を斜めに施文	-	-	-		
-	AP	B3	底部分近	-	貝殻線跡を直角に施文	-	-	-		
-	AN -	A	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文	-	-	-		他の土器との種類違う
-	AR	B4	胴部	-	赤褐色 貝殻線跡を斜めに施文	-	-	-		
-	AN - P	A	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		内面に赤褐色あり
-	AN -	A1	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文	-	-	-		内面に赤褐色あり
-	AO -	A1	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文	-	-	-		
-	AN -	A1	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文	-	-	-		
-	AN -	B4	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文	-	-	-		
-	AN - P	A	胴部	-	貝殻線跡を直角に施文	-	-	-		
-	AN - P	A	胴部	-	貝殻線跡を直角に施文	-	-	-		
-	AN -	A1	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文	-	-	-		
-	AK		胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文	-	-	-		
-	AN - P	A	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
-	AM -	A1	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
-	AN -	A1	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
-	AO - P	A	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
-	AO - P	A1	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文	-	-	-		
-	AN - P	A	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
-	AN P	A	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
-	AK		胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
-	AR		胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
-	AM P	A	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-		
-	AM P	B	胴部	-	貝殻線跡を斜めに施文	-	-	-		
-	AN - P	A	胴部	-	赤褐色 貝殻線跡を斜めに施文	-	-	-		
-	AM P	A	胴部	-	赤褐色 沈線	-	-	-		
-	AO -	B	胴部	-	赤褐色 沈線	-	-	-		
-	AN -	B5	胴部	-	赤褐色 沈線	-	-	-		
-	AN - P	A	胴部	-	赤褐色 沈線	-	-	-		
-	AN P	A	胴部	-	赤褐色 沈線	-	-	-		
-	AO - P	C	口一胴下	結核 R 胴部, RL R 胴部	RL R 胴部	()	-	-	2	
-	AN P - AN P - AN - 沢ベノト, AN - , AO -	C	完形	二流状。口唇RL R 胴部。結核 R 胴部。隆帯 RL R 胴部	直筒段反折RL R 胴部					3
-	AN - P	C	口一胴下	四流状?。単 1(R) 胴部	RL R 胴部	()	-	-		3
-	AN - P	C	完形	R 胴部	RL R 胴部					3
-	AO - P	C	口一胴下	喉 R 胴部。隆帯。斜突文	RL R 胴部	()	()	-	3	
-	AN P	C	完形	四流状。単 1(R) 胴部 RL 胴部	単 1(R) 胴部					3
-	AO -	C	口一胴上	四流状。単 1(R) 胴部 RL R 胴部。隆帯 RL R 胴部	単 1(R) 胴部	()	()	-	3	口唇上平坦
-	AO - P , AO - P , AO -	C	完形	委託。RL 胴部。喉 R 胴部。隆帯 喉 R 胴部	喉 R 胴部	()	()		3	種別あり
-	AO - P	C	完形	単 1(R) 胴部 RL 胴部	単 1(R) 胴部	()	()		3	口唇上部平坦
-	AO - P	C	完形	二流状。単 5(R) 胴部。LR 胴部。隆帯 LR 胴部	単 5(R) 胴部					3
-	AN P	C	口一胴上	単 5(R) 胴部	単 5(R) 胴部	()	()	-	3	
-	AO - P	C	口一胴下	単 5(R) 胴部 RL R 胴部。隆帯 RL R 胴部	RL R 胴部・隆帯	()	()	-	3	
-	AN - 沢ベノト	C	口一胴下	四流状。単 6(Ac R)・単 4?。隆帯 RL R 胴部	RL R 胴部	()	-	-	3	
-	AO -	C	口一胴上	流状。単 6(Ac R) 胴部 RL R 胴部。隆帯 RL R 胴部	RL R 胴部	()	()	-	3	
-	AN - P	C	口一胴上	流状。口唇上RL R 胴部。単 6(Ac R) 胴部 RL R 胴部。隆帯 RL R 胴部	単 1(R) 胴部	()	()	-	3	
-	AO - P	C	完形	流状。単 6(Ac R) 胴部。隆帯。斜突	単 1(LR) 胴部					3

土器観察表 2

図録番号	出土地点	出土層位	部位	口 唇 ・ 口 縁	胴 部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備 考
-	AN - P	C	突起形	単 6A/R 頸部 RL側圧、隆等 RL側圧	FL斜面				3	補修孔あり
-	AO - P	C	突起形	一部波状、単 6A/L 頸部 RL側圧、隆等 RL側圧	単 1(L) 腹面	() ()			3	
-	AO - P	C	突起形	波状、単 6A/L 頸部、隆等 単 1(L) 頸部から単 6A/L 頸部	単 1(R) 腹面	() ()			3	
-	AN - P	C	口一線上	四波状、口縁単 6A/R 頸部、単 6A/R 頸部、隆等 単 1(R) 頸部	単 1(R) 腹面	() ()			3	口縁片み
-	AO - P	C	口一線下	結 1(LR-LR) 頸部 LR側圧、隆等 LR側圧	FL斜面	() ()			- 3	口縁上平坦
-	A - P	C	口一線上	-	結 1?	() ()			- 3	
-	AO - P	C	突起形	結 1(L) 頸部、単 6A/R 頸部 RL側圧	単 1(R) 腹面	() ()			3	隆等?の削がれた痕跡あり
-	AO - P、AO - AN	C	突起形	隆等 RL側圧	単 1(R) 腹面	- () ()			3	底 単 1(R) 頸部欠文あり
-	AO - P	C	口一線上	単 1(R) 頸部 LR側圧	単 1(R) 腹面	() ()			- 3	
-	AO - P、AN	C	口一線	単 1(R) 頸部、RL側圧-LR側圧	単 1(LR) 腹面	- () ()			- 3	
-	AO - P ()?	B3	突起形	委託、結 1(LR-RL)-LR側圧	単 1(L)-(R)				4	補修孔あり
-	AO - P、B3-5、C	口一線下	突起形	結 1(L) 頸部、単 1(R) 頸部	FL斜面、結 1(LR-LR) 頸部				- 4	方形蓋調
-	AO - P	C	突起形	結 1(L) 頸部、単 1(R) 頸部	FL斜面 結 1(RL-LR) 頸部	() () ()			4	胴部上中央に最大径、上付近、口縁外反
-	AO - P	C	突起形	結 1(L) 頸部、単 1(R) 頸部	FL斜面 結 1(LR-LR) 頸部				4	
-	AN - P	C	突起形	単 1(R) 頸部	FL斜面	() () ()			4	口縁外反
-	AN - P	C	口一線下	結 1(L) 頸部、単 1(R) 頸部	結 1(LR-RL) 頸部、FL斜面	() () ()			- 4	
-	AO - P	C	口一線上	波状、単 1(R) 頸部	LR側圧?	() () ()			- 4	厚肌薄しい
-	AO - P	C	突起形	単 1(R) 頸部、隆等 単 1(R) 頸部	FL斜面 結 1(RL-LR) 頸部	() () ()			5	胴部中央に最大径、口縁外反
-	AN - P	C	口一線	RL側圧、単 6A/R 頸部?、隆等 RL側圧	FL斜面	- - -			- 3	
-	AN - P	C	口縁	FL斜面	-	- - -			- 6	
-	AO - P	C	口縁	RL側圧、単 1(R) 頸部	-	- - -			- 5	
-	AO - P	C	口縁	RL側圧、単 1(R) 頸部	-	- - -			- 5	
-	AN - P	C	口縁	単 6A/R 頸部	-	- - -			- 3	
-	AN - P	C	口縁	結 1(L) 頸部	-	- - -			- 3	
-	AO - P	C	胴一底	-	FL斜面	- - -			7	底 FL側面欠文あり
-	AO - P	C	胴一底	-	単 1(R) 斜面	- - -			7	底 FL側面欠文あり
-	AN - P	C	胴一底	-	FL斜面	- - ()			7	底 FL側面欠文あり
-	AO - P	C	底面	-	-	- - ()			7	底 FL側面欠文あり
-	AO - P	C	底面	-	-	- - -			7	底 FL側面欠文あり
-	AO P N SW P	C	胴一底	-	FL斜面	- - -			7	底 FL側面欠文あり
-	AN - P	C	底面	-	FL側面	- - ()			7	底 FL側面欠文あり
-	AO - P	C	胴一底	-	FL側面反側?	- ()			7	底 蓋前段反側?
-	AO - P	C	底面	-	-	- - -			7	底 FL側面欠文あり
-	AO - P	C	胴一底	-	蓋前段反側?	- - ()			7	底 蓋前段反側?
-	AO - P	C	底面	-	-	- - ()			7	底 FL側面欠文?
-	AO - P	C	口縁	単 6A(R)-結 1(R) 隆等 結 1(R)	-	- - -			- 2	
-	AN - P	C	突起形	単 1(R) 頸部・腹面	単 1(R) 頸部・腹面	() () ()			9	小型土器
-	AN - P	C	突起形	単 1(R) 頸部	FL側面	() () ()			9	小型土器
-	AN - P	C	口一線上	FL斜面	FL斜面	() () ()			9	小型土器
-	AN - P	C	突起形	単 1(R) 頸部・腹面	単 1(R) 頸部・腹面	- - -			9	器種 鉢
-	AN - P	C	口一線下	結 1(L) 頸部	FL側面	() () ()			9	小型土器
-	AO - P	C	突起形	結 1(L) 頸部	FL側面?	() () ()			9	小型土器
-	AN - P	C	突起形	-	-	() () ()			9	小型土器
-	AO - P	B5	突起形	波状、口縁結 1(R) 隆等 結 1(R)	FL側面				3	
-	AO - P、AO - P	B5-C	突起形	二波状、単 1(R) 頸部 RL側圧	FL斜面	() ()			3	口縁外反
-	AN - P、AN - P	B4-5	突起形	結 1(L) 頸部	単 1(L) 腹面	() () ()			- 3	口縁片み
-	AN - P	B	口一線上	結 1(LR) 頸部、隆等 FL側圧 RL側圧	FL斜面	() () ()			- 3	
-	AN - P	B	口一線上	FL側圧 RL側圧、隆等 RL側圧	単 1(R) 腹面	() () ()			- 3	
-	AN - P、AN - P	B-C	突起形	波状、口縁単 1(R) 頸部、単 1(R) 頸部・腹面	単 1(R) 腹面	() () ()			3	
-	AO - P	B4	口一線上	単 1(L) 頸部 RL側圧、隆等 RL側圧	FL斜面	() () ()			- 3	補修孔あり
-	AN - P、AN - P	B-C	口一線上	波状、隆等 単 1(L) 頸部 RL側圧	FL斜面(多角)	() () ()			- 3	
-	AN - P	B3	突起形	単 1(R) 頸部 RL側圧	単 1(R) 腹面	() () ()			3	

土器観察表 3

図録番号	出土地点	出土層位	部位	口部・口縁	胴部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備考
-	AM P	B	口一翼下	単1(R)翼周 LR側圧。隆等 単1(R)翼周 LR側圧	単1(R)翼周	()	()	-	3	
-	AN P AN P AN P AN P	B-C	口一翼下	四波状。単1(R)翼周。単1(L)・結節 隆等。隆等 単1(R)翼周	単1(L)翼周	()	()	-	3	
-	AN P	B-C	口一翼下	四波状。口唇単1(R)翼周。隆等。単1(R)翼周。RL側圧	単1(R)翼周	()	()	-	3	
-	AO P AN P AN P	B4-C	口一翼下	口唇上単1(R)翼周。単1(R)翼周 RL側圧。隆等 RL側圧	単1(R)翼周	()	()	-	3	口唇・胴部の結節体は真なる
-	AN P	B	宛形	波状。単4(R)翼周。隆等。単4(R)翼周	単1(L)翼周	()	()	-	3	
-	AN P	B-C	口一翼上	波状。単6(A)R翼周。RLR側圧。隆等 RLR側圧。RLR側圧。沈線	RLR側周 RL側周	()	()	-	3	
-	AO P AN P	B4	口一翼上	四波状。単1(R)翼周 (単5(R)翼周 RLR側圧)	単1(R)翼周	()	()	-	3	方唇基調。補帯あり
-	AN P	B	口一翼上	波状。口唇上単1(R)翼周。単6(A)R翼周 RLR側圧。隆等 RLR側圧	単1(R)翼周	()	()	-	3	外蓋装化物付着
-	AO P	B5・C	口一翼下	単6(A)R翼周 RLR側圧。隆等 RLR側周	RLR側周	()	()	-	3	
-	AN P	B	口一翼上	波状。単6(R)翼周 RLR側圧。隆等 RLR側圧	単1(R)翼周 盤周	()	()	-	3	外蓋装化物付着
-	AN P	B	口一翼上	波状。RL側周 RL側圧。隆等 RL側圧。沈線	RL側周	()	()	-	3	
-	AN P	B	口一翼下	RLR側周 浅い沈線	RLR側周	()	()	-	6	
-	AN P	B	(X付添) 翼上	RLR側圧 沈線	RLR側周	()	()	-	6	
-	AN P	B5	胴	LR側圧	RLR側周	()	()	-	6	
-	AN P	B4	口一翼下	単1(R)翼周 LR側圧	直前段反照RL側周	()	()	-	3	口縁丸み
-	AN P	B4	口一翼下	単1(R)翼周。LR側圧	直前段反照RL側周	()	()	-	3	磨耗強い
-	AN P	B4	口一翼下	縷々波状。単1(R)翼周 LR側圧	直前段反照RL側周	()	()	-	3	口縁丸み
-	AN P	B4	口一翼上	縷々波状。LR側圧	RLR側周・胴部	()	()	-	4	
-	AN P	B5	口一翼下	単1(R)翼周	RLR側周。結1(LR・RL)	()	()	-	4	
-	AN P	B5	口一翼下	単1(R)翼周	RLR側周	()	()	-	4	口縁外反
-	AO P	B3	宛形	縷々四波状。単1(R)翼周	RL側周 結1(LR・RL)翼周	()	()	4	口縁外反。直前下四方所に隆帯形彫の穿孔。やや方形基調	
-	AO P	B3	宛形	縷々四波状。単1(R)翼周	結1(LR・RL)翼周。RL側周	()	()	4	補帯あり	
-	AO P	B3	略宛形	縷々波状。単1(R)翼周	RL側周	()	()	4	口縁外反。方形基調か	
-	AO P	B4	口一翼下	縷々波状。単1(R)翼周	RLR側周	()	()	4	口縁外反	
-	AO P	B3	宛形	単1(R)翼周	RL側周 結1(LR・RL)翼周	()	()	4	口縁外反	
-	AO P	B4	宛形	縷々四波状。口唇RL側。単1(R)翼周	結1(LR・RL)翼周	()	()	4	方唇基調	
-	AN P	B4	口一翼上	縷々波状。単1(R)翼周。RLR側圧	RLR側周	()	()	4		
-	AO P	B3	口一翼下	縷々波状。口唇LR側。単1(R)翼周	RL側周。結1(LR・RL)翼周	()	()	4	口縁外反	
-	AN P	B4・5	口一翼下	縷々四波状。単1(R)翼周。口唇RL側周。微隆等 単1(R)翼周	直前段反照RL側周	()	()	4		
-	AN P	B4	宛形	単1(R)翼周	結1(LR・RL)翼周。RL側周	()	()	4		
-	AO P	B3	宛形	単1(R)翼周	RL側周 結1(LR・RL)翼周。RLR側周	()	()	4	口縁外反結束・直前段。口唇中心は一致しない	
-	AN P	B4	略宛形	単1(R)翼周	RL側周	()	()	4		
-	AO P	B3	宛形	縷々波状。LR側圧	結1(LR・RL)翼周	()	()	4		
-	AN P AN P AN P	B3	宛形	縷々波状。口唇LR側。単1(L)翼周	結1(LR・RL)翼周RL側周。単1(L)翼周	()	()	4	方唇基調。胴部縁封	
-	AO P	B3	略宛形	縷々波状。LR側圧	RL側周	()	()	4		
-	AO P AO P	B3・4	口一翼上	縷々波状。単1(R)翼周	RL側周。結1(LR・RL)翼周	()	()	4		
-	AN P	B4	口一翼上	波状。口唇上LR側。LR側圧	結1(LR・RL)翼周。RLR側周	()	()	4		
-	AN P	B4	口一翼上	縷々波状。単1(R)翼周	結1(LR・RL)翼周。RL側周。RL側周	()	()	4		
-	AO P	B3	口一翼上	波状。LR側圧	RLR側周	()	()	4		
-	AO P	B3	宛形	縷々四波状。単1(R)翼周	RLR側周 結1(LR・RL)翼周	()	()	4	方唇基調	
-	AO P	B5	口一翼上	波状。単1(R)翼周	直前段反照RL側周	()	()	4	直線基調	
-	AN P	B3	口一翼下	単1(R)翼周	結1(LR・RL)翼周	()	()	4	口縁やや外反	
-	AO P	B3	宛形	縷々四波状。口唇RL側。LR側圧	RLR側周 結1(LR・RL)翼周	()	()	4	口縁外反	
-	AN P	B3	略宛形	単1(R)翼周	結1(LR・RL)翼周。RL側周	()	()	4	胴部中央に最大径全体に表出	
-	AN P	B4・5	口一翼下	縷々四波状。単1(R)翼周	RLR側周 結1(LR・RL)翼周	()	()	4		
-	AN P	B4	宛形	縷々波状。結1(LR・RL)翼周 LR側圧	RLR側周	()	()	4	断面丸い	

土器観察表 4

図版番号	出土地点	出土層位	部位	口 唇 ・ 口 縁	胴 部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備 考
-	AO - P	B3	宛形	L形側注	FLR斜胴				4	口縁外反
-	AN -	A1・ B・B	口一胴上	縷い波状。結1(LR・RL・L)胴部 LR側注	FLR斜胴	() ()	-		4	
-	AN -	B4	口一胴上	波状。口唇LR側。結1(LR・RL・L)胴部 LR側注	FLR斜胴	() ()	-		4	
-	AO - P	B3	宛形	縷い波状。RL側注?。結1(FL・LR・L)胴部 LR側注	FLR斜胴	() ()	()		4	
-	AN - P	B4	宛形	縷い波状。単結側注?	結1(LR・RL)胴部				4	胴部中央最大径
-	AO - P	B1	宛形	縷い波状。L形側注	LR側注。FLR斜胴				4	
-	AO - P	B3	宛形	結1(LR・RL)胴部	FLR斜胴。前々段多形FLR斜胴	() ()	()	()	4	口縁外反・結果の方向が変わるのが4力所。4→5cm単位で縷い波状になり、全体で8波状くらい?一部欠けているため。不明
-	AO - P	B4	宛形	四波状。結1(LR・RL)胴部	FLR側注。結1(LR・LR)胴部	() ()	()	()	4	胴部中央に最大径。方形蓋胴
-	AN -	B4	口一胴上	波状。結1(LR・RL)胴部	FLR斜胴	() ()	-		4	
-	AN - P	B4	宛形	結1(LR・RL)胴部	FLR斜胴	() ()	()		4	
-	AN - P P・AN P	B4・5	宛形	単結側注。隆帯単結側注	多波LR側注	()			5	
-	AO - P	B4	宛形	単1(R)側注	FLR側注。結1(LR・RL)胴部	() ()	()		5	方形蓋胴。胴部に三角形成る
-	AN - P	B5・C	口一胴下	単1(R)側注。隆帯等。単1(R)側注	結1(LR・RL)胴部。FLR斜胴	() ()	-		5	口縁外反
-	AN - P	B5	口一胴下	縷い波状。隆帯等。単1(R)側注	結1(LR・RL)胴部。FLR斜胴。単1(R)側注?	() ()	-		5	口唇やや外側に開く。口縁、口縁自反?
-	AN - P	B5	宛形	口唇LR側。R側注	結1(LR・RL)胴部。FLR斜胴	() ()	()		5	
-	AN - P	B3	宛形	縷い四波状。単1(R)側注	結1(LR・RL)胴部。FLR斜胴	() ()	()		5	胴部中央付近の結果を境に腹文を反入している。
-	AO - P	B4	口一胴下	縷い波状。口唇LR側注。L形側注	FLR斜胴	() ()	-		5	
-	AO - ,AO -	B・C	口一胴上	単1(R)側注	直前段反照FLR斜胴。結1(LR・RL)胴部	() ()	-		5	口縁自反
-	AN - P	B4	口一胴上	縷い波状。口唇LR側注。単1(R)側注	結1(LR・RL)胴部。FLR斜胴	() ()	-		5	
-	AN -	B5	口一胴上	単1(R)側注	結1(LR・RL)胴部。FLR斜胴	() ()	-		5	
-	AN - P	B5	口一胴上	縷い波状。単1(R)側注	結1(LR・RL)胴部。直前段反照FLR側注	() ()	-		5	
-	AN - P	B	宛形	単1(R)側注	単1(L)側注				5	
-	AO - ,AO -	B	宛形	R・L側注。R側注	単1(R)側注	() ()	()		5	
-	AN - P	B4	口一胴下	R側注	FLR斜胴。結1(LR・RL)胴部	() ()	-		5	
-	AN - P	B4	宛形	L形側注	結1(LR・RL)胴部。FLR斜胴				5	
-	AN - P	C	口一胴上	L形側注。隆帯 LR側注	結1(LR・RL)胴部。FLR斜胴	()	-		5	口唇三角形
-	AO - P	B・C	宛形	直前段反照?	直前段反照?				6	底 直前段反照?
-	AO - P	B3	口一胴上	縷い波状。単1(R)側注	R側注。単1(R)側注	()	-		5	
-	AN -	A1・ B4・5	口一胴	L形側注	結1(LR・RL)胴部。FLR斜胴	-	()	-	6	
-	AN - P	B4	口一胴上	単1(R)側注?	結1(LR・RL)胴部	() ()	-		6	
-	AO - P	B3	口一胴上	縷い波状。R側注 胴部の屈曲点に側注	直前段反照FLR斜胴	() ()	-		5	
-	AN - P P・AN P	B4	宛形	波状。L側注	単1(L)側注	()			5	胴部下半で屈曲
-	AO -	B3	宛形	FL側注	FLR斜胴	() ()	()		5	断面三角
-	AN - P	B3	口縁	単6A(R)側注・隆帯 R形側注	-	-	-		3	
-	AN - P	B1	口一胴	単5(R)側注・単1(R)・隆帯 R形側注?	FLR斜胴?	-	-		3	
-	AN - P	B5	口縁	単5(R)側注・RLR側注	-	-	-		3	
-	AO - P	B3	口一胴	単5(R)側注	FLR斜胴?	-	-		3	
-	AN - P	B5	口縁	単6A側注	FLR斜胴	-	-		3	
-	AN - P	B3	口一胴	単6A側注	FLR斜胴	-	-		3	
-	AO - P	B5	口一胴	単6A側注	FLR斜胴	-	-		3	
-	AO - P	B3	口一胴	隆帯RLR側注?	FLR斜胴	-	-		3	
-	AO - P	B1	胴	-	FLR斜胴?	-	-		7	
-	AN - P	B1	口一胴	単6A(R)側注 隆帯 R形側注?	FLR斜胴	-	-		3	
-	AN - P	B3	口一胴	単6A(R)側注 隆帯 R形側注?	FLR斜胴	-	-		3	
-	AN - P	B3	口縁	単1(L)側注	-	-	-		3	
-	AO - P	B2	口一胴	FLR側注・LR側注	FLR斜胴	-	-		4	

土器観察表 5

図録番号	出土地点	出土層位	部位	口 唇 ・ 口 縁	胴 部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備 考
-	AO - P	B1	口一翼	結1(LR・RL) 踵部・ 単1側圧	FLR斜部?	-	-	-	4	
-	AO - P	B1	口一翼	LR側圧	結1(LR・RL) 踵部・ FLR斜部	-	-	-	4	
-	AN - P	B3	口一翼	単1(R) 側圧	FLR斜部	-	-	-	4	
-	AO - P	B1	口一翼	単1側圧?	結1(LR・RL) 踵部	-	-	-	4	
-	AO - P	B1	口一翼	単1側圧?	結1(LR・RL) 踵部・ FLR斜部	-	-	-	4	
-	AO - P	B1	口一翼	FLR側圧	結1(LR・RL) 踵部・ FLR斜部	-	-	-	4	
-	AO - P	B3	胴一底	-	?	-	()	-	7	
-	AN P	B	宛形	単1(R) 踵部	単1(R) 踵部	-	-	-	9	小型土器
-	AO - P	B6	宛形	単1(R) 踵部	単1(R) 踵部	-	-	-	9	小型土器
-	AO - P	B1	口一翼	LR側圧	結1(LR・RL) 踵部・ FLR斜部	-	-	-	4	
-	AO P	B	宛形	LR側圧	FLR斜部	-	-	-	9	小型土器
-	AN - P	B4	口一翼	FLR側圧	単1(L) 踵部	-	-	-	9	小型土器
-	AO - , AO - P	A2・ B6	口一翼下	結線 LR 踵部、 隆等 浅い内形のくびみ	直前段反折PR斜部・ 踵部	()	()	-	3	
-	AM P	A	口一翼	単1(R) 踵部 LR側圧	FLR斜部	()	()	-	3	
-	AO - P	A1	口一翼	波状、 単6A(R) 踵部 LR側圧	単1(L) 踵部	()	()	-	3	
-	AP - P	A2・1	口一翼下	波状、 単5(R) 踵部 LR側圧、 隆等 LR側圧 FL側圧	単1(R) 踵部	()	()	-	3	
-	AN - P , AO - P , AP -	A2 , B4 , C	口一翼上	凹波状? 単1(R) 踵部 単5(R) 踵部 波状、 隆等 単1(R) 踵部 波状	単1(R) 踵部	()	()	-	3	口縁平直
-	AN P	A・ B	口一翼上	波状、 単5(R) 踵部 FLR側圧、 隆等 FLR側圧	FLR斜部	()	()	-	3	口縁凹凸
-	AN P	A・ B	口一翼上	単6A(R) 踵部 FLR側圧	単1(LR) 踵部	()	()	-	3	
-	AN - P	A2	宛形	縄目波状、 R側圧	FLR斜部	()	()	-	3	断面三角形
-	AM P , AN P , AP -	A・ B	口一翼	隆等 FLR側圧	FLR斜部	-	-	-	3	
-	AP - P , AO -	B3・ A1	口一翼下	単1(R) 側圧	FLR斜部、 直前段反折PR斜部? 斜部、 結1(LR・RL) 踵部	()	()	-	4	口縁外反・ 口縁曲背
-	AN B・	A・ B	口一翼上	縄目波状、 単1(R) 踵部 LR側圧	単1(L) 踵部	()	()	-	3	
-	AN - P	A2	宛形	FLR側圧?	FLR斜部	()	()	-	3	
-	AO - P	A2	口一翼上	単1(R) 側圧	結1(LR・RL)	()	()	-	5	
-	AO - P	A	口一翼下	単1(R) 側圧	FLR斜部、 結1(LR・RL)	-	()	-	4	口縁外反
-	AN - P , AP -	A	口一翼下	単1(R) 側圧	FLR斜部	()	()	-	4	口縁外反
-	AN P	A	宛形	縄目波状、 LR側圧	直前段反折PR斜部	-	-	-	4	
-	AP - P	A1	口一翼下	波状、 LR側圧	直前段反折PR斜部	()	-	-	4	
-	AO - P	A2	口一翼上	縄目波状、 単1(R) 側圧	FLR斜部、 結1(LR・RL) 踵部	()	()	-	4	
-	AN - P , AO -	A1・ B6	宛形	単1(R) 側圧、 口唇LR側部	結1(LR・RL) 踵部、 FLR斜部	()	()	-	4	
-	AO - P	A2	口一翼上	縄目波状、 単1(R) 側圧	FLR斜部、 結1(LR・RL) 踵部	()	()	-	4	
-	AO - P	A	口一翼上	縄目波状、 単1(R) 側圧	FLR斜部、 結1(LR・RL) 踵部	()	()	-	4	方形基調
-	AO P , AP -	A2	口一翼上	縄目波状、 単1(R) 側圧	結1(LR・RL) 踵部	()	()	-	4	
-	AN - P	A2	宛形	縄目波状、 口唇LR側部、 LR側圧	結1(LR・RL) 踵部、 FLR斜部	()	()	()	4	
-	AP - P	A	口一翼	縄目波状、 LR側圧	共通部?、 FLR斜部	()	()	-	4	
-	AO - P	A	宛形	単1(R) 側圧	FLR斜部	()	()	-	4	口縁外反
-	AO - P	A	宛形	縄目波状、 結1(LR・RL) 踵部 LR側圧	FLR斜部	()	()	-	4	口縁外反やや方形基調
-	AN - P	A	口一翼下	縄目波状、 結1(LR・RL) 踵部	直前段反折PR斜部	()	()	-	4	
-	AN - P	A2	口一翼下	縄目波状、 結1(LR・RL) 踵部	直前段反折PR斜部	()	()	-	6	厚形器(1)
-	AO - P	A2	口一翼上	縄目波状、 結1(LR・RL) 踵部	FLR斜部	()	()	-	4	口縁外反
-	AN - P	A2	口一翼下	結1(LR・RL) 踵部	FLR斜部	()	()	-	6	口縁外反
-	AO - P	A2	口一翼上	LR側部・ 結1(LR・RL) 踵部	直前段反折PR斜部	()	()	-	6	
-	AM P , AN P , AM	A・ B	宛形	口唇LR側部?、 FL側圧	結1(LR・RL) 踵部、 FLR斜部	-	-	-	5	
-	AN - P	A	口一翼下	R側圧、 隆等	結1(LR・RL) 踵部、 FLR斜部	()	-	-	5	口縁部断面三角
-	AP - P	A2	口一翼上	縄目波状、 単1(R) 側圧、 隆等 単1(R) 側圧	R側部、 結1(LR・RL) 踵部、 FLR斜部	()	()	-	5	
-	AN - P	A	口一翼下	LR側部、 隆等 LR側部	FLR斜部 結線 R 踵部	()	()	-	5	

土器観察表 7

図録番号	出土地点	出土層位	部位	口唇・口縁	胴部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備考
-	AN - P AN - AN P -	B4	口一胴下	粘土結貼り付け L側圧、刺突列	肩 1(LR・RL) 横面	()		-	3	
-	AM P AL P	A	口一胴上	LR側圧?	肩 1(R) 横面	() ()		-	1	
-	AN		胴部	-	LR 2 条側圧、LR 横断面に押圧、これらも交互に無文	-	-	-	1	
-	AM P	A	口	把手付世、LR側圧、文様帯の境界・把手に竹管状刺突	円形粘土貼付け L側圧	-	-	-	1	
-	AM P	A	口一胴	円形粘土貼付け L側圧、RL側圧、文様帯の境界に円形刺突	肩 1(A・R) L 横面	-	-	-	1	
-	AN - P	A	口	波状、粘土結貼付 L側圧、斜めに刺突	-	-	-	-	3	
-	AN P	A	口	粘土結貼付 刻み 刺突文	-	-	-	-	3	
-	AN P	A	口	粘土結貼付 L側圧?、刺突文	-	-	-	-	3	
-	AN P	B	胴部	-	粘土結貼付 刻み 刺突文	-	-	-	3	
-	AN P	A	口	多条RL横面 粘土結貼付	-	-	-	-	4	
-	AN	A	口	穿孔部に横文押圧、口縁に横位沈線一条、粘土結貼付	-	-	-	-	4	
-	AO - P AP - AO - P	A	口	?	-	-	-	-	5	
-	AP - P	A	口	口縁上部断面三角形、円形刺突あり、LR横面	口縁上部断面三角形、円形刺突あり、LR横面	-	-	-	5	
-	AN - P	A	口	波状、RL横面 ナズ	-	-	-	-	9	
-	AO - P	A	口	波状、中央穿孔、結果 1(多条RL・LR)横面 粘土結貼付 L側圧	-	-	-	-	4	
-	AL		口	波状、多条RL横面 ナズ、波部くぼみあり	-	-	-	-	9	
-	AN -	B4	口	RLR横面	-	-	-	-	9	
-	AN -	B6	口	波状?、多条RLR横面	-	-	-	-	9	
-	AL		口	口縁下部に段あり、無文、口縁はやや外反する。	-	-	-	-	3	
-	AL		口	口縁下部に段あり、無文、口縁はやや外反する。	-	-	-	-	3	
-	AN - P	A	胴	-	無文、ナズ	-	-	-	3	内面に横 onのハケ
-	AN	A	胴	-	一部LR横面 沈線	-	-	-	3	
-	AM P	A	口	口縁上部先端部、無文	-	-	-	-	3	
-	AM		胴	-	LR斜面 横位沈線 3 条	-	-	-	3	
-	AO - P	A	口	口縁上部平坦、口縁外面に粘土結貼付 LR横位	-	-	-	-	3	横位沈線
-	AN	A	胴	-	LR斜面 沈線による幾何学文	-	-	-	3	
-	AN	A	口一胴	-	LR斜面 沈線による幾何学文	-	-	-	3	
-	AL		口	肩部で屈曲、口縁部外側に溝く。上部に横位沈線あり。	LR横面	-	-	-		器種 鉢
-	AL		胴	-	L斜面	-	-	-		器種 鉢
-	AN	A	胴	外周ケズりあり	内周ナズ?	-	-	-		器種 甕

礎石器観察表 1

図番号	出土地	層位	器種	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備 考	整理 番号
-	AO -	C	磨製石剣	Ja	()	()	()	()	緑泥岩	S-、刃部欠損。	
-	AP -	A	磨製石剣	Ja	()	()	()	()	石高安	基部欠損。	
-	AP -	A	磨製石剣	Ja	()	()	()	()	緑泥岩	S-2、刃部片。	
-	AO -	C	磨製石剣	Ja	()	()	()	()	緑泥岩	S-、刃部欠損。	
-	AO -	B	磨製器	Kb					緑泥岩	磨製石片を転写。側面に磨切痕あり。	
-	AN -	C	磨製器	Ka					凝灰岩	磨石・凹孔。スリ幅 mm、深い凹孔。	
-	AO -	C	磨製器	Ka					凝灰岩	球状磨石の類。磨面はざらつく。	
-	AO -	C	磨製器	Ka					安山岩	球状磨石の類。	
-	AO -	C	磨製器	Ka					流紋岩	S-、球状磨石の類。	
-	PN SW	B	磨製器	Ka					流紋岩	S-、磨石・凹孔。磨面に深いスリ。	
-	AM	A	磨製器	Ka					凝灰岩	S-、扁平磨石。スリ幅 mm。	
-	AM	A	磨製器	Ka					流紋岩	平面部に磨打痕。スリ幅6-8mm。	
-	AM	C	磨製器	Ka					凝灰岩	半円状扁平磨石に転写。スリ幅5-7mm。	
-	AO -	C	磨製器	Ka					石高安	S-、破損面に強い磨痕。スリ幅 mmと広いことから磨石に分類	
-	AN	A	磨製器	Ka	()	()	()	()	石高安	S-、三角状磨石の破片。スリ幅 mm。	
-	AN	A	磨製器	Ka	()	()	()	()	石高安	扁平磨石。欠損。スリ幅 mm。磨面に磨打痕。	
-	AQ	C	磨製器	Ka					ヒン岩	ほとんど無加工。側面に磨打痕。	
-	AN	A	磨製器	Kb					石高安	S-、磨石・凹孔。磨面に深いスリ幅 mm。	
-	AO -	B	磨製器	Kb					輝綠岩	磨石・凹孔。周縁に磨打痕が走る。	
-	AN	B	磨製器	Kb	()	()	()	()	流紋岩	S- と接合。磨石・凹孔。石片刃部状。磨打痕あり。	*
-	AN	C	磨製器	Kb	()	()	()	()	流紋岩	S-、棒状磨石の端部に磨打痕。他の要に凹孔。磨面に磨痕顯著。	
-	AQ	C	磨製器	Kb					凝灰岩	磨石・凹孔。	
-	AO -	B	磨製器	Kb					流紋岩	S-、磨石・凹孔。磨面滑らか。	
-	AN	B	磨製器	Kb					凝灰岩	S-、磨石・凹孔。	
-	AN	C	磨製器	Kb					凝灰岩	磨石・凹孔。両面に磨打痕。磨面滑らか。	
-	AN	B	磨製器	Kb					流紋岩	S-、木肌み濃緑。磨石・凹孔。磨面は滑らか。	
-	AM	B	磨製器	Kb					石高安	S-、磨石・凹孔・磨面。	
-	AP -	A	磨製器	Kb					石高安	磨石。磨面。下縁部に深い凹打痕。磨面滑らか。	
-	AP -	B	磨製器	Kb					流紋岩	磨石。両面に磨打痕。磨面滑らか。	
-	AQ	C	磨製器	Kb					凝灰岩	磨石。棒状磨石の端部に磨打痕。磨面滑らか。	
-	AN -	B	磨製器	Kb					安山岩	S-、磨石。形状は扁平磨石。	
-	AO -	C	磨製器	Kb					輝綠岩	磨石。S-、扁平な機内縁の一部に磨打痕	
-	AO -	B	磨製器	Kb					頁岩	磨石。S-、ハンマー?	
-	AN	B	磨製器	Kb					凝灰岩	S-、磨石。扁平磨石の側面に磨打痕。平面部に棒状のキズと打痕	
-	AP -	A	磨製器	Kb					凝灰岩	S-、内。扁平磨石の端部に磨打痕。	
-	AM	A	磨製器	Kc					凝灰岩	S-、凹石。平面部は滑らか。凹孔はすり鉢状で深い。	
-	AO -	C	磨製器	Kc					緑色硬	凹石。磨面の厚み。すり鉢状の凹孔。	
-	AO -	B	磨製器	Kc					流紋岩	S-、凹石。磨面平面部はよく滑らか。	
-	AN	B	磨製器	Kc					凝灰岩	S-、凹石。凹孔は磨打痕の磨面。	
-	AO -	C	磨製器	Kc					流紋岩	凹石。2面に凹孔。磨面は滑らか。	
-	AO -	C	磨製器	Kc					流紋岩	凹石。磨面平面部はよく滑らか。	
-	AN -	A	磨製器	Kc					安山岩	広く深い凹孔。台石として利用か。	
-	AN -	A	磨製器	Kc					凝灰岩	凹石。石面片利用か。磨いた石。凹孔はすり鉢状で深い。	
-	AN	A	半円状	L	()	()	()	()	ヒン岩	磨面欠損。失数品or未製品の可能性大。	
-	AN -	B	半円状	L					輝綠岩	S-、失数品の可能性大。平面部に凹孔と溝状のキズ。	
-	AO -	C+	半円状	L					安山岩	(S-) と接合。破損面に嵌り入り。スリ幅0.5-0.8mm。	
-	AP +	A	半円状	L					凝灰岩	(S-) と接合。破損面に磨痕。鉄入扁平磨製石器の可能性あり。	*
-	AO	C	半円状	L	()	()	()	()	安山岩	S-、磨面に軽いスリ磨形。スリ幅0.5-0.7mm。	
-	AM	A	半円状	L					ヒン岩	S-、寬形。磨面滑らか。スリ幅0.7-1mm。	
-	AO	C	半円状	L					流紋岩	S-、寬形。磨面に軽いスリ磨形。スリ幅0.5-0.7mm。	
-	AN	A	半円状	L					ヒン岩	板状磨。寬形。磨面ざらつく。スリ幅0.5-0.8mm。	
-	AN -	B	半円状	L					凝灰岩	板状磨。寬形。	
-	AN	A	半円状	L					流紋岩	S-、磨面にスリ磨形。スリ幅0.7-1mm。	
-	AO -	C	半円状	L	()	()	()	()	流紋岩	S-、/。板状磨。スリ幅 mm。	
-	AO -	B	半円状	L					凝灰岩	S-、寬形?。板状磨。磨面スリ磨形。	
-	AN -	B	半円状	L					凝灰岩	S-、(北沢AT) と接合。破損面に磨痕。ほぼ完全に磨元。	*
-	AO -	B	鉄入磨	M					凝灰岩	S-、ほぼ完全研磨。	
-	AO -	C	鉄入磨	M	()	()	()	()	凝灰岩	S-、先頭部破片。全体をスリ磨形。	
-	AN -	C	鉄入磨	M	()	()	()	()	安山岩	S-、刃部破。片側縁は鋭角。	
-	AN	A	鉄入磨	M	()	()	()	()	ヒン岩	S-、先頭部破片。左側縁は平坦。	
-	AR	C	鉄入磨	M	()	()	()	()	凝灰岩	体部破片	
-	AN	C	鉄入磨	M	()	()	()	()	凝灰岩	S-、破片。	
-	AO -	A	鉄入磨	M	()	()	()	()	凝灰岩	破片。磨面に磨粉化された鉄入磨の遺。丁寧なスリ磨形。	
-	AN -	C	鉄入磨	M	()	()	()	()	凝灰岩	先頭部欠損。鉄入部分は打ち欠き。	
-	AM	A	鉄入磨	M	()	()	()	()	流紋岩	S-、基部片。鉄入部分は磨打による。	
-	AO	A	鉄入磨	M	()	()	()	()	凝灰岩	S-、先頭欠。刃部V字状。	
-	AO -	C	鉄入磨	M	()	()	()	()	凝灰岩	S-、基部破片。全体をスリ磨形。破損面に2-3mmの平坦部。	
-	AO -	C	鉄入磨	M	()	()	()	()	凝灰岩	鉄入部に入り。	
-	AN -	B	鉄入磨	M	()	()	()	()	安山岩	基部破片と思われるが、鉄入部分は出されていなし。磨切具?	
-	AN -	C	鉄入磨	M	()	()	()	()	凝灰岩	S-、基部。	
-	AN	B	鉄入磨	M	()	()	()	()	凝灰岩	S-、基部破片。鉄入部分はスリ。	
-	AN	A	鉄入磨	M					凝灰岩	S-、やや磨粉化スリ磨形。未製向か。	

礎石器観察表2

図番号	出土地	層位	器種	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備 考	整理番号
-	AM	A	石笄	N					凝灰岩	S-。全体着筋打製。広いスリ溝(=)	
-	AN + AM	B + C	磨切具	S					流紋岩	S-。4辺が滑。炭化物付。表面に磨耗なすり痕あり。	*
-	AO		磨切具	S					石炭安	板状。半円形に磨。表面には粗粒なすり痕あり。	
-	AO + AN	C	磨切具	S	()	()	()		安山岩	S-。と滑。板状。上下側面に刃。加工は粗。ほか	
-	AN - B		磨切具	S ()	()	()	()		凝灰岩	S-。一部欠損。	
-	AN - B		磨切具	S ()	()	()	()		凝灰岩	S-。破片。刃部磨面V字状。	
-	AO - C		磨切具	S ()	()	()	()		安山岩	破片。板状。刃部は丸みを付。	
-	AN - B		石皿	Oa	()	()	()		石炭安	S-。木組み遺構。完形。両面利用。裏面の痕跡。	
-	AN - A		石皿	Oa	()	()	()		凝灰岩	S-。木組み遺構。欠損。両面利用	
-			石皿	Oa	()	()	()		安山岩	(号埋設土器出土)と滑。両面利用。表面は磨付窪む。の裏面には深い溝の痕跡が見られる。	
-	AN - C		石皿	Oa ()	()	()	()		凝灰岩	S-。板状。表面は磨加工。欠損。	
-	AN - B		石皿	Oa	()	()	()		石炭安	S-。木組み遺構。完形。両面利用	
-	AO + PN SW	C	石皿	Oa ()	()	()	()		石炭安	(P-)と滑。欠損。表面やや窪む。表面面に打痕。	*
-	AN - B		石皿	Oa	()	()	()		凝灰岩	S-。完形?。片面利用	
-	AO - A		石皿	Oa ()	()	()	()		安山岩	S-。破片。片面利用	
-	AN - C		台石	Ob	()	()	()		石炭安	S-。2片が滑。大型の砥石の可能性もある。両面使用。	
-	AN - B		台石	Ob	()	()	()		凝灰岩	S-。木組み遺構。完形。早期型に溝を形成する特徴あり。	
-	AN - B		台石	Ob	()	()	()		流紋岩	細粒。よく削製。磨面滑らか。	
-	AN - A		台石	Ob	()	()	()		凝灰岩	S-。磨面滑らか。広い打痕。	
-	AO - C		台石	Ob	()	()	()		流紋岩	S-。角柱状。表面面に溝状の小さなキズ。	
-	AO + AO - B	C + B	砥石	R	()	()	()		流紋岩	と滑。片面に磨面。	
-	AO + AN - B	B + B	砥石	R	()	()	()		凝灰岩	と滑。石皿片を再利用か。上部に溝状の研磨痕。	*
-	AN - A		石棒	Q	()	()	()		凝灰岩	S-。長軸面を打凸き。	
-	AO - C		石棒	Pa	()	()	()		石炭安	磨面全体に磨いすり。	
-	AN - B		石棒	Pa	()	()	()		石炭安	S-。表面は早期型で滑らか。	
-	PN SW - C		石棒	Pa	()	()	()		石炭安	S-。表面は特に滑らか。	
-	AO - C		石棒	Pa	()	()	()		石炭安	磨面全体が滑らか。	
-	AN - B		その他	Ta	()	()	()		緑泥質 磨製石灰石。磨切面あり。		
-	AM - B		その他	Ta	()	()	()		流紋岩	P-。右側に磨切面。半円状入歯の可能性もある。	
-	AN - A		その他	Ta	()	()	()		凝灰岩	S-。磨石?。片面が特に滑。	
-	AN - B		その他	Ta	()	()	()		凝灰岩	S-。扁平な円錐。磨面全体にすり磨。滑らか。磨石の類?。	
-	AN - A		その他	Ta	()	()	()		安山岩	S-。破片を再利用?。表面は平滑。	
-	AN - B		その他	Ta	()	()	()		流紋岩	S-。磨面は滑らか。砥石の可能性あり。	

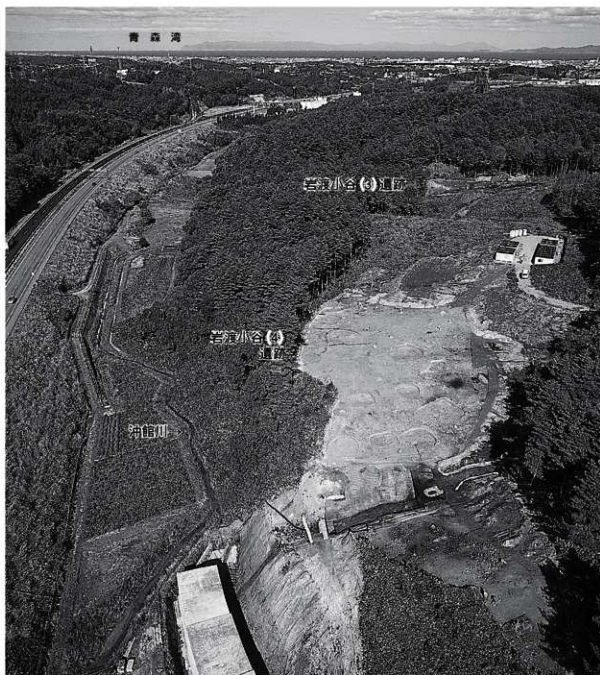
土製品一覧表

図番号	器 種	出土地	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備 考	整理番号
-	円盤状土製品	沢	AO	B	()	()	()		土器片利用の円盤。破片。P-。	
-	円盤状土製品	沢							土器片利用の円盤。完形。貫通孔あり。周縁の大部分すり。P-。	
-	円盤状土製品	沢 9	AN - C						土器片利用の円盤。完形。周縁すり。P-。	
-	円盤状土製品	沢	AO - C	()	()	()	()		土器片利用の円盤。破損。方形。P-。	
-	円盤状土製品	沢 5ベルト	C						土器片利用の円盤。	
-	円盤状土製品	沢							土器片利用の円盤。完形。	
-	円盤状土製品	沢	AN - B						土器片利用の円盤。完形。P-。	
-	円盤状土製品	沢	AP -	()	()	()	()		円盤状土製品。表面面に縄文様。破片 /。	

石製品一覧表

図番号	器 種	出土地	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備 考	整理番号
-	石塊	沢	AN - C	()	()	()	()		凝灰岩	一部破損。
-	筒状	沢 ベルト	AN - C						細粒凝灰岩	一部破損。
-	不明	沢	AN - B						緑石	中央に凹み。5-7孔。
-	浮き?	沢	AP - A						緑石	完形。三角形。貫通孔あり。
-	不明	沢	B						細粒凝灰岩	中央に凹み。5-。
-	浮き	沢	C						緑石	縁部割。十字状の刻み。S-。
-	不明	沢	AN -						緑石	四角形。素材?
-	不明	沢	AO - A						緑石	長方形。素材?
-	長條円	沢	AO - C						緑石	棒状
-	不明	沢	AN - B						緑石	棒状

写真図版



遺跡遠景 南から

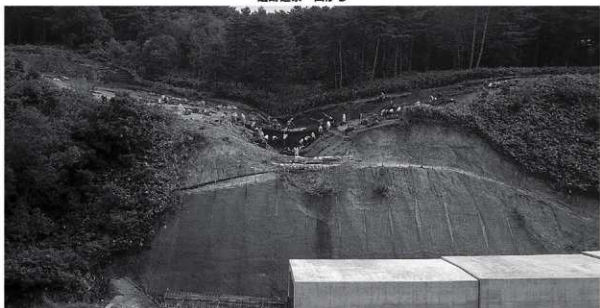


遺跡遠景

写真1 遺跡遠景1



遺跡近景 西から



遺跡遠景 西から

写真2 遺跡遠景2



沢 ・ ベルト土層 南東から



沢 ベルト土層(アップ) 西から



沢 ベルト土層 西から



沢 ベルト土層中央 西から

写真3 層序1



調査区境界土層 西から



調査区境界土層(アップ)



支流 ~ ベルト土層 南から



AN57基盤土層 西から



ベルト土層付けたし 西から



AN55・54付近基盤土層 西から



検出状況1 西から



検出状況2 南東から



東側からの検出状況 東から

写真5 第1号木組遺構(全体1)



全体検出状況 南から



全体検出状況 北から



全体検出状況 南から(アッパ)

写真6 第1号木組遺構(全体2)



導水路検出状況 北から



導水路検出状況 西から



導水路検出状況 東から

写真7 第1号木組遺構（導水・貯水部1）



貯水部東側・木枠部分 南西から



杭検出状況
(30-4)他
東から



杭検出状況(40-3)他 東から



貯水部東側検出状況 北から



杭検出状況 南から



貯水部木組部分 南から

写真8 第1号木組遺構(貯水部2)



貯水部内 東から



貯水部分検出状況 北から



44-1 先端部(北側) 南から

土器出土状況 南から

石斧柄末製品出土状況 北から



貯水部北柵外側検出状況 北から

写真9 第1号木組遺構(貯水部3)



堰部検出状況 東から



堰部南側(アップ) 南から



堰部側面 南から

写真10 第1号木組遺構(堰部1)



埋部(第3・4列)と底板検出状況 北から



埋部(第4列)と底板検出状況 南から

写真11 第1号木組遺構(埋部2)



堰部(第4列)側面 南から



回転用杭(31-3)検出状況 東から



堰部(第4列)後方杭検出状況 東から

写真12 第1号木組遺構(堰部3)